



第22回

# 全国棚田 **千枚田** サミット

| 報 | 告 | 書 |

平成28年 7月14日(木)～16日(土)

棚田の価値を知り・活かし・継承するために

## 棚田には夢がある！



佐渡棚田フォトコンテスト入選作品「朝日に脈打つ」川口 昌紀（岩首棚田）

開催地：新潟県佐渡市





# 第22回 全国棚田 千枚田 サミット 報告書



## INDEX 目次

開催日程	4
共同宣言	6
開催風景	10
開会式	19
事例発表	26
基調講演	29
第1分科会	30
第2分科会	44
第3分科会	57
棚田のまもりびとミーティング	71
首長会議	75
U30 棚田サミット	86
分科会まとめ	98
閉会式	101
全国棚田(千枚田)連絡協議会 理事会	103
全国棚田(千枚田)連絡協議会 総会	104
資料	105

佐渡棚田フォトコンテスト入選作品  
「うねる黄金道」伊藤 善行 (岩首棚田)

# 第22回 全国棚田（千枚田）サミット 開催日程

平成28年7月14日(木)

時間	行事内容	場所（会場）
13:30～ 14:00	◆オープニング 新潟県立羽茂高等学校郷土芸能部 芸能発表 佐渡市立金井小学校児童合唱	アミューズメント佐渡 大ホール
	◆開会式	
14:00～ 14:30	◆事例発表 新潟県立佐渡総合高等学校	アミューズメント佐渡 大ホール
14:30～ 14:50	◆基調講演 (株)日本総合研究所 主席研究員 藻谷 浩介 氏	
14:50～ 15:50	◆分科会 第1分科会 棚田には米がある！ ～棚田の米を活かせば、たくさんの夢が広がる～	アミューズメント佐渡 大ホール
	第2分科会 棚田には命がある！ ～棚田が支える命と共生し活かせば、たくさんの夢 が広がる～	
	第3分科会 棚田には温（ぬくもり）がある！ ～棚田の温（ぬくもり）を活かせば、たくさんの夢 が広がる～	サンテラ佐渡 スーパーアリーナ 柔剣道場
	◆棚田のまもりびとミーティング	アミューズメント佐渡 研修室
	◆首長会議	佐渡中央会館 集会室
16:30～ 18:00	◆U30棚田サミット	アミューズメント佐渡 文弥人形室
	◆全体交流会	サンテラ佐渡 スーパーアリーナ
18:30～ 20:30	◆全体交流会	サンテラ佐渡 スーパーアリーナ

平成28年7月15日(金)

時間	行事内容	場所（会場）
8：30～ 12：00	◆棚田現地視察	・岩首棚田コース
		・北片辺棚田コース
		・小倉千枚田コース
		・バスで巡る佐渡の里山里海コース
13：00～ 13：30	◆分科会まとめ	アミューズメント佐渡 大ホール
13：30～ 14：00	◆閉会式	アミューズメント佐渡 大ホール

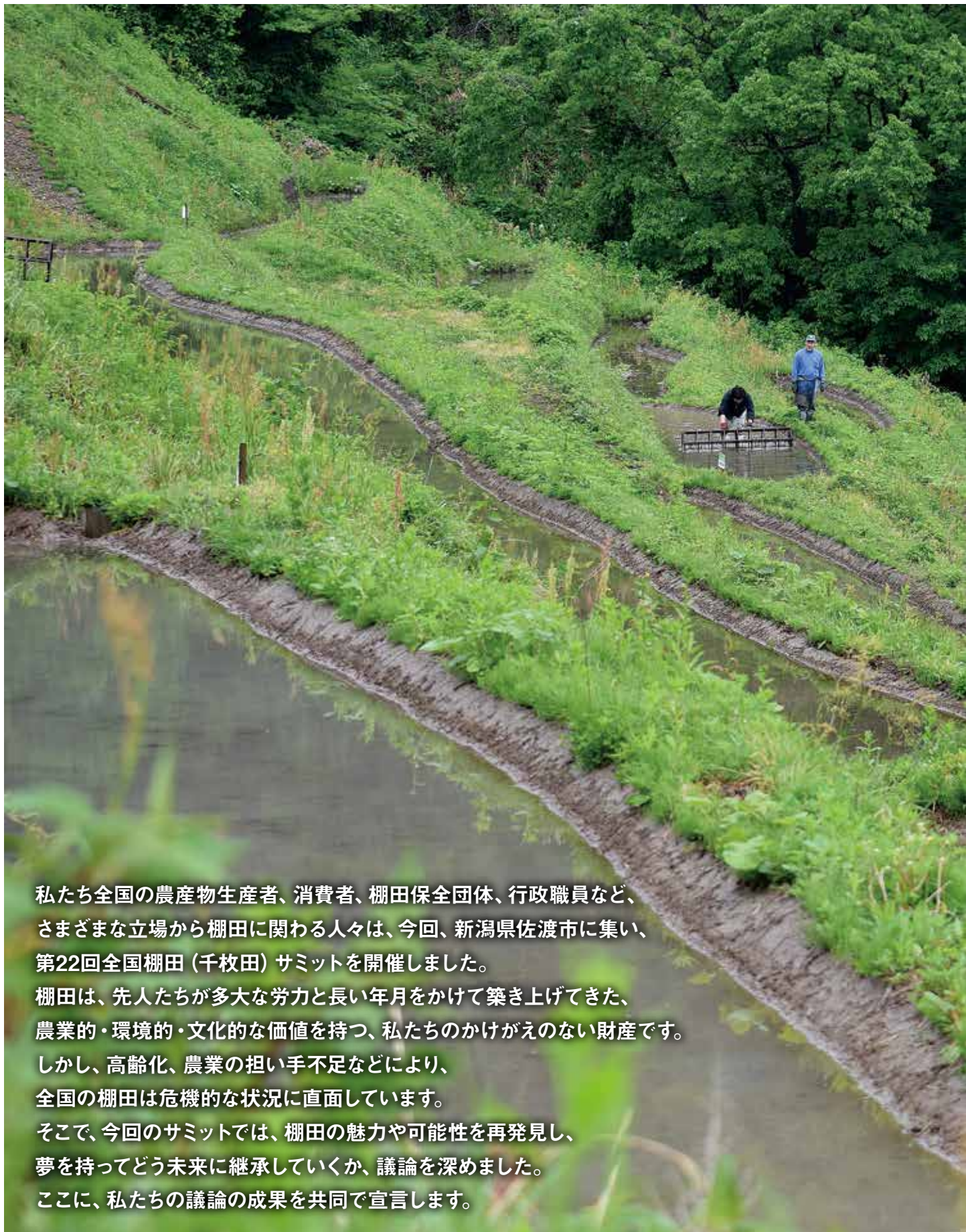
時間	行事内容
14：30～ 17：30	◆交流プログラム 相川中学校ガイドと佐渡金山近代化遺産 尖閣湾見学と民話語り 行谷小学校トキガイドとトキ野生復帰 高千中学校文弥人形と天然杉ハイキング（16日と2日間通し）

平成28年7月16日(土)

時間	行事内容
9：00～ 15：00	◆交流プログラム 名物！漁師町姫津のイカイカ祭り見学

佐渡棚田フォトコンテスト入選作品 「棚田の夜明け」金子 大一（岩首棚田）

## 第22回全国棚田（千枚田）サミット 共同宣言



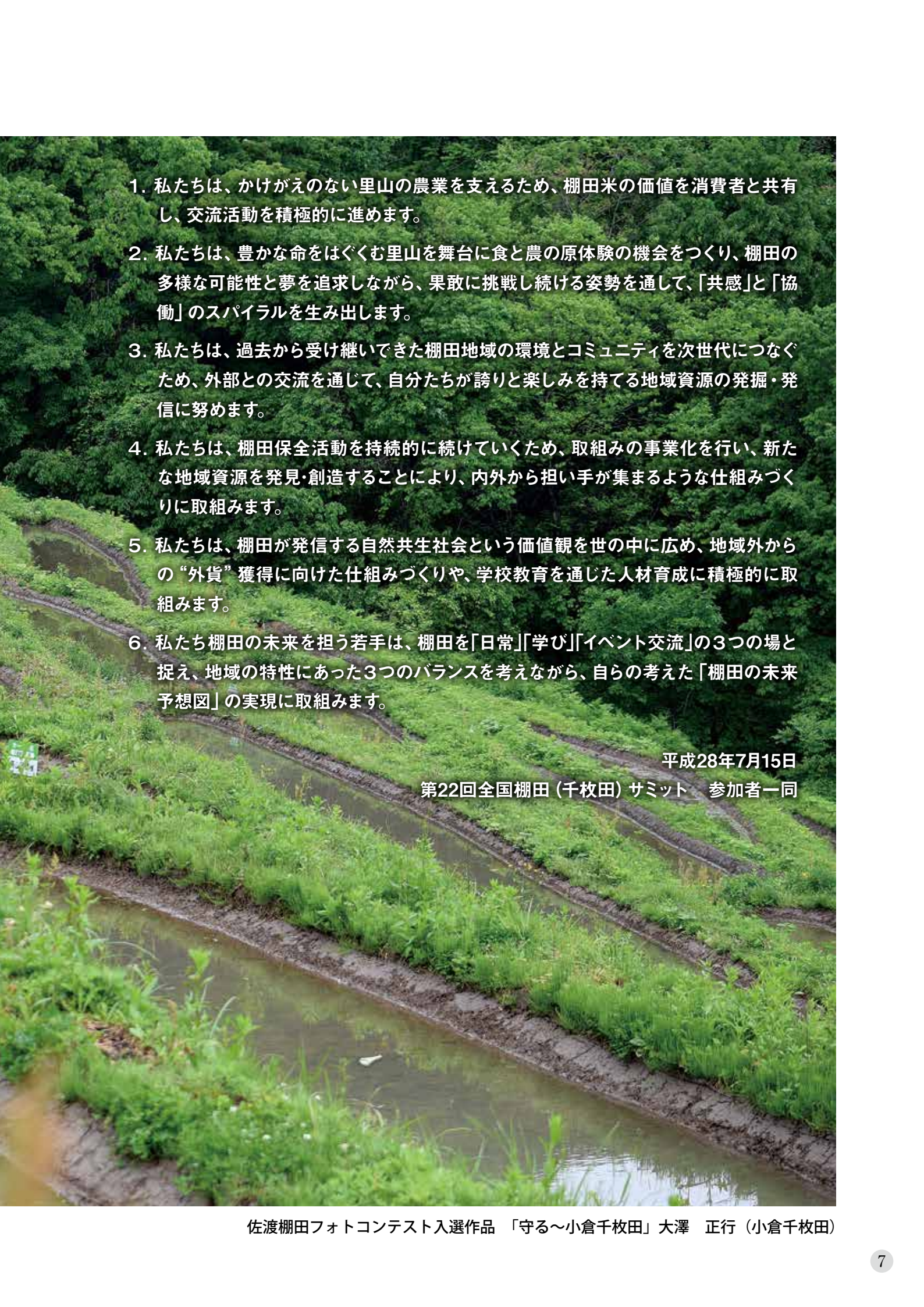
私たち全国の農産物生産者、消費者、棚田保全団体、行政職員など、さまざまな立場から棚田に関わる人々は、今回、新潟県佐渡市に集い、第22回全国棚田（千枚田）サミットを開催しました。

棚田は、先人たちが多大な労力と長い年月をかけて築き上げてきた、農業的・環境的・文化的な価値を持つ、私たちのかけがえのない財産です。

しかし、高齢化、農業の担い手不足などにより、全国の棚田は危機的な状況に直面しています。

そこで、今回のサミットでは、棚田の魅力や可能性を再発見し、夢を持ってどう未来に継承していくか、議論を深めました。

ここに、私たちの議論の成果を共同で宣言します。

- 
1. 私たちは、かけがえのない里山の農業を支えるため、棚田米の価値を消費者と共有し、交流活動を積極的に進めます。
  2. 私たちは、豊かな命をはぐくむ里山を舞台に食と農の原体験の機会をつくり、棚田の多様な可能性と夢を追求しながら、果敢に挑戦し続ける姿勢を通して、「共感」と「協働」のスパイラルを生み出します。
  3. 私たちは、過去から受け継いできた棚田地域の環境とコミュニティを次世代につなぐため、外部との交流を通じて、自分たちが誇りと楽しみを持てる地域資源の発掘・発信に努めます。
  4. 私たちは、棚田保全活動を持続的に続けていくため、取組みの事業化を行い、新たな地域資源を発見・創造することにより、内外から担い手が集まるような仕組みづくりに取組みます。
  5. 私たちは、棚田が発信する自然共生社会という価値観を世の中に広め、地域外からの“外貨”獲得に向けた仕組みづくりや、学校教育を通じた人材育成に積極的に取組みます。
  6. 私たち棚田の未来を担う若手は、棚田を「日常」「学び」「イベント交流」の3つの場と捉え、地域の特性にあった3つのバランスを考えながら、自らの考えた「棚田の未来予想図」の実現に取組みます。

平成28年7月15日

第22回全国棚田(千枚田)サミット 参加者一同

# 佐渡棚田フォトコンテスト入選作品



「棚田を守る」渡辺 昭子 (小倉千枚田)

棚田には  
夢がある



「親子」渡辺 治 (岩首棚田)





「泥んこバレー応援隊」引野 晃（北片辺棚田）



「車田植え」渡辺 トシエ（北鷯島棚田）



「棚田シルエット」中野 金吾（岩首棚田）

## ◆開催風景

### オープニング

佐渡市立金井小学校による「おそすぎないうちに」の合唱とオープニングメッセージ



新潟県立羽茂高等学校郷土芸能部による佐渡民謡と踊りの芸能発表



### 開会式



事例発表 新潟県立佐渡総合高等学校



基調講演 (株)日本総合研究所 主席研究員 藻谷浩介氏



第1分科会 「棚田には米がある！」



第2分科会 「棚田には命がある！」



第3分科会 「棚田には温（ぬくもり）がある！」



棚田のまもりびとミーティング



首長会議



U30 棚田サミット



## ◆開催風景

### 全体交流会



小倉物部神社鬼太鼓披露



なぎさ会おけさ披露

写真提供 押川 毅

特産品抽選会 (佐賀県玄海町)



### 佐渡の地酒



佐渡棚田米提供

写真提供 押川 毅



地元食材を活用した郷土料理



写真提供 押川 毅

## ◆開催風景

棚田現地視察

岩首棚田コース



地元の子ども達によるお見送り



地元の子どもによるおもてなし



北片辺棚田コース



7月15日

小倉千枚田コース



長谷寺



バスで巡る佐渡の里山里海コース



丸山の棚田

小倉千枚田遠景



# ◆開催風景

7月15日



分科会まとめ



共同宣言



閉会式



## 次期開催地あいさつ

波佐見町のゆるキャラ  
「はちやまる」



長崎県波佐見町



## 交流プログラム

### 相川中学校ガイドと佐渡金山近代化遺産



### 尖閣湾見学と民話語り



尖閣湾



民話語り

### 行谷小学校トキガイドとトキ野生復帰



### 高千中学校文弥人形と天然杉ハイキング

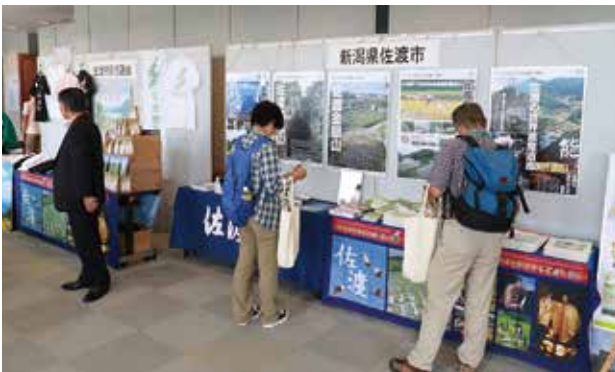


### 名物！漁師町姫津のイカイカ祭り見学



# ◆開催風景

## 会場内



開 | 会 | 式

連絡協議会会長  
あいさつ

全国棚田（千枚田）  
連絡協議会会長（佐賀県玄海町長）

岸 本 英 雄



皆さんこんにちは。ようこそ佐渡へ、来ていただきましてありがとうございます。

実は去年、私は佐賀県玄海町で同じことを申し上げました。でも今回佐渡におじゃまして、本当に佐渡の皆さんの熱意を感じて今日は感激しました。本当はいっぱい考えていたのですが、さっきの羽茂高校さんの郷土芸能部の演舞を見て、それから小学生の歌を聞いて、完全に頭が真っ白になってしまいました。子供の教育は大事だなということを本当にしみじみと感じたところでございます。

全国棚田サミットは、もう22回目を迎えています。日本において、この棚田というのがいかに価値のあるものなのか、これをぜひ私は地域の間人だけがそれを持っていてもダメなのではないかと感じています。都会の人も地方の人もみんなが棚田の本当の良さを知ってもらえる作業を、私達、連絡協議会ではやっていきたいと思っております。それをやらないと、本当の意味での日本という国の食糧自体の維持が出来なくなっていくのではないかと思っております。皆さんご承知かと思いますが、アメリカにしてもフランスにしても、ドイツにしてもイギリスにしても、食糧自給率は非常に高い数値を示しています。こんなに食糧自給率が低いのは日本だけです。これで本当に日本という国が未来に成り立っていきけるのかどうか、大変心配をしております。

その中でこれだけ日本全国から棚田をお持ちの皆さんがこの佐渡に結集していただいて、棚田をずっと続けていこうという会合が開けるといことは、食糧自給率をもっと上げていかなければならないという事も含めて、日本人はまだまだ十分に頑張れるぞという気概を与えてくれているような気がします。ぜひ皆さん方の力をお借りしながら、今後もこの棚田サミットを毎年、毎年継続をしていって、

さらに大きな大会にして日本人みんなが、棚田って本当に夢があるなあと、棚田ってすごいなと思っていただけるように今後目指してやっていきたいと思っております。

今日は幸いなことに、泉田知事の代わりに寺田副知事さん、細田衆議院議員さん、北陸農政局長の小林さんが来ていただいています。それから鷲尾さんも、武内先生も来ていただいていますので、そういったところは国にも投げ掛けをしながら、県にも投げ掛けをして、本当の地方の維持を、これから我々で考えていける今回の会合になりますことを心から祈念を申し上げて私からのご挨拶にさせていただきます。どうぞ明日まで皆さんよろしくお願いたします。



## 実行委員会会長 あいさつ

第22回全国棚田(千枚田)サミット  
佐渡市実行委員会  
会長(新潟県佐渡市長)

### 三 浦 基 裕



皆様、ようこそ佐渡へお出でくださいました。オープニングの羽茂高校生徒の芸能発表及び金井小学校児童の合唱をお楽しみいただきましたでしょうか。私も特に羽茂高校の芸能発表はいつ見ても涙が潤んでしまい、自分らの後輩を頼もしく思っております。彼らが今日のパフォーマンスをきっちりやっていた後で、私が挨拶をとちるわけにいきませんが第22回全国棚田(千枚田)サミットの開催にあたりまして、一言ご挨拶させていただきます。

まず、先般4月の熊本地震でお亡くなりになられた方々に冥福と、被災された多くの皆様に心よりお見舞い申し上げ、1日も早い復興をお祈りいたします。

今回で22回を迎える棚田サミットは、離島としては初めてこの佐渡市を会場として開催されます事を誇りに思うとともに、全国の棚田地域をはじめ、世界農業遺産認定地域で活動されている生産者、団体、自治体など関係者の皆様、さらには研究機関、企業、消費者など本当に多くの皆様から佐渡市にお越しいただきましたことを心より歓迎申し上げます。この佐渡は雄大な島の成り立ちや、佐渡金銀山の影響を大きく受け、この島独特の棚田風景や生物多様性豊かな里山環境が作られ継承されてきたことなどが評価され、2011年に世界農業遺産に認定されました。世界農業遺産は効率化・近代化が進む農業において、農村地域で引き継がれてきた伝統的農業や小規模農業の価値を見直し、社会情勢が大きく変化していく中においても、進化しながら引き継いでいく「知恵の遺産」とも言われております。この知恵の遺産は、認定されている佐渡や能登地域をはじめ他の6地域のことだけでなく、日本全国の棚田・里山地域も同様で、歴史があり人々の知恵や活動で

これまで受け継がれてきています。しかしながら、依然として棚田地域をはじめ地方を取り巻く環境は厳しく、少子高齢化により担い手不足をはじめ、その持続可能性が危ぶまれています。また、急激な社会情勢の変化や、このたびの熊本地震などの自然災害などにも対応できる、強く、持続可能な地域づくりが急務となっております。

今回のサミットでは、棚田地域の持続可能性を高めるため「棚田には夢がある！棚田の価値を知り・活かし・継承するために」をテーマとして、基調講演では里山資本主義の藻谷浩介さんから、日本を変えることが出来る里山と棚田の価値や持つ力を中心にご講演いただきます。その棚田や里山の価値を見直し、農業の持続可能性を高めることを目的として、2011年に認定されました世界農業遺産を地元の佐渡総合高校の生徒が分りやすく発表をしてくれます。さらに、棚田の夢を実現するため、若い担い手を中心とした「U30棚田サミット」を企画するなど、その内容にこだわった6つの分科会で議論を深め、現地視察では、それぞれの特徴のある棚田を見て・歩いて・感じていただけるだけでなく、現地の人と触れ合って、棚田地域での暮らしの価値を再認識していただければと思っております。

ここにお集まりいただきました参加者全員が、棚田の夢に気づき、その夢を実現するために、それぞれの棚田地域に帰ってからなにがしかの具体的な行動に移せるようなヒントをこのサミットで見つけていただけることを祈念申し上げます。開会の挨拶といたします。本日ありがとうございました。

## 開催地歓迎 あいさつ

新潟県知事 泉田裕彦  
代理 新潟県副知事

寺田吉道



皆さんこんにちは。22回目の全国棚田（千枚田）サミットの開催を本当におめでとうございます。今日は泉田知事がどうしても参る事が出来ませんでしたので、私副知事の寺田が代わりに、皆さんに歓迎とお祝いのご挨拶をさせていただきたいと思えます。

棚田の魅力についてもう申し上げるまでもありませんけれども、先ほどの羽茂高校郷土芸能部の皆さんの踊りと唄、そして金井小学校の皆さんの歌と言葉を聞いているだけで、棚田や棚田が育んできた文化が素晴らしくてジーンとする思いがしました。本当に人の心に染み入るといふか、人の心を揺り動かす素晴らしい存在だということに思います。是非この日本の原風景と言いますか、佐渡の原風景、新潟の原風景である棚田と棚田をめぐる様々な文化、これを後の世代にしっかりと守り・引き継いでいかないといけないということが私達の世代の指命なのかなと改めて感じました。

今回のサミットのテーマで「棚田には夢がある！  
米がある・命がある・<sup>ぬくもり</sup>温がある」、こういう素晴

らしいテーマを掲げられてご議論いただくと伺っております。ちょうど今、佐渡と新潟県も一緒になってやっておりますけれども、佐渡の方では金銀山の世界文化遺産の登録を目指しております。すでに世界農業遺産の認定はされておりますけれども、こうした取り組みを進めていくにあたって、この全国サミットの意義というのはすごく深いものだと思いますし、更に取り組みを発展させるためにも、今回の全国棚田（千枚田）サミットが大きな弾みになるのではないかなと期待をしております。

また今日お集まりの全国の皆さんも、是非この佐渡での盛り上がり、佐渡・新潟だけに留まらず、更に全国へ大きなうねりとなって、より勢いが付いていく事を期待したいと考えております。

最後になりますが、今日・明日の今回のサミットが例年にも増して充実したものとなること、それからお集まりの皆様方のさらなるご活躍を祈念いたしまして私からのご挨拶とさせていただきたいと存じます。本日は本当におめでとうございます。



## 来賓祝辞

自由民主党衆議院議員

細田 健 一 氏



皆さんこんにちは。ようこそ佐渡へいらっしゃいました。ただ今ご紹介をいただきました佐渡を含む地元新潟2区選出の衆議院議員細田健一でございます。よろしく願いいたします。改めまして棚田（千枚田）サミットの開催を心からお喜びを申し上げますとともに、全国各地から皆様方にご来島いただいたことに、心から御礼を申し上げます。棚田というのは農民・農家のピラミッドであると承っておりますが、その維持・管理・補修というのは本当に誠に気が遠くなるような労力を要する作業だろうと考えております。皆様方が、本当に大変なご努力を日々されて棚田・千枚田の維持・管理に尽しておられることに心から敬意を表します。棚田・千枚田が本当に様々な価値を提供していると思います。農業で言いますと、良質の水の供給を通じて非常に食味の良いお米がとれるのではないかと思いますし、また、環境保全・治水・景観、その他色々な、あるいは地域の絆の形成といった様々な多面的な価値を棚田・千枚田が提供していると考えております。

今回のこのサミットの開催を契機として、これらの価値が再認識されて、さらに棚田・千枚田の維

持・保全・活性化の活動がさらに活発になることを改めて心から祈念をしております。

なお、先ほどお話がございましたこの佐渡、棚田・千枚田の非常に重要な景観ではございますが、佐渡の魅力はそれだけではございません。先程お話がございました世界遺産登録を目指している佐渡の金銀山でありますとか、あるいはトキの保護施設といったものもございます。あるいは佐渡には新潟有数の酒蔵もたくさんございますし、またその中の多くは観光客の皆様方を受け入れております。あるいは小木や宿根木といったような独特の景観のある街並みもございます。ぜひ皆様方この機会に、この佐渡の魅力の十二分に味わい尽していただければと考えております。

改めまして今回のサミットを契機に、棚田・千枚田の保全をめぐる活動がさらに活性化すること、そして全国各地からご来島いただいた皆様方と佐渡の友情が新しく育まれることを改めて心から祈念をいたしまして私の簡単な挨拶の結びとさせていただきます。本日も来島をいただきまして本当にありがとうございました。

## 来賓祝辞

民進党衆議院議員

鷺尾 英一郎 氏

代理 仲川 殖子 氏



第22回全国棚田（千枚田）サミットのご開催おめでとうございます。鷺尾英一郎の代理で参りました鷺尾英一郎事務所仲川殖子と申します。鷺尾本人お招きにあずかりこの日を心待ちに致しておりましたが、急遽出席が叶わず大変申し訳なく思っている次第でございます。本人よりメッセージを預って参りましたので代読させていただきます。

第22回全国棚田（千枚田）サミットが開催されますことをお喜び申し上げます。日頃より格別のご厚情を賜り厚く御礼申し上げます。昨今の棚田を取り巻く環境は時代の流れにより一層厳しさを増しております。棚田の文化と景観保全を守るため、積極的に真摯なご活動を続けておられます関係各位の皆様の並々ならぬ日々のご努力に、衷心より誠意を表し深く感謝申し上げます。本日は棚田の保全と継承へ向け、ぜひ活発なご議論を交していただき、地域で自分らしく暮らすうえで真に必要なものの実現のため、私も微力ではございますが皆様のご指導とご鞭撻を賜りながら国政の場から努めてまいります。

結びに、本年の棚田サミットが子供たちに地域の宝を残すためにも、素晴らしいものとなりますよう、そして本日まで参集の皆様方のご健勝とご多幸を心から祈念申し上げメッセージといたします。

平成28年7月14日

衆議院議員 鷺尾英一郎 代読

本日は誠におめでとうございます。

## 来賓祝辞

農林水産省北陸農政局局長

小林 厚 司 氏

皆さんこんにちは。ただ今ご紹介をいただきました北陸農政局の小林でございます。第22回全国棚田(千枚田)サミットが世界農業遺産の島佐渡で、このように多くの皆さんご出席のもとに盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。またサミットの開催にあたり、佐渡市そして新潟県、また関係者の多くの皆さんのご尽力により開催されますことを心から深く敬意を表しますとともに、感謝を申し上げる次第です。特に先ほどの羽茂高校の生徒さん方の踊り、私も前に新潟にりましたが、「佐渡おけさ」以外知らなかったのですが、その「佐渡おけさ」のバージョンアップや、素晴らしい踊りを見せていただきました。そして金井小学校の生徒さん方、こういう子供さん方が棚田をこれから守ってってくれたら、決して暗いばかりでなく、先が非常に明るい面が出てきたということを改めて感じた次第でございます。

さて、今日は14日ですけれども、3カ月前、熊本地方で震度7、2回も立て続けに起き大変な被害が出ております。犠牲になられた方に対し心からお悔やみを申し上げますとともに、被災された皆さんにお見舞いを申し上げます。

今回、第22回の棚田サミットを迎えるわけですが、北陸管内では過去に新潟県の上越市・元安塚町、そして石川県の輪島市、そして新潟県の十日町市に続きまして今回が4回目でございます。新潟県では3回目の開催ということになります。私事ではありますが、私もこの棚田(千枚田)サミットに今回出席が3回目でございます。こうして皆様方にまたお会い出来ますことを本当に感謝申し上げます。

今回のサミットテーマが「棚田には夢がある！棚田の価値を知り・活かし・継承するために」とい

うことであります。棚田をめぐる情勢は大変厳しいものがありますが、棚田の価値は農業生産に限らず、国土の保全あるいは自然環境の保全、歴史文化といった観点からも大変重要な役割を担っていると考えております。農林水産省でも「棚田百選」であったり「棚田基金」の創設、あるいは中山間地域の直接支払制度などによりまして、これまで支援の取り組みをさせていただいてきましたが、今後とも棚田を含む中山間地域の振興に全力を尽したいと考えております。

そういった中で、最近、棚田を中心に多くの人のつながりが出てきていると感じています。また、集落の境界なども越えて、地域全体で新たな地域づくりというものが始まっていると感じています。例えば、棚田米などの生産、あるいは販売といったことで、農業生産だけでなく、それを加工し、またそれを販売する6次産業化といったような取り組みも各地で広がってきております。こうした人のつながりの経緯もありまして、熊本県の被災地域に対し、この棚田連絡協議会の皆様方のご縁もあろうかと思いますが、全国からの応援や支援物資が届いていると伺っています。まさに支援の輪が広がっているということだと思っております。

また管内の事例で申し上げますと、石川県の能登で白米千枚田というところがありますが、ここで地元の大学生のサークルメンバーが中心となりまして、田んぼの畦塗りや、田植え、草取りそして収穫まで、棚田の保全活動に一生懸命やっていた事例が出てきています。この輪が全国に広がってきていると思っております。今日ここにお集まりの皆さんもずっと棚田に関わってきている皆さんだと思いますが、先人から引き継いだこの棚田の新しい形で、新しい活性化の道が開かれてきていると感じています。サミットに集う皆様方が今日・明日ともに語り合い、そして励まし合い、明日に向けて新たな勇気と力を育まれて、これからの棚田の活動に活かしていただければ幸いです。

結びになりますが、このサミットの成功とそして美しい日本の棚田が新しい価値を創造しながら、後世に引き継いでいかれる事を祈念申し上げ、またご参集の皆様方のご健勝、益々のご活躍を併せて祈念申し上げましてお祝いの言葉とさせていただきます。本日はおめでとうございます。



## 来賓祝辞

東京大学サステナビリティ学  
連携研究機構長

武内和彦氏

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました武内でございます。本日、第22回全国棚田(千枚田)サミットがこの佐渡で開催されますこと、心よりお慶びとお祝いを申し上げます。私ども東京大学と、私が先月まで上級副学長を務めておりました国連大学は、2010年ごろから佐渡市さんと密接な関わりを持たせていただいております。特に何人かの方からお話のあった世界農業遺産、これが先進国で初めて佐渡と能登が認定されたわけですが、その認定に際しましても、私ども協力をさせていただきました。そうした結果として、このようなサミットの中で世界農業遺産を皆さんに語っていただけるのは大変嬉しく思っております。後ほど佐渡総合高校の生徒さんから世界農業遺産についての発表があると聞いてお喜び、これも私ども大変嬉しく思っているところでございます。

私ども東京大学はそれ以外にも、持続可能な再

生可能エネルギーと地域の地場産業や農林水産業をうまく組み合わせて相乗効果が発揮できないかというプロジェクトを佐渡の各地で展開させていただいております。また今年度からは、環境省のご支援を得まして、地域の自然資本・生態系サービスを最大限活用した地域振興のあり方についての研究を、今後5年間推進していくこととなっております。そうしたことから、本日三浦佐渡市長と私で、双方のこれからの連携に関する覚え書きを締結させていただいたところでございます。

言うまでもなく、棚田や千枚田というのは、日本のみならず世界各地で、とりわけアジア各地で注目される農業遺産でございます。しかしこの遺産は、決して過去のものではありません。「棚田には夢がある！」という今回のテーマのように、まさに未来にどう継承していくかが大きな課題であり、これから私達が未来志向で取り組むべき課題だと認識しております。そういう意味で、この棚田(千枚田)サミットを通して、これからの自然豊かで文化溢れる、しかも人々が経済的にも自立出来るような、新しい農業のモデルにつながっていくことが大いに期待できます。そうした期待も含めまして、このサミットの成功を心よりお祈り申し上げたいと思います。そして全国各地から本日ご参列の皆さん方の地域におかれましても、またそれ以外の地域におきましても、こうした取り組みがさらに発展することを祈念いたしまして、そしてまたご参列の皆様方のご健勝も祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。



# 「世界農業遺産を通じて考える 島の成り立ちとこれから」

発表者 新潟県立佐渡総合高等学校

- ジアスってなあに？世界農業遺産ってなあに？佐渡の人ならば言葉はどこかで聞いたことがあるのではないのでしょうか。しかし、内容についてはよく分らない人の方が多いと思います。またこのことが、佐渡の農村の歴史や暮らしに大きく関わり、現在も残っている鬼太鼓などのお祭りや、佐渡が最後のトキの生息地だったことに大きく関わっていたことなど、私たちも知らなかったことがたくさんあるのです。勿論学校では教えてもらえなかった内容ですし、このことを書いた本も無いのですから、無理もないでしょう。それではこれから私たちが一つずつ絡み合った歴史の糸を解いていきましょう。
- 正式には Globally Important Agricultural Heritage Systems と言い、頭文字をとってジアス (GIAHS) と名付けられました。国際連合食糧農業機関が 2002 年に初めて創設しました。伝統的な農業や文化を守ること、土地景観の保全と持続的な利用を図ることを目的としています。2016 年までに 15 カ国 36 サイトが認定を受けています。それらの地域のほとんどは田舎や貧しい地域の農業の形を保存しようというのですが、佐渡の場合は、トキと共生する佐渡の里山という、これからの農業の形を問うものです。佐渡には不思議なことが幾つもあります。
- 佐渡にはなぜ能舞台がたくさんあるのでしょうか？こんな小さな島に能に代表されている芸能や、農業に関わる神事が数多く残されています。中でも能舞台の数は 36 舞台も残っています。なぜなのでしょう？
- そのルーツは 17 世紀初頭に発見された金銀山にありました。江戸幕府は 300 年間という長きにわたって金銀山を掘り続け、国の財政を支えてきました。このゴールドラッシュにより、全国各地から 300 年の間、人々が押し寄せ、島の人口は爆発的に増加しました。その数は金銀山がある相川地域だけで 5 万人も住んでいたそうです。現在の佐渡全体の人口が約 6 万人ですから、当時はこの佐渡に想像できないくらい多くの人たちが住んでいたことがうかがえます。このことは当然 300 年間島に住む農民たちの生活にも大きく影響を及ぼすことになりました。



食料確保のために、次々と水田が作られ、海沿いや山奥にも棚田を作りました。食料となる米や農産物は勿論のこと、暮らしに必要な薪・炭や藁製品・竹細工など、お金の換えられる商品の需要も多かったことがうかがえます。このことから、当時の農家は小規模のわりには極めて豊かな生活を送ることができたのではないのでしょうか。そして佐渡には、当時の日本でも類の無いくらいの貨幣社会・消費社会が存在したと思われています。

- 金銀山がもたらす豊かな農業生活が農村を支え、豊かになった農民はゆとりを手に入れました。そして様々な文化や芸能を取り入れていくこととなりました。農民にとって豊作は、豊かな生活をもたらしてくれることであり、豊作がこれからも長く続くようにと神様に願ったのでした。能は農民が神社への奉納を神事として楽しみ、村々に能舞台が建てられたのです。今でも春から秋にかけて、多くの住民や観光客が野外で上演を楽しんでいます。

鬼太鼓などの伝統芸能も集落を単位とした豊作を願う神事として継承され、日本のどこにも無い独特の農村文化ができ上がったと考えられています。

- 佐渡のトキはなぜ最後まで生息できたのでしょうか？

日本で初めてトキという名前が登場したのは奈良時代です。「日本書紀」に桃花鳥として登場し「ツキ」「トキトリ」と読み仮名がふられています。平安時代には、刀の柄の飾りとして使われ、鎌倉時代には、弓の矢羽に使われていました。また当時の食料の記録にも、トキの名前が出ています。8代将軍吉宗の時代に各地の大名から集められた産物帳の記録から、トキの名前が全国に広く分布していたことが分っています。明治時代に入り、狩猟が庶民に解禁されると、狩猟人口が増えるのと引き替えに、トキの数は減少していきます。明治41年に保護鳥に加えられましたが、大正時代に入っても狩猟は続き、個体数はさらに減少し、一時絶滅したと考えられていました。1930年に佐渡島でトキが再発見され、その後1960年には国際保護鳥に指定されました。そして2003年、キンと名付けられた国内最後の野生のトキが死亡し、遂に日本で生れたトキは1羽もいなくなってしまうのです。

- さて、お話を最初に戻しましょう。なぜ佐渡が

トキの最後の生息地だったのでしょうか。江戸時代も終り明治時代に入ると金山は次第に衰退し、農業収入も減少することとなります。しかし島であることもあり、他にこれといった産業の無い佐渡では、農地は大切に残されました。高度経済成長を経験し大規模農業の時代になっても、山間の農地は規模が小さいため耕地整理をすることができずに、今に至っています。効率的な土地改良が進まなかったことが、かえって今では土側溝やため池などを残すこととなり、多くの生きものが生息できる環境をそのまま残すこととなりました。また、農薬の使用も控えたことで、豊かな生物多様性が守られ、トキが日本において最後まで生息できる環境が維持されてきたのです。トキはその後の研究で、中国のトキと遺伝的に同じ種の一つの群であることが分かり、改めて中国のトキを借りて人工増殖し、野生復帰を目指すこととなりました。1999年、中国から譲り受けたつがいに初めてヒナが誕生。現在トキの生存数は、2016年時点で147羽です。

- トキと共生するにはどうしたら良いのでしょうか？

放鳥されたトキとともに暮らしていくには課題がいくつもあります。トキが生き続けられる自然条件を整えることです。過去に生き続けていた本来の生態系を復元することです。具体的には、トキを守るために餌となるドジョウやタニシ、カエルを守らなくてはなりません。そのドジョウを守るためには、餌となるユスリカという蚊の幼虫や藻類や植物類を守り、動物性・植物性プランクトンを守るといように、トキを頂点とする生態系全てを守らなくてはなりません。いわゆる生物多様性を保全・再生する必要があるのです。

- 有機農法で酒米やトキ認証米を作り、冬は酒造会社でお酒を造っておられる佐々木さんが生態系の重要性を教えてくださいました。トキが餌にしているカエルやドジョウのほとんどは田んぼの畦際を住处にしている。畦草は除草剤を使わず草刈り機を使って、生きものたちが暮らせる環境を作ってあげることが大切。人間が田んぼを使わなくなったら、虫もいなくなりトキも住めない島になってしまう。お米を作ることは、人間の食料も作るけれど、たくさんの生きものと環境を守る役割もしているのです。私たちも参加した生きもの調査では、有機無農薬米を作っ

ておられる林さんの水田の江で、数多くの生きものを確認することができました。

- 環境に配慮した農業を紹介しましょう。佐渡市ではこれらの生きものが生きられるように農薬の成分を慣行栽培の半分に減らした栽培方法や、多くの微生物が育つようにと化学肥料成分を半分に減らし、有機質で補う栽培方法が行われています。この他にも「江の設置」、田んぼが乾いた時に生きものが避難できる場所を確保します。「魚道の設置」、水田を魚の産卵場所や生育場所にするために、小川と水田を人工の魚道でつないでいます。メダカは水田で産卵し、川に返っていきます。「ふゆみずたんぼ」、冬期間の生きものの越冬場所や早春のヤマアカガエルなどの産卵場所として、冬の間も水を張っておきます。「ビオトープの設置」、休耕田を利用し、1年を通して水を溜め、生きものの生育場所を確保しています。

- このように、生きものを育む農法で作られたお米は、特別なお米としてブランド化され、付加価値を付けて販売できることから、生産者にとっても農業収入が増え、棚田などの比較的小規模な水田の維持が可能になると考えられています。

加茂湖のカキ殻を使い、有機質の質にこだわった米づくりをしておられる相田さんが、私たちに教えてくださいました。微生物を増やし、生きものを増やし、トキを守ることができる稲作技術こそが人を守ることにつながり、地域や集落を守ることにつながるのだよ、という貴重なお話を聞くことができました。

- 手付かずの自然環境の中ではトキは生きていないのではないのでしょうか。人が田んぼを作り、畦草に除草剤を使わず機械で刈ることで、生きものが生れてくるのです。古い時代からトキと人間は寄り添って生きてきたのではないのでしょうか。農家と生きものと環境を守る取り組みが必要なのではないのでしょうか。

私たちがその地域で作られたお米を食べることこそが、日本のトキを守ることに繋がっていくのではないのでしょうか。トキが安心して暮らせる環境こそが、私たち人間にとっても安全で安心な環境となり、共生することが私たちに本当の豊かさをもたらしてくれるのではないのでしょうか。これが私たちの感想です。

- 佐渡での生活に惚れ込み、移住してきた東京生まれの新田さんは、佐渡の魅力について語ってくださいました。世界中のいろんな国で生活をし日

本に帰ってきた時、東京が灰色に見えたそうです。みんなが何も会話をせずスマホばかりしていたそうです。佐渡には島だからこそ残されたものがたくさんあると言います。青々とした緑、人と人との付き合いが残っていることだそうです。棚田があったからみんな仕事をする、コミュニケーションが生まれ、集落ができ、人と人をつないでくれる芸能が生まれる。その芸能をみんなでつないでいこうとして地域が作られる。その集落ごとに違う芸能を自慢気に話せることが佐渡のすごさだと言います。また新田さんは、人が飲める湧き水でお米を作っているそうです。小さなお米だけれど、山の全てが凝縮されているように感じ、とても美味しいとのこと。人がちょっと手をかけただけでお米ができ、山を渡る心地良い風は生活の中に一息つける時間を与えてくれる、それが佐渡の魅力だと言います。

- トキと共生する佐渡の里山とは、金銀山がもたらす経済効果が農村生活にゆとりを与え、先人たちはさまざまな文化を取り入れ、心豊かに暮らしていたことでしょう。また、各農村集落に伝わる鬼太鼓などの伝統芸能や神事は、集落の結束を高め、共同作業等により農地や農業を守ってきたのです。

その農地は現在でも豊富な生物多様性を保ち、私たちに安全で安心な環境や食料を育てています。そのような自然と大地、文化が一体となって織り成す佐渡だからこそ、トキと共生できる唯一の住処といえるのではないのでしょうか。

私たちにできることってなあに？

直接トキの保護活動に関わることは、直ぐにはできません。しかし、トキと一緒に住める島にするために、まずは一個の空き缶を拾うこと、住んでいる地域のお米を食べること。小さな一歩から始めてみませんか。

ご清聴ありがとうございました。

# 「日本を変える里山のチカラ」

(株)日本総合研究所 主席研究員 藻谷浩介氏

## 講師紹介

山口県生まれの51歳。平成合併前3,200市町村のすべて、海外72ヶ国をほぼ私費で訪問し、地域特性を多面的に把握。2000年頃より、地域振興や人口成熟問題に関し精力的に研究・著作・講演を行う。2012年より現職。近著にデフレの正体、第七回新書大賞を受賞した里山資本主義(共に角川Oneテーマ21)、金融緩和の罠(集英社新書)、しなやかな日本列島のつくりかた(新潮社、7名の方との対談集)。



## 講演概要

今回は「日本を変える里山のチカラ」と題して講演。日本や中国の人口の年代別構成をグラフで分かりやすく表し、時代の変容を鮮やかに見せつつ、都市(東京)や佐渡などの里山地域のみならず、世界的におこっている問題の本質や、未来予想を示した。

更に、日本の国際収支の状況を分かり易く解説し、未来があるのは、これまでの石油を大量に消費

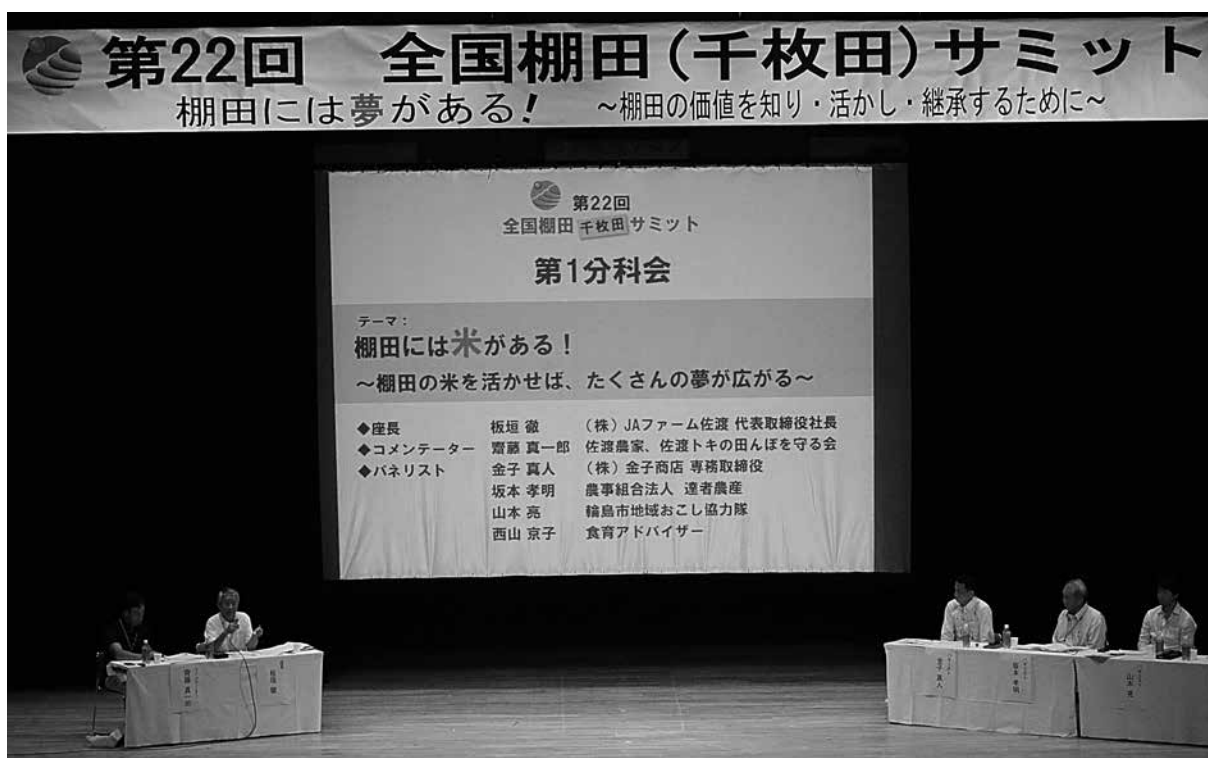
する社会やハイテク、経済成長を重視する価値観ではなく、里山が持つチカラ、そして、ローカルなものを大事にする生き方であると説き、安さでは勝負せず高品質の地域ブランド商品や生活文化観光で少しの外貨を獲得し、お金と遊休資産を徹底的に地域内で循環させることが最も大切で、更には、省エネ・新エネを推進し、エネルギー代を大幅に削減していくことが、「里山資本主義」的な地域活性化の方向性であり、里山や棚田地域再生への提言とした。



## ◆テーマ

### 「棚田には米がある！ ～棚田の米を活かせば、たくさんの夢が広がる～」

座長：板垣 徹氏（株）JAファーム佐渡 代表取締役社長  
 コメンテーター：齋藤 真一郎氏（佐渡トキの田んぼを守る会、佐渡農家）  
 パネリスト：金子 真人氏（株）金子商店 専務取締役  
               坂本 孝明氏（農事組合法人 達者農産）  
               山本 亮氏（輪島市 地域おこし協力隊）  
               西山 京子氏（料理研究家、食育アドバイザー）



**板垣氏** これから分科会を開始いたしたいと思えます。座長を務めます板垣徹と申します。まず私でございますが、当地佐渡でJA佐渡が設立いたしました農業生産法人「株式会社JAファーム佐渡」の代表をいたしております。法人として、水稻・柿・採種・加工柿などに取り組んでおります。

第1分科会のテーマは「棚田には米がある！～棚田の米を活かせば、たくさんの夢が広がる～」となっております。棚田というのは、言うまでもなく水田で、稲を植えて米を収穫するという営みがずっと続けられてきました。そして、棚田は米を作る場所として考えますと、生産条件

は非常に厳しいです。1枚の圃場面積が小さいこと、水利の確保、その維持がきわめて大変であること、畦畔（畦や土手）の面積が非常に大きくて、維持管理、特に草刈りの労力が大変です。しかも、これだけの労力をかけながらも、地力があまり無いところが多いわけで、単位面積当たりの収量はそんなに多くない、むしろ少ないところが多いです。

平場の穀倉地帯を基準として考えてみた時には、棚田はまさに条件不利農業の集大成と言ってもいいかと思えます。しかし、今日ここにお集まりの皆さんをはじめとして、全国各地の棚田地域

では、多くの皆さん方が棚田地域こそ日本の原風景である景観の保持をしている貴重な土地であり、そして、里山で暮らす人の暮らしを含めて、地域を活かしていくことに多くの努力を傾け、情熱を注いで取り組んでいます。棚田の元気を、どうやって日本の各地の消費者の皆さんに、国民の皆さんと共有することができるのか。その時に中心的な課題となるのが、棚田の目的生産物でありますお米、これをどのように評価をし、あるいはその評価を実現していくのかという課題であると思います。

棚田米は、いったいどのような価値をもっているのか。それは誰にとっての価値なのか。そして、その価値はこの国の人々から十分に理解され、受け止められているのでしょうか。さらに、棚田米の価値と考えられるものを経済的にはどう実現をしているのでしょうか。あるいは、実現していくことが可能なのでしょうか。そのようなことを課題として、色々な立場の方々から話し合っていたら、できれば議論の集約として、実践的な取り組み方向を見出していききたいというのが、この分科会のねらいとするところだと思います。

また、棚田サミットという催し物の性格上、今日の参加者のほとんどの方は、棚田地域で活動している皆さん方で、棚田米との関係で言うと、作る側であり、情報発信をする側であります。そこで、作り手が「棚田には夢があるんだ、そして棚田米にはかけがえのない価値があるんだ。」と言っているのだから、誰のところに届いているのだろうか。という問題があります。

本日は、棚田関係の方だけではなく、米の消費者との接点におられる方にもパネリストとしてお出でいただいて、棚田米の価値をどう伝えるかについても話し合っていたらと思います。

それでは、最初にパネリストの皆さんお一人ずつ自己紹介を含めて、棚田あるいは棚田米に関わる思いなどを語っていただきたいと思います。

最初に金子さんからお願いします。

**金子氏** 埼玉県川越市から来ました五ツ星お米マイスターの金子真人と申します。私はお米マイスターとして、全国津々浦々の生産地に行ったり、消費者の声も聞けるので、両方の目から棚田米の話ができればと思います。

お米の普及活動を学校やメディアでも色々やっているのですが、棚田米を米屋から発信するの

は限られた人数しかできません。そこで、多くの方に発信するために、企業のキャンペーンでお米を提案しました。初めて取り組んだ旅行会社で、佐賀県の玄海・肥前の棚田米を使い、パッケージも産地の写真を取り入れ企業のメッセージも添えてパッケージを作りました。その後は、里山を応援しようとお菓子メーカー、食品メーカーのキャンペーンでも実施しました。最近は、神社で縁結び米というような形で棚田米を販売しています。

私がなぜこんなに棚田米に思いがあるかといったら、景観はもちろんですが、棚田米は米づくりだけではないというところ。お客様に棚田米の良さを説明するとき、分かりやすいのは、「山奥・里山・里」という3つを示します。

- ①山奥というのは人が住んでいないところ。
- ②里山というのは、薪を取ったり棚田があったりという人間の匂いがくっついているところ。
- ③里というのは人が住んでいるところ。

最近たくさん鳥害獣がやってきて、大変な苦勞をされながら続けられています。「野生動物と人里の緩衝帯がこういう棚田なんですよ、お米だけでなく多くの多面的な機能を備えているんですよ。」とお伝えしています。せっかく長年続いてきた棚田を次世代につなぎたい。その思いを消費者にどんどん伝えていきたいと思っています。

**板垣氏** それでは、当地佐渡の里山側として、坂本さんからお願いします。

**坂本氏** 農事組合法人達者農産の坂本孝明と申します。達者集落および達者農産について少し紹介をさせていただきます。

達者という集落は、この会場から海岸線を15kmほど北へ走った旧相川町の金泉地区というところにあります。田んぼは、集落より30mほどの崖の上にはほぼ3つの団地に別れており、その他にも山際に点在しております。稲作中心ですが、本当に山際の方は作業が大変で、ほとんど耕作放棄地が出ている状態です。

3つの団地のうち、一番大きな団地で24haあります。平成5年ごろ20a区画で整備し、この団地を中心に稲を作っています。昭和10年代に土地改良をした団地は5a区画です。今の生産調整の対象がほとんどこの辺に集中していて、7haの田んぼがあるのですがこの団地ではもう稲は作っておりません。その奥のため池の周囲に昭和30年代に5a区画で整備をした6ha、120



枚ほどの田んぼがありますが、ここでも米を作っているのは1haを割り込みました。このような3つの団地、あるいは団地周辺の山際の田んぼを含めて、先輩たちが維持・管理してきたものを今後どのようにして守っていくかというのが、地域にとって大変難しい問題になってきています。

昨年9月によく農業法人を立ち上げ、設立総会を開きました。法人化しよう、あるいは受け皿を作ろうという話は、平成17、18年頃から出てきて人口がどんどん減って農業を離れる人も増えていく中で、もう個人で受託をするのも限界という状況になりました。この状況の中から、やれるだけやってみようかと立ち上げた法人であります。

平成25年に佐渡市のはからいで、集落の中でこれからの集落を考えてみようという場を設けていただきました。そこで出てきた案の一つに、「お達者米」を作って売り出したらどうかということでした。昨年法人を作る段取りができたので、試しに山際の田んぼを20aほど共同で作ってみました。話し合いではざ掛けをしてみようということになり、浜辺のはぎを借りて作業をしました。はぎ掛けが終わった時は夕日を浴びて大変輝いていました。

昭和40年代には浜にたくさんのはぎが並んでいました。時化になればそれぞれ個々の方々が稲を取り込んだり、また掛けたりと色々な苦勞をしながらはぎ掛けをしていました。

今年から法人が立ち上がったということで、受託地8haのうち2.5haを共同で稲作することになりました。地域おこし協力隊の女性の方も手伝ってくれました。

今年も無事田植えが終わりました。ここ2年ほど、台風で達者地域やもっと北の方の地域も大きな被害を受けました。今年は無事に収穫できることを願っています。

地域の50haの田んぼをこれからどのようにして維持していくのか、切実な問題で皆さんとよく相談をしながら進めていきたいと考えています。

**板垣氏** これからの取り組みということで色々課題や可能性もある話だと思います。

それでは、能登輪島の山本さん、よろしくお願いいたします。

**山本氏** 輪島市から来ました地域おこし協力隊の山本亮と申します。私からは主催者から「多業ライフのすすめ」とのこと話をしたいとお話をいただきましたので、一つの里山資源の活かし方、そして生き方の参考に、収入の上げ方にもつながるお話を実践と反省という形で、まだまだ実践中のお話になるのですが、ご紹介させていただければと思います。

私自身、地域おこし協力隊で他所から来た人間になります。生まれは神奈川県、育ちは東京で、ご縁があって2年前に輪島市三井町という集落に移住をしました。人口が約2千人の集落になります。

能登も佐渡も本当に美しい里山景観があります。私自身は大学で農村景観の勉強をしていて、そのご縁で三井町で夏合宿をしたことがきっかけで移住に至りました。里山であったり、美味しい食事であったり。ただ水が美味しい、景色がきれい、米がうまい、そのようなところは全国たくさんあり、なぜ移住を考えるきっかけがここで生まれたかということ、合宿の時に世話になった方が、「都会の人はお金が無いと何もできないよね、でもうちは里山があるから食う物には困らなくて、だからたとえ貧乏でも人に優しくできるんだよ。」という話をされました。それまで学生時代はアルバイトをしては飲んだり、服を買ったり、貨幣社会に本当にどっぷり浸かっていた人間としては、そのような生き方があるのかということが一つ衝撃的なことで、そうした生き方をしたいということ。皆様がやってきたことは百年後も続いていく。私が学生時代にお世話になった方が亡くなり、お線香をあげに行ったときに、お墓から見えた田んぼの風景がすばらしく、お世話になった方が耕していた田んぼが見え、ずっと続いていくのだと思うと、本当にその方の死が無駄じゃなく、そんな死に方をしたいと思ったことがきっかけでした。そのような意味で里山は宝の山、本当に夢があるところだと思っています。





里山を活かした一つのライフスタイルとして、今「多業ライフ」に取り組んでおります。多業ライフは、いくつかの職業を組み合わせた生き方とされており、里山系でいうと、京都の塩見さんがやっておられる「半農半X」、農業プラス自分の好きな仕事であったり、栃木の藤村さんがやっておられる「月3万円ビジネス」、3万円の仕事を6つ組み合わせたら18万円になるという著書もあります。複数の仕事を組み合わせることで豊かにしようということ。私はまだ実践中なのですが、一つの仕事がコケてもリスクの分散が図れることがメリットであります。もう一つの仕事との組み合わせによっては、出会いであったりアイデアであったり、相乗効果が生まれる。また、無理して稼ぐ必要がないから、やりたいことができたり、環境負荷が低いとか、諸々書かれておりました。

「百笑の里山づくり」をやっております、その一つの形を紹介したいと思います。「百笑の里山づくり」は、輪島市の三井町で多業ライフを前提とした地域づくりを行っていかうということ。地域の方々とやっています。「うちの地域は米がうまいですよ、そういう良いとこなんですよ。」という売り方ではなく、「こんな生き方ができる地域なんですよ。」ということ。売って出していけばいいのではないかと話です。やるにあたって作ったものが「生業カレンダー」で、お米以外にも地域の里山資源はたくさんあります。例えば、葉っぱを料理の彩りとして添えるツマもの、そして茅葺き屋根に使う茅、山菜、キノコ、色々なものが三井町にはあります。「あの婆ちゃんあんなことをやっているんだよね、あの爺ちゃんはこのことをやっているらしいよ。」というレベルで地域の方たちが話していることがあったのですが、実はどのように行われているか、いくらぐらいになっているか、どのような需要が

あるのか、そういったことは地域の中では全然共有されていなかったのです。大学生のインターンの女の子と、その実施している人一人一人にヒアリングをかけてカレンダー化することで、地域のどのような時期に、どのような仕事があるのかをリスト化していきました。商品名、収穫作業時期、おおよその販売額、販売ルートと、葉っぱビジネスをはじめ、59種類ありますが、これには野菜や米も入っていない状態でやっています。

今まで三井町には「仕事が無い、だから都会に行った方がいいよ。」と言っていた地域の方たちの一部がこのように変わってきています。季節に応じた生業がたくさんあり、若者や高齢者の年金プラスアルファの収入を埋める形ができるのではないかと今取り組んでいるところです。

**板垣氏** 多彩な活動で、棚田に限らない里山の資源をどう活用するか、あるいはどう発信をしていくかというお話でございました。

それでは最後になりますが、西山さん、これまでは作る側、あるいは伝えていく側ということですが、どちらかということ。消費者の側の目線からということになるかと思えます。自己紹介を含めてお願いします。

**西山氏** 本日は島外の一消費者としてこのような大きな分科会に参加させていただきま

私のプロフィールと活動内容を少しご紹介させていただきます。私には小学校の娘と幼稚園の息子がおります。活動場所は、主に2007年に開設した「ちよりまめ日和」という料理ブログでして、こちらで「子どもも大人も一緒のごはん」をコンセプトに、ご飯の日記やレシピを配信しています。このブログの投稿から派生しまして、現在はレシピ本を出版したり、企業様のレシピ開発だったり、テーマパークのメニュー開発、メディア等の出演の仕事を中心にしております。日本各地の農産地を訪れてレポートを通して、農家さんの声を届ける食育活動等もしております。今回こちらの方で参加させていただいたのには、佐渡のお米と深く関わりがあります。2013年に佐渡に初めて来まして、それから2014年の翌年から2年ほど佐渡産のお米の応援大使として訪問したり、米づくりの農業体験をこのブログを通じたり、イベントで発信することによって、より身近な消費者の方々の生活に浸透するように呼び掛ける活動しております。

生きものを育む農法で作られたお米の生産に携

わることにより、毎日いただくお米を多くの人の手や時間、そして苦勞を得ていることを日々ブログで綴ることによって、お米の価値というものを読者の方に伝えています。

**板垣氏** 消費者目線で棚田米、あるいはお米自体をどう伝えていくか、また色々お話を伺いたいと思います。

ここでコメンテーターとして齋藤さんに、今の皆さんのお話へのコメントと、このあとの話し合いの課題を整理していただければと思いますが、自己紹介を含めてお願いします。

**齋藤氏** ただ今紹介いただきました齋藤真一郎です。今日は私も実際農家でありますし、「佐渡トキの田んぼを守る会」という立場でここに座らせていただいております。

今私は田んぼを約25ha作っています。その田んぼは全部良い田んぼではありません。棚田も一部1haぐらい作っています。平場で効率的な農業ばかりやっていると、どうも方向性が間違ってしまう。その中で条件不利地とか、人との触れ合いができるような農業をやることによって、真っ当な農業ができるのではないかという思いで農業をやっています。

今回お米屋さんや農家の方々、地域を盛り上げようとする地域おこし協力隊の方、また消費者の方など、多彩な顔ぶれでありますけれど、この分科会のテーマはお米をどうするかという話だと思います。ただ、お米の状況というのは、ご承知のように非常に厳しいものがあります。年間8万トンの消費量が人口減によって減っているという話、また各産地から色々な品種が出てきております。そのような意味で、産地間競争が非常に激しくなっている。また食味を良くしようとか、特異産地を目指そうという形での品質的なレベルアップの競争も今始まってきています。その中で、平場のお米でさえ売りにくいところで、棚田米という特殊なお米をこれからどのように売っていくのか、どのように選んでもらうのかということが大きな課題だと思っています。

全体を通した中で、最近ショッキングだったのが、農水省の調査の中で、大学生の中で1カ月以上お米を食べていない方が2割位いる発表がありました。若者のお米離れが非常に進んでいる状況で、国民全体の消費量をどう上げていくかという議論において、棚田のお米をどう選んでもらうのかということが大事なかと思っています。

棚田で暮らすことは、その地域で持続可能な生活ができるぐらいの収入が無いとやはりできない。佐渡の現状をあまりよく知っているわけはありませんが、わりと米1本の農業、中山間地農業の方が非常に多いのだと思います。いかに他の作物とか、今流行りの農家民宿とかも組み合わせながら、その土地における収入をどう上げていくかということが大きな課題かと思います。消費者との交流とか、観光客をいかに呼び込んでくるか、その中で棚田米をどう食べさせて、持続可能なリピーターになってもらうか、そういった手法にはどのようなものがあるかが大事なポイントかと思っています。

「お達者米」のお米の名前は、非常にイメージが良いと思います。これを食べると健康で長生きできる、そういうお米のイメージが非常に強いと思います。そのイメージを消費者に向けてどう構築をしていくのか、それを販売するためにどのような取り組みをしていくのかを、今日のパネリストにはプロの方々が出ていますので、一つの事例として作り上げていただけるとおもしろいかと思っています。

今回参加名簿を見せていただきましたが、ほとんどが生産者や行政の方々で、個々の消費者や生協の方々など、消費者の側からの参加が非常に少ないことが問題かと思っています。このあとサミットを続けていくのであれば、消費者も巻き込んでのサミット作りが大事になってくると思います。消費者にどう棚田米の価値、お米の価値を伝えて、消費者にどのような視点で棚田米やお米を選んでもらっているのか、そのために生産者はどのような取り組みをしなければいけないのかというところを議論していただくとおもしろいかと思っています。

私自身は棚田にお米を食べる方が来ていただいて、生産者の思いを聞いたり、また作られる環境を見たりして、頭の中にインプットしてもらい、家に帰って棚田米を食べるときに、「このお米はあの人が作ったお米だね、この田んぼにはトンボやカエルだとかたくさんいたね。」というような話をしながらご飯を食べられる世界ができるとお米の消費も伸び、楽しい豊かな生活もできるのかと思っています。

**板垣氏** 齋藤さんから整理がありましたが、基本的にはこの棚田サミットの中で、従来あまりお米に焦点を当てた分科会は、バックナンバーをざっ

と見てあまりなかったように思います。それから消費者の参加も今まで少なかったと感じております。そういう意味では新たな視点の導入という面もあるかと思えます。その中で、このあと消費者と棚田を守り作る側とどう結び付けていくかということが、基本的にはテーマになってくると思っています。

その話に入る前提として、棚田米の価値について、パネリストの皆さんのご意見を伺いたいと思っています。今お話の中でも色々棚田米の価値について、それぞれの皆さんのとらえ方、認識があったと思いますが、簡単にもう一度振り返って、私どもは棚田米に価値があると思っていますが、価値っていったい何だろうか、ということ、少し議論の糸口として話し合っただけならと思います。一番手として金子さんが色々な米を取り扱っていますが、棚田米についてはどういった点が価値と位置付けることができるか、その辺のところから切り口としてお話をいただければと思います。

**金子氏** お客様がお米を買う時は、たくさんのお米が並んでいて、その中から選ばれます。ショッピングな話かもしれませんが、棚田米というだけでは売れません。それはお客様に価値が伝わっていないからです。我々は分かっています。何度も何度も産地に出かけたり、どんな思いで作られているのか、どんな苦労して作られているのか、棚田の価値を理解しているからです。プライスカードに棚田米と書いてあるだけでは絶対に売れません。お客様は、「棚田米だから買わなくちゃ。」という気にはならないです。棚田米の価値をお客様に伝えて、買っていただいた方にはよく伝わるかもしれませんが、今度そのお客様が家族に食事の提供をした時に、旦那さんや子供たちにどのように簡単に伝えられるか、ここが棚田の価値を議論するときの問題提起になるかと思っています。

**板垣氏** 作る側として坂本さん、これは棚田米というコンセプトと少し違うと思いますが、「お達者米」は、どのような価値を訴えていこうとしているのか、その辺をお願いします。

**坂本氏** 申し訳ありませんが、おっしゃる里山・棚田の価値というものを考えたことはありません。本当にどのような価値があるのかは、これから勉強していきたいと思っています。ただ、やはり課題はたくさんあります。例えば通常はコンバインで刈

り取って、コンテナでカントリーやライスセンターへ運べば作業は終わります。ところが実際は、掛け米をやろうとすれば大変手間が掛ります。それだけの価格で買ってもらえるのかどうかというのが、私たちが一番気になるところです。

**板垣氏** 作る側からすると、価値よりは苦労・努力・コストが非常にかかっている、そのことが一番大きな要素だと思います。

西山さん、作る側の思いも含めて、消費者側から棚田米の価値っていったいどういうことなのか、コメントいただけますか。

**西山氏** 景観を見たり、実際に食したことがある立場からすると、とても分かりやすく良いお米で、環境などを通じてでき上がるまでの過程を知ると入り込めるのですが、その歴史を知らないとなかなか入り込めないということがあると思います。そもそも棚田米の歴史の深くが、それを今独自の方法で守られて継続されていることは、現代において一番の価値であると思うので、稀少価値のあるお米を知ってもらえるような機会がもっと欲しいと思っています。

**板垣氏** 作る側の苦労だけではなくて、消費者目線から見たときに明らかに価値がある。それは、物自体の価値というよりは、それが生み出される歴史的な背景あるいは風土といったものの価値、それがどう伝わっていくかというお話だと思いますが、その点で話をどう伝えていくかという方に少しずつ入っていくのかと思うのです。里山の価値を消費者に伝える、それを里山の側からどう発信をしていくのかということについて、山本さんの方からもう少し米の価値に絞ってお話をいただければありがたいと思います。

**山本氏** 輪島のお米のブランド化も私は携わっております。どの地域のお米も本当に美味しいと思うのです。しかし、「美味しいんです、佐渡産です、能登産です。」ということだけでは、売れないと感じています。その価値、景観的な意味であったり、そのものがあるのですけれども、それだけではない。なぜそのお米を買いたいと思うのか、買いたいと思わせる動機付け、里山の価値を伝えていく一方で発信していくものが必要ではないかなと感じています。

**板垣氏** 買いたいと思う動機付けの中で重要な要素といえますか、具体的にどんなことが考えられるか、金子さんから買うのはどういう人で、それはどういう動機なのかについて、棚田米との

関連ではいかがでしょうか。

**金子氏** プライスカードで棚田米というだけではお客様をキャッチするのは難しいと思います。今販売しているのは、10年以來、佐賀の玄海・肥前の棚田米を扱っています。パッケージには、棚田の美しい景観写真がどんとあります。こんなきれいなところなのだ、そういうところでまぜ煮き付けられます。1回目は、きれいなところだと思って買ってくれます。けれど、1回だけではなく、2回、3回、4回、5回と末永く買っていたきたい。そうすると先ほど課題も申し上げましたが、美味しく、品質もある程度高くないと2回目、3回目と買ってくれません。毎月買ってくれるのだったら、毎月情報が発信できるものをお米と一緒にセットしてお渡しすることも大切です。

**板垣氏** 1度だけでなく、2度、3度。そしてずっと買っていたく。それを家でお父さんやお母さんが食べて、子供と一緒に食べて、その食卓の中で棚田の風景が見えたら、これは素晴らしいことだと思います。そのようなお米として棚田米がどうすれば消費者から受け取っていただけるのか、関係づくりをどうするのかと思います。

齋藤さん先ほど交流とかを具体的に指摘されたわけですが、それについてはいかがですか。

**齋藤氏** 私たちは「佐渡トキの田んぼを守る会」という会なのですが、2001年からトキの野生復帰をするために田んぼに生きものをたくさん増やす取り組みを、農家と首都圏の消費者の方々と一緒になってやってきました。ただ今は面積も少なく、そのようなイベント的なものはあまりやっていないのですが、ずっと続いてきているのは、消費者の方々が佐渡に来ていただいて、トキがいる環境を見てもらい、お米を作っている農家の顔を見て、一緒にお酒を飲んで、一緒に語って、そのような関係をずっと15年ぐらい行ってきました。やはりそういう佐渡に来てくれる方々は、全員ではありませんが、10年間で10回も20回も毎年来てくれる方もいます。そのような方が年間を通して安定的に、継続的に買っていたける方です。

棚田米は生産量からみれば少ない種類のお米だと思います。大量に作られるお米と稀少価値のある少ないお米とは、販売方法を変えなくてはならないのだと思っています。そのような意味で、稀少なお米は、いかに消費者とコラボしながら、

生産者が消費地に行ったり、消費者の方々が生産地に来たりという交流を深めていく中で、販売をきちんとしていけるお米だと思っています。農家の生産者の場合は、消費者の前に出向いて行って自分の思いを発することがなかなかしづら性質の人が、私自身をはじめ多いと思います。そこをどうぶち破っていくかということが続けていくことが慣れになって色々な広がりが出てくると思います。そのような意味で、相互の交流も含めて、JAさんだとかが中に入ってその場を広げていく仕組みが必要かと思っています。

今までやってきた中では、米を買ってくれる要素として、やはりお米の美味しさが一番だと思います。「トキ米」を売っても、安全、安心であっても不味いお米はいらないと何回も言われていますので、棚田にも通じていると思います。美味しいお米をいかに作ることが大事だと思いますし、「作り手を見てもらえる、分かってもらえる、作っている環境を知ってもらえる、そして一緒に汗を流すことで親密性を増すことによって、第2、第3のふるさとづくりのようなお米にすることが、お米の販売方法かな。」と思っています。

**板垣氏** 齋藤さんたちの実践を踏まえて今のお話をいただきました。棚田という景観は、とりわけ人が関わって美しい、そして日本の原風景として誰の心にも染み入るような景観で、それを守ることの大切さというのは誰しも、「そうだね。」というところだと思います。そして棚田が維持されるために、お米が継続的に生産されていく、このあとも未来に向かって生産されていくことが大切だということも分かりますが、それが実際に棚田で米を生産している皆さん方を支えられるほどの販売になっていくのか、消費者とのコラボができるのか。そのことがおそらく棚田米にとっての重要な課題になってくるのではないかと。そのようなコメントをいただきました。

特に、今消費者との結び付きというお話になりますが、消費者側として、生産地へ行って見る、ということ消費者はどの程度欲しているのかということ、西山さんからお聞かせいただきたいと思っています。

**西山氏** 消費者がお米自体を今どこから買っているかということ、断然スーパーが多くて、その時に見ているお米しか手が出しにくいというのが実状なのです。棚田米はお米屋さんで売られているこ

とが多いので、極力消費者の目に付くようなところにあると嬉しいというのと、今は働いていらっしゃるお母様がすごく多くて、食材や日々のご飯ですらネットで買われている方が多いのです。そのような意味では、インターネットを通じた物の販売の力というのも、知るきっかけの一つになると思います。

娘が去年食育をテーマにお米の生産の取り組みと一緒にしたのですが、一度棚田を見ると、ここでできているお米は私たちが知っているお米とは違うのだと一目瞭然で分かるのです。そこから、このお米ってどんな味がするのだろうという興味になっていき、そこから食べてみたいという気持ちと行動が変わる。それがすごく大事なステップであって、それがどんどん増えていって欲しいという意味でも、母親というか家族全体がお米に対してだったり、食生活に対して少しずつでも向き合っていかなければいけないと日々思っています。

小学校で農業の授業などで、もっと農家さんの声が聞きたいという声が出ています。「もっとお米の新しい食べ方の提案をしましょうとか、和食を広めよう。」というあまり考えていないと思われる小さな子供たちも、そのような気持ちがあります。実際消費者側からすると農家さん、生産者の方にその事実を知っていただきたいです。

**板垣氏** 特に娘さんと一緒に佐渡へ来て、娘さんの興味をもつ大きなきっかけになっている。子供さんに来ていただくのは、とても未来に向かって良いことだと思います。どうすれば子供に来てもらえるのか。今、農山漁村子ども交流プロジェクトなどのプログラムがあったりします。そのような意味では都市と農村との交流を地域として進めていく取り組みもまた重要になってくると思います。

坂本さんのところでは民宿でしょうか、民泊でしょうか、そのような取り組みもしながら、あるいは有数の海のきれいな観光地でもありますから、海に来る人たちとのつながりもあるのだと思いますが、その辺のことでの構想や夢などを、あるいは語っていることがあったらお願いします。

**坂本氏** かつては遊覧船が運航していました、多い時で年間18万人程の方からお出でいただきました。しかし、年々減少を重ね、平成25年ごろには4万人くらいにまで減って、廃止したという

経過があります。

そのような中で色々なアドバイスをいただいて、昨年から小学生を対象とした民泊も始めました。まだまだニーズは少ないのですが、子供に来ていただく中で、つながりを深めていけばいいという気がします。また、海水浴場は毎年時期になると開設しますので、今年から、その場所で達者の産品を紹介し、販売もできないだろうかと相談しています。

**板垣氏** 達者集落からは田んぼは見えないのですが、綺麗な海が見えるところです。田んぼは上へ行かないと見えないのですが、山があって、田んぼがあって、海があってという一体となっているところで、海ともコラボしながら、海も山も、田んぼも全て活かしていく地域の取り組みなのだろうと思います。地域には色々な宝があるのだと思いますが、山本さんのところは海は遠いのでしょうか。

**山本氏** 海までは10km～15kmぐらいですね。

**板垣氏** どちらかというと里山の宝を売り出しているということなのですね。

**山本氏** お米に関しては三井町の枠にとらわれず、海側の生産者ともつながる取り組みをしています。輪島市内の9軒の生産者と連携をして今取り組みをしている「能登輪島米物語」は、2合のお米をそれぞれの農家さんが混ぜないで、自分の顔やお奨めのおかず、自分の生産地の近くの観光資源をパッケージにしに行っています。地域連携の中でも異業種連携、農業だけで連携するのではなく、多業種で連携することも一つの重要なことなのかなと思っています。

輪島の9軒の生産者さんは、お米を売りたいのではなくてお米を通して輪島を売りたい、そのような意志がはっきりしていたのです。輪島といえば輪島塗、観光地であり、海のものもあり、山のものもある地域、本当に飯の友もたくさんある地域なので、「おかずで旅する輪島のお米」というコンセプトを設定し、「お米×おかず×旅」と、さらには器、そのようなことをやっております。旅といった観光資源であるパッケージであり、「おかずを入れていこう、生産者を売っていこう。」ということをやっております。

次の9月に、たくさんある旅のプランの中から、どのように輪島に来てもらい、生産者と交流してもらおうのか、どう売り出すかということで、能登空港に着いたら輪島塗のお茶碗が貸し出され

ており、このお茶碗を持って農家さんのところに突撃し、新米を食べる。さらにお米だけではなく、その器の作られているところや、その農家さんの奨める飯の友の作られているところを見に行くことを、これから実験的に始めていこうとすることで、結果的にお米のファンになっていく、地域のファンになっていくことを目指した取り組みをしております。

**板垣氏** お米の販売で、どう消費者と結び付いていくかが棚田米にとって重要な課題だと色々なお話をいただいているところでございます。

ここで会場の皆さん方にも参加をいただければと思います。特に米の販売、あるいは棚田へ消費者に来ていただく取り組みとか、オーナー制度とか含めて、何か取り組みの事例等も含めてご発言いただける方がいらっしやしませんか。

**会場（伝統文化と環境福祉の専門学校 校長 本間氏）**

私は佐渡の者なのですが、佐渡の棚田米を買っています。大変美味しいです。その棚田米を食べたら他の米は食べられません。ではそのうまい米をどうして作るのかということには色々棚田という気象条件・土壌条件・管理条件などが揃っていないとダメです。まず土壌分析をして、土壌の塩基置換容量がどうであるか、あるいは窒素含量がどうであるか、その辺のことを踏まえながら、中干しはきちんとやる。それと開花期の温度。コシヒカリの場合は、だいたい26℃前後に開花期を求めないとうまい米は作れません。だから棚田といっても、開花期の温度がどのくらいであるかは、品質によっても違いますけど、きちんとしなければいけない。もっと科学的な検討をしないと、美味しい棚田米もあれば不味いものもあります。棚田米だから売れるのではないのです。美味しい米を作るから売れるのです。この棚田サミットも夢があるとか、命があるのはロマンがあっただけなのですが、夢や命があることの基本は、棚田の農家の人たちが生活できる条件を作らなければいけないのです。若者が棚田を作ることによって生活でき、結婚し、子供を産める条件を作るには、美味しい米を作る技術を研究しなければいけないと思います。

その中で夢や命と言っても、基礎が成り立たない限り、夢や命は保証できません。それを保証するためには、その基礎がなければいけません。

要するに美味しい米を作る、そのためには、沖

繩や北海道や色々な地域によって気象条件も違うわけですから、自分たちの住んでいるところで美味しい米を作るためにはどうしたらよいかを、地域の大学に農学部もありますし、関心のある学者もいるでしょう。それらと連絡をとりながら、それぞれの地域で美味しい米を作る、そうすれば絶対売れますよ。そのような美味しい米を作らない限り、棚田地域の農業は崩壊していくので崩壊させないように頑張ってください。

**板垣氏** 科学的に美味しい米をきちんと作っていくことが大事だというご指摘だと思います。特に棚田米は、やはりきちんとした品質を確保していくための努力を、それぞれの地域でされていると思いますが、さらに科学的な裏付けを、というお話をいただきました。

他に、特に販売とか、結び付きの関係でご発言いただけるとありがたいのですが、いかがでしょうか。

**会場（小倉千枚田管理組合 品川氏）**

金子商店様にお伺いしたいのですが、佐賀の玄海の棚田米を販売されているとおっしゃっていましたが、どういったコンセプト、例えば、これは美味しいという付加価値がどのように付くのかを教えていただきたいと思います。私たちは棚田米は、冷たい水で収量は少ないけれど美味しいのだということで作っているわけなのですが、その辺のPRの仕方、値段的にどのくらい差があるのか、販売される業者さんとして、値段がどのくらい違うのだということも含めて教えていただきたいと思います。

**金子氏** 私が初めて玄海・肥前の棚田米に出会ったのは、もう十数年ぐらい前です。色々な所で棚田米は作られているのですが、ここは一人の生産者だけで完結しているのではない点です。精米をしたら虫が食べた小さな点とか、小粒であったりとか、品質があまり良くないものもあれば、品質が高いものもあります。農家だけで全部やろうとすると、選別機を入れなくてはいけない、フルイの編み目も大きくしなくてはいけないと、米づくりで大変なのにさらに苦労もコストもかかってしまいます。でも玄海では、共同乾燥施設（籾出荷）があって、生産者とJA（施設調整・流通）、行政がうまく連携し合っているところです。そのようなお米でも、入荷したら玄米を選別機で品質を高めています。どうしてかと言うと2回目買ってもらいたいから、3回目買ってもらいた

いから、思いっきり選別機で2%から3%ぐらい整粒ではないお米を取り除いています。なぜなら、品質が悪いと見た目の問題もありますが、今の消費者は、毎回炊きたてを食べる方はあまりいらっしやらないと思うからです。例えば炊きたてを保存しておいて、あとで電子レンジでチンした時に、品質が落ちていたり、未熟の白っぽいお米がたくさんあったりすると、柔らかく歯応えがなくなるのです。そのような部分で品質を高めたいと思ってやっています。2%、3%落ちた分、やはり値段も高くなってしまいます。棚田米だけで高くしているのではなくて、棚田米をより品質を高めようとした分、値段を上げさせてもらい、ご理解をいただけるように取り組んでいます。

**板垣氏** 品質をどう確保していくかというのが課題だと思えます。今小倉千枚田のお話を品川さんからご発言いただいたのですが、小倉のオーナー制度についてお話しいただけるとありがたいです。小倉の佐々木さんはいらっしやいますか、お願いします。

#### 会場（小倉千枚田管理組合 佐々木氏）

オーナー制度で運営しており、米作りを始めまだ8年目だと思えます。現在のところ非常に小さい田んぼで63枚維持しております。各田んぼに一人ずつのオーナーを全国から募集しており、今のオーナーの数でいいますと63人のうち約20%が佐渡の方、新潟県の方で20%、あとの60%は関東がほとんどです。この方々が毎年募集して毎回応募していただいているのですが、そのうちの約70%の方はリピーターという固定した個人の方です。あと残りの20%前後はやめていったり毎年新しい方が入ってくるということです。募集すると口数をオーバーして応募いただいておりますので、何名かの方にはお断りしたり、またよく知っている人には譲って欲しいというお願いをして、田んぼの管理はかなりの皆様のご協力を得てやっております。もう少し増やしたらどうかという、田んぼはまだ広げれば広げるだけの用地はあるのですが、ただ実際維持するのは管理組合の方でして、管理組合の人口構成がこの7~8年の間に高齢化して何人かの方が実働が難しくなり、若い組合員の方はそれぞれお仕事をもっていたり、自分の田んぼがあったりするものですから、労働力に限界があり、これ以上は増やせません。さらに最

近では、それを補うようなことで棚田サポーターという県の組織があります。その方に草刈りとか畦塗りという激しい労働にも来ていただいて、やっと維持しているところです。

味については、私は組合でやっておりますがオーナーでもあり、関東に何人かの知り合いがいて、そこに米を分けています。オーナーの方に年間30キロの玄米を渡すことになっている契約です。それを東京の私の友人が、また友人に分けたりしているのですが、その方たちも美味しいから私もオーナーをやりたいと新しく参加してくれる方もおられます。その方たちに渡している米は、金子さんのお話じゃないのですが、品質的にはそれ程均質なものを渡していない印象がありまして、青い米があったり色々あるのですが、それでも少量稀少価値があるということで、美味しいという評価を得て、こちらが言わなくても新たに応募してくれる方がいるのが大変強いところです。

**板垣氏** オーナー制度は棚田米を支えていく上で、非常に強力な仕組みだと思えます。固定的なメンバーで持続的に支えていく点で優れた制度だと思えます。

米の販売といいますと色々な販売チャンネルがあり、金子さんのようなお米屋さんのルートもあれば、先ほど西山さんがお話しになったようにスーパーは非常に大きなウエイトを占めているわけで、その棚に並ぶか並ばないかが米の命を決めたりするわけです。そんな大きな販売流通の中で、棚田米についてどのような取り組みが可能なのかを、今回棚田サミットではあまりお話を聞けないのですが、JAの方が何人かいらっしやいますので、ぜひ米販売の中で棚田米が果たして位置付けが可能なのかということも含めて、どう位置付けているかをJA佐渡の前田理事長さん、その辺のコメントをいただければありがたいです。

#### 会場（JA佐渡 前田代表理事理事長）

私の方からJA佐渡の棚田米の取り扱いについて概要説明を申し上げたいと思えます。棚田の海岸部も250kmもあるわけですが、その中で中心的には佐渡の地図を思い起こしてもらいたいのですが、どちらかというとな側の小佐渡と言っております海側、新潟に近い方を前浜地区と言っておりますが、その一帯の中山間地で中心的に行っております。北側の一部、それも海側でありま

すが、その中山間地でも棚田米として取り扱いしております。

お取引先から当然産地指定とともに、地域を指定していただいておりますので、JAはそれぞれの地域に応じて区分集荷をしております。全体の取扱量は230tぐらいですから、まだ10%にも満たないわけですが、27年産で取り扱い実績はそのぐらいであります。

産地指定をいただいている場合、加算付きで販売をさせていただきたいとお願いをしております。

本来ですと反収や作業コストを考えるともっと加算金付きで販売したいのですが、なかなか取引先との関係もあり、生産者の皆さんの手取りでいくと60kg（1俵）で500円から1,500円ぐらいの加算を付けて販売ができていくということです。

お取引先ですが、生活協同組合が最も多く、さらには佐渡のこだわりの米、さらには棚田の米ということで情報発信をしやすいお米屋さんもかなり取り扱いをさせていただいており、高級料亭にお米の産地としての佐渡、さらにはお米そのものの価値を理解してくれる、さらには棚田であるということについて共感をしていただいている皆さんに販売しています。

特に代表的なのは、生活協同組合の中でパルシステムさんがございます。ここは非常に長い歴史がありまして、条件不利地域を支援するのだと明確に位置付けをしていただいて、生活協同組合が生産者団体であるJAなり、生産者の皆さんと連携をして棚田を守る活動として位置付けをいただいているところです。一部の地域では交流会等なども非常に熱心に長い間をかけて継続されています。ただ残念ながら、生産量は落ちていくというのが正直なところでありまして、お取引先からは安定的に棚田米の量的な確保をお願いしたいと逆に言われているが、生産が追い付かないという状況があります。

消費のところではやはり高齢化等によって購入ロットが小さくなっていきます。従来ですと5kgで買われたものが2kg、もしくは3kgということで半分ぐらいのロットになってきております。そのことで佐渡米ですと、一般のところから5kgですと1,000円ぐらい高くなるわけですが、それが半分以下の量になるとワンコインで価値の評価をしていただけるので、わりとこだ

わっている方が手応えとしては非常に多くなってきていると感じます。ワンコインならこだわっているものを常時食べたいというお客様も増えていると思っております。

はざ掛け米も実は卸しの皆さんから、こだわったものについて、そのコストはきちんと払うので、ぜひはざ掛け米を量的に確保していただきたいというありがたいお言葉をいただいております。ぜひ生産者の皆さんと一緒にこだわりの取り組みについてさらに情報発信をしていき、消費者もしくは流通に関わっている皆さんと大いに結び付きを強化していきたいと強く思っているところです。

**板垣氏** JAという大きな流通を扱うところでの、棚田米という特殊なアイテムになり、その取り扱いに努力をされているというお話をいただきました。

今の会場の皆さんの発言も含めて、その前のパネリストの皆さんのご議論も整理しながら、ここでコメンテーターの齋藤さんからまとめに入るためにこれまでの議論の整理をお願いしたいと思います。

それを受けて、それぞれパネリストの皆さん、今日のディスカッションを通しての結論的な、特に棚田を守る皆さんへのアドバイス、こんなことをしたらいいのではないかとという提言に絞っていただけるとありがたいです。

それでは齋藤さん、お願いします。

**齋藤氏** 難しい課題ですけれども、今お米の美味しさという話が出てきました。私たちは平場の米も作っているわけですので、平場についてはこれから品質の強化の分野が激しくなっていくのだと思います。ただ棚田とか条件不利地のお米については、美味しさだけを追及していく米ではその地域は生きていけない可能性もあるのだらうと思っています。美味しければいいわけですが、特別というのはいらないのだと思います。ある程度平均的な美味しさがあればいいと思います。それよりもやはり大事なものは、その価値や思いを消費者にどう伝えていくかという頑張りだと思っています。私も棚田の方へ行っても約10年作っていますが、棚田の米は水が冷たすぎてうまく作れません。でもそこへ行くと非常に水がきれいなので、そこそこ平均的な米はとれるのだらうと思っています。多少収量が下がっても、安定的にとれるものを一つ武器にして販売を



やっていこうかと思っています。棚田の方に行くと感じるのは、棚田の生産者の方々の仕事は非常に丁寧できれいだということです。私は非常に雑な作業をするのですが、そういう意味で細やかな優しさをもつ人間が多いのだろーと思ひます。人との交流をもっともっと続けていければいいかと思っています。

私も中山間地の代表をしています、地域での販売というところも手掛けていきたいと思ひっており、そこは八王子という地域なのですが、そこは約4haぐらひあります。そのような米をなんとか東京の八王子に向けて、八王子のふる里という形で販売をしたいという構想をもっているのですが、なかなか一緒にやっている農家の方々は、このような条件の悪い田んぼでそのような米ができるのかと元気がないというか、もっと前を向いた取り組みを一緒にしていきたいし、そのようなことを引っ張ってきたいと思ひています。

そこで作っている生産者が元気を出して、自分たちの地域、またお米がマイナスではなくて、もっと良いものであり、良い地域であるということ発信できるという元気をもつことが大事なのかなと思ひています。元気があれば消費者の方々もあのお米は元気があって買ってみたいなという思ひになるのだと思ひています。

**板垣氏** それではまとめとして、このあとパネリストの皆さん方からそれぞれお話をいただきたいと思ひます。米の美味しさ、それから景観やその地域の素晴らしさ、これらを消費者に発信をし、そしてつないでいく。それが持続可能な里山・棚田を守っていくということが大きな流れになるわけですが、その中で提言やアドバイスを含めてまとめとしてお話をいただければと思ひます。それでは特に食べる側、消費者の側からとして西山さんからお願ひいたします。

**西山氏** お米は本当に色々な種類があつて、どれを食べたらいいのかと悩むのは消費者にありがちなことです。このお米がどんな味なのか、一回の購入の量が多いので、試して買ってみるという冒険心が主婦にはなかなかないところがあります。どんな味なのか、どんなおかずが合うのかというのが買う前に一番知りたひところであり、温かいと美味しいのはほとんどだと思ひのですが、冷めても美味しい、ならばお弁当にもいいよね、だったらどんなおかずが合うのかな、

ご飯そのものの味はどうなのか、ということが一番知りたひというところではあると思ひます。それを知るのには作つた方でないと分からないと思ひています。あと、土地のものと土地のものを合せるというのが一番美味しくいただく方法だと思ひます。職業柄私はもっと発信していかなければならないことだと思ひます。

私が聞きたいと思ひることがあります。生産者の方は作られたお米をどんなふうによしあがっているのかというのが、とても興味深いところではあります。

情報というものに関して言えば、先日私のブログで棚田サミットの動画を紹介させていただきました。ドローンを飛ばして棚田を画面いっぱい見て、その景観にも見とれ、そこでお米を生産する農家さんたちの笑顔と私たちに向けられるメッセージというのが強く残りました。それを載せた時に読者の方が、「棚田の風景を見てると感動しますね。」というコメントを残してくださつて、こうした動画だとかネット上というのは伝わりやすいです。動画は、子供も大人も見ることが今はとても多いです。学校の授業でもパソコンを使うことも多いので、毎日見ていて変わらない里山や棚田の風景というのは1年を通すととても大きな情報に変わります。日本だけでなく、世界にも発信できる一つの手段であると思ひます。この小さな種というのを、何らかの手段で発信するというのをできればやっていただけると、消費者の目に止り、そこからお米に対する興味と、手に取る1つのきっかけになると思ひるので、見る努力も必要なのですが、情報を発信するというその手段をしてもらえると私たちは嬉しいです。

**板垣氏** それぞれの棚田米がどのようなものなのかをやはり消費者に明確に伝えていくということ、棚田を取り巻く世界をできるだけ情報発信をしていく、そして消費者のところに届けていくという努力が必要だと思ひます。金子さんの方からまとめとしてお願ひします。

**金子氏** 私のところでは十数年以來ずっと佐渡米を取り扱っています。全国の中で、北海道、佐渡、佐賀はものすごくまく生産者・JA・行政が連携し合いながら、情報発信をしている地域だと肌身で感じております。棚田という消費者の皆さんは、おそらく景観がいい、原風景と言つてくれます。昨日店に佐渡の生産者の方が20名

観光バスできてくれたのですが、そのときに出た言葉が、「すごい大変なんだよ。」「苦労しているんだよ。」というお話もありました。それを逆手にとるのではないですが、景観がいい、原風景、プラス苦労している、これをどうやったら消費者に伝えられるかというところなんです。

今会場の外にもものすごくきれいな写真が掲示されています。例えば「苦労」は、夕日をバックにして水が張っているところで手作業している。そのシーンを載せるリーフレットがあると伝わります。リーフレットを毎年、もしくは2年に1回、更新をしてもらいたいのです。お米と一緒にそのリーフレットをお客様に渡せば、棚田の価値を分かってくれると思います。佐渡には「ぼくはトキ」という冊子があるのですが、他の産地よりも結構更新されています。小学生にも人気があって、そのような情報発信をして、その人がまた誰かに伝えてくれるような、リーフレットの重要性を提案いたします。

もう一つは、まずはお米をもっと食べてもらうことです。棚田米プラスお米を食べてもらう、これを両輪で走らせないといけないと思います。今全国のお米マイスターでも、たくさん食べてもらうためにはどうすべきか、取り組んでいます。本来であれば1日だいたい2合食べてもらいたいのです。まずは生産地でぜひ2合を食べてもらいたい。これは大変なハードルじゃないのです。1970年代はみんな食べていたのです。今は1合しか食べていないのです。1合しか食べていない人に「もっと食べてくれ。」と言ってもなかなか難しいです。お客様にも生産・売上のためではなく、「あなたの幸せのためです、あなたの元気のためです。」と、うまく伝え実践していただけるように取り組んでいかなければなりません。

日本の農業を変えるのは、4文字だと思うのです。10年ぐらい考えていたのですが、「おかわり」これが浸透すると日本の農業が一気に様変わります。今740万tぐらいですか。皆さん、おかわりしてみてください。1,400万tですよ。大変なことだと思います。この「おかわり」という言葉を最後にお伝えします。

**板垣氏** 具体的にリーフレットというご提案をいただき、さらにはお米を食べてもらう。バックグラウンドとして米を食べることがどんどん少なくなっていますが、そこをくい止めることが必要なのだと思います。そのような取り組みも併

せてやっていく必要があります。

それでは山本さん、今までの取り組みから特に棚田の皆さんへ提言やアドバイスなりをお願いします。

**山本氏** 私からは変化球といえますか、本題とはちょっと外れた部分になってしまうかもしれませんが、「安心・安全・美味しいお米」は皆さん作られていることとは思いますが。消費者にとっても当たり前の時代になってきている中で、どのようにお米離れしている中でお米に興味をもってもらうのか、先月の初めから今月の初めまで渋谷でイベントが行われていました。ご飯の祭典である「ごはんフェス」というイベントです。

そのテーマが「お米も趣味になる」。やはり食べてと言っても米離れが進んでいる中、どうお米を楽しめるのか、どう自分たちの生活の中にお米を取り入れるかということに重きをおいたイベントでした。色々な商品が出ていて、食べ方の提案、例えば「卵かけごはん専用米ですよ、気分に合わせて食べられるブレンド米ですよ、ブレンドをすることによって朝に食べたいお米ですよ、元気を出したいときに食べられるお米ですよ。」など何を伝えるのか。やはりすごく申し訳ない言い方になってしまうのですが、本当に苦労していると思いますが、「苦労しているんです、分かってください、だから買ってください。」というだけでは難しいと思います。ボランティア精神で買ってしまうような状況になってしまい、結果的にそれが美味しければ、もちろん美味しい、さらに値段的にも買えるものであれば買い続けますが、ボランティア的に買ってしまうと、なかなか続かない部分もあると思います。いかに消費者の人たちに「美しい景色で育てたお米であれば買いたい。このように使えるお米であれば買いたい、棚田は大事。日本のためにも棚田米を買いたい。」と思ってもらえるかが大事です。おそらくここに集まっている全国津々浦々の棚田の方たちが集まってしまうと、結局その中で取り合いになってしまうので、一定層を増やしていく努力も必要です。そこまで熱くないユーザーの人たち、お米を食べる人たちも振り向いてもらえる楽しさ、提案の仕方がこれからは求められているのではないかと、イベントを通して感じておりました。

**板垣氏** 棚田米だから買ってくださいということだけでは伝わっていかない。色々なものを切り口

にしていくということでの発信をどうしていくのか、そんな課題提起をいただいたと思います。

それでは坂本さん、棚田の側・生産側、代表としてというわけにはいきませんが、坂本さんご自身の、あるいはこのあとの達者の取り組みを含めて思うところをお願いします。

**坂本氏** 私たちも法人を立ち上げて10カ月弱になりますが、まだまだ目の前のことを追いかけるのが精一杯で、なかなか相談というものがうまくいっていません。

昨年収穫したお米を集落の皆さんに配り、試食していただきました。味は大変良いという評判で一安心したところです。また、東京の方で達者出身の方の集まりに行って、少しずつ味をみてくださいということでお配りしました。その中に近くの米屋さんと懇意にしておられる方がいまして食べていただいたそうです。本当に味は良かったということですが、「ただし」という言葉が付きまして。整粒歩合をもう少しということ、「やはり精米をしてからもしっかりと仕上げなさいよ。」というアドバイスもいただきました。

これからどうしていったらいいのか、皆で相談していかなければいけないと思っています。

昨年も台風で白い米がたくさん混じりました。色彩選別機に掛けてもらったのですが、完全には取り切れなくて、見た目も落ちる米になっていました。それらの対応もこれから考えていかなければならないと考えます。

今日たくさんのアドバイスをいただきましたので、それらのどこから手を付けていけばいいのか、佐渡にも小倉や岩首など、先進地がありますので、それらの方に教わりながら一つずつクリアしていけたらと思っています。まだまだ始まったばかりで、何をして、どれだけの労力をかけ、それがどう見返ってくるのかということもこれから考えていかなければならないことと思っています。

**板垣氏** それではこれまで皆さん方とお話を続けて、一定の方向がおぼろげながら見えてきたのかなと思います。

1つは、当然のことだと思いますが、消費者の皆さんとどのようにつながっていくかということ

が、棚田・棚田米を守っていくうえできわめて重要だと。その結び付きの作り方は色々ありますし、情報発信の仕方も色々ありますが、そこに棚田の側がかなりの力を注いでいく必要があると思います。特に山村であるとか、私たちも含めて農村地帯全体が、自己表現・自己主張・情報発信ということについては、かなり引っ込み思案なのですが、やはり伝えようとする努力、伝えようとする姿勢がまた伝わりますので、そのことをぜひそれぞれの棚田の皆さんの中で、このあとも取り組みをしていかなければならないし、私たちも頑張っていきたいと思っています。

棚田の価値は、もちろん日本の原風景であるこの棚田の景観を守ることは当然あるわけで、それと同時に買っていただけることは、また食べようということですから、やはり味や品質については、私たちにはプロとしての心意気もあるので、きちんとした食味品質を、それぞれの地域の特色を活かしながら実現をしていくことがきわめて大事だと思います。

そのことに限らず、様々な提案や事例のお話もいただいたわけではありますが、これらのことを活かしながら、全国の棚田地域が元気に頑張っていて、そして楽しく棚田の地域をより活性化させていくために、このあともそれぞれの地域の中で頑張っていっていただければと思います。

今日の第1分科会、米を巡る話し合いについてはこれをもって終了させていただきたいと思います。



◆テーマ

「棚田には命がある！  
～棚田が支える命と共生し活かせば、  
たくさんの夢が広がる～」

座長：豊田光世氏（新潟大学 研究推進機構 朱鷺・自然再生学研究センター 准教授）

コメンテーター：佐々木邦基氏（（一社）佐渡生きもの語り研究所 副理事長）

パネリスト：中村浩二氏（金沢大学 名誉教授、里山里海プロジェクト 代表）

本間太郎氏（海利用研究会、農家、漁業者）

竹田和夫氏（新潟県立新発田高等学校 教諭、棚田学会 理事）

大野広幸氏（社会福祉法人 未来保育会 理事長、ふじみ保育園 園長）



**豊田氏** 第2分科会の座長を務めさせていただきま  
す新潟大学、朱鷺・自然再生学研究センターの  
豊田光世と申します。

私は2007年からずっと佐渡島で研究をして  
いるのですが、その時は東京や兵庫に住んでい  
て毎月通って研究をしていました。あまりにも佐  
渡が好きになり去年の9月に佐渡に移住をして、  
今は佐渡を拠点に研究を進めています。色々な  
人たちが集まって物事を決めていく合意形成の

研究をして、漁業、農業、行政の方、私たちの  
ような研究者が佐渡をより良くするためにどう  
したらいいのかと、アイデアを持ち寄りなが  
ら考える場を作っています。今日の分科会もそ  
のような場になればいいと思っています。

この分科会のテーマは「命」です。命って何かと、  
漢字で命と書いてあったのですが、生命という言  
葉もありますし、命のミッション、私たちが成し  
遂げるべきこともこの漢字が表現するものです。

また、英語に直してLifeと考えると、暮らし方・生き方といったものも含まれるのかと思います。私たちが生きることや暮らすことと、棚田がいかに関わっているのかについて話をしていくのですが、特に今回お越しいただいているパネリストの方は、棚田を通じて人々の学びや成長を日々考えていらっしゃる方ですし、色々な実践をされている方々です。

その活動の中で、私たちはいったい何を伝えようとしているのか、何を後世に残そうとしているのか、次世代に引き継いでいくべきものは何なのか、自分たちは何を学ぼうとしているのかといったところをお話しいただけるのではないかと思います。

では、これからコメンテーター及び4名のパネリストの方に自己紹介をしていただきたいと思います。

まず、心強いサポーターとしてコメンテーターの佐々木邦基さんに自己紹介をしていただきます。

**佐々木氏** 地元佐渡でお米作りをしている、佐々木邦基と申します。

この分科会と非常に関係の深い暮らしをしていて、佐渡の猿八地域の棚田を耕作したり、NPO（特定非営利活動法人）の活動で小学生に対する環境教育みたいなことをやっていたり、子育てをしていたり、日々悪戦苦闘しておりますが、この時間を通じて、また明日からの元気をいただけたらと思っております。

**豊田氏** 早速パネリストの皆さんの発表に移りたいと思います。

まず初めに大野さんから、保育園の取り組みについてお話をいただきます。

**大野氏** 大野広幸と申します。

今もそうですが、元々写真家として色々な作品活動をしています。15年ほど育児向け雑誌で、保育園・幼稚園での保育・教育、家庭での育児を取材していた関係で、保育園の運営を任せられ、もう1つの仕事が増えました。埼玉県狭山市で2園、さいたま市で1園、園児全員で370名ほど預かって保育園を運営しています。

うちの保育園は主食となるお米を、佐渡島の棚田から年間4.5tをお願いしています。子供たちに美味しい・安全・安心な給食を提供する形になったのですが、その経緯についてお話ししたいと思います。



その後、子供たちに対する食育について保育園での取り組みをご報告させていただきます。

なぜ、私が佐渡に来ることになったかという、今から11年前に「週刊朝日の桜と木造校舎」の企画で、岩首棚田がある岩首地区に取材で伺い、その時に子供たちの田植えと、ビオトープの授業もありました。トキの活動をされている方が来まして、かつては佐渡にトキがいた昭和の時代に、そこが餌場になっていることを初めて知り、トキの放鳥や人間とトキとの共生・共存事業に入るきっかけになりました。

私は、お米を作るのに農薬をかなり使うということは無知でした。トキが生息していくためには、やはり主食としてかなりのドジョウや、サダガエルやミミズを1日中食べています。それで農薬を使ってしまうと、日本のトキが絶滅したように餌が無くなってしまうということで、佐渡島が5～8割減の低農薬でトキとの関係で農法を始めていることを初めて知りました。そのようなお米を子供たちに食べさせてあげたいという思いで3～4年目になりました。

岩首小学校の体験の中からトキの取材になって、生物多様性で農薬や化学肥料をかなり使っているお米を私たちは食べているのかと疑問に思いました。佐渡に行くときは、いつも水津地域の民宿に泊まっています。その時に、「お米ってこんなに美味しいのか。」と初めて感じました。そのお米は棚田米だったのです。本当にもちもちとしていて、家ではいつもご飯茶碗1杯ぐらいしか食べなかった自分が、民宿ではいつも3杯食べてしまいます。「こんなにお米って美味しかったのか。」と、40何年経って初めて知ったのが佐渡島の棚田米でした。

今、岩首の棚田でお米を作っていたいただいているのですが、その食育の一環ということで、毎年

栄養士と保育士を連れて、棚田での田植え体験をしています。うちの保育園に來ている栄養士のうち、女子栄養大学の出身者が、10人近く作業に來ています。女子栄養大学の創立者の最初のスローガンは「食は命なり」です。子供たちの食べるものが肉になり、骨になり、血になり成長していくことで、やはり安心なものを与えてあげたいということが私の思いで、このような活動を行っています。その先生たちが田植え体験したことを子供たちに伝えています。

そうして、佐渡のお米を育ててみようということで稲を送っていただき、発泡スチロールで作った田んぼですが、川越から田んぼの土をいただき、土作をしました。田植え、水やり、土用干し、最後は稲刈り、脱穀、ペットボトルに入れて精米をやり、「おにぎりパーティー」をして、1年間を通じて保育園でもそういう活動をやっています。今まで子供達は、食べ残したり、こぼしたりしたのですが、1粒1粒の大切さを知り、農家の方が一生懸命作ったお米を毎日食べています。

また、もち米もお願いしているので、入間川部屋の力士さんから来てもらい、餅つき大会などもしています。

食育の一環で栄養士さんが、お米はどのように育て、玄米で届き、給食室の中に精米器があるので、精米したお米を見せて、「こういう形でお米になるんだよ。」ということも食育の一環でやっており、主食の大切さを子供たちに伝えていく指導をうちの保育園はやっています。最終的には、子供たちが毎日食べるものを、自然の中で、低農薬で大切に育てられたお米が、子供たちの成長には、棚田米が役に立っているのではないかと考えています。

**豊田氏** 子供たちがお米を作っている表情や食べているときの表情が生き生きとしていて、農家さんに伝わるとういことかと思いました。

では、佐々木さんから一言お願いします。

**佐々木氏** 大変感銘を受けました。特に『食は命』とおっしゃられた言葉が非常に印象に残りました。田んぼがお米だけを作る場所ではなくて、色々な生きものを生み出して、トキが食べに來て、生きていることを、私も自分の田んぼで環境教育をするときに一生懸命伝えようとしています。

ご質問させていただきたいのですが、特に「命」という部分をどのように子供たちに伝え、それ

がどのように子供たちに伝わっているのかをお伺いします。

**大野氏** お米もそうですが、やはり食べるときに『美味しく・楽しく食べる』ことが一番で、環境を整えることが大切ではないかと思い、給食も栄養士さんとの食育の指導を深めています。

私が来る前までは、冷凍食品や簡単に揚げられる揚げ物で済ませていたのですが、私は3園を運営しています。普通保育園は栄養士1人、調理師1人、調理員。本園は管理栄養士を含めて4人の栄養士。姉妹園は3人の栄養士。もう1園は管理栄養士を含めて4人の栄養士で、贅沢な栄養士体制です。旬なものや、特に主食となるものを、安全で安心なものを食べ、食べさせるという自負もあります。私はいつも、親御さんには申し訳ないのですが、「家のご飯は美味しくない。」って言わせたいという思いがあります。

例えば、朝食を食べてこない子供たちや、ある時、スーパーで子供連れのお母さんが、夕飯の食材を買いに來ていました。私と話をしているうちに、「今日の夜は面倒だから、ここのマクドナルドで夕飯済ましちゃう。」という方や、育児向け雑誌の取材をしているときに、『一流企業に勤めている家の夕飯』という取材に行きました。そうすると3軒のうち2軒が、お父さんたちの帰りが毎日12時過ぎで、お母さんも「一生懸命作らなくていいや。」と思いまな板と包丁がありませんでした。全て、週末に大きなスーパーに行って冷凍食品を買い、電子レンジでチンしたものを、食べていました。私は驚いて、やはり粗食という中で、昼だけでもいいから本当の味、昔はおふくろの味があったと思うのですが、子供たちに食べさせたいという思いがあり、この棚田米を選びました。

**豊田氏** 衝撃的な話もありました。

では続きまして、青年の学びに関わっていらっしゃる竹田さんから話をお伺いしたいと思います。

**竹田氏** 竹田和夫と申します。

私の方からは本を2冊回覧させていただきたいと思います。

まず1冊目は、『棚田はエライ』という農文協から出た本で、学校教育と見事に連動した名著だと思うのですが、著者の石井里津子様がちょうどここにいらっしゃいます。これは大学生に16年間ずっと読ませているため、ボロボロになってき

ているのですが、著者の石井様に敬意を表しまして著者から皆様にご回覧をお願いいたします。

もう1冊は、昔文化庁が出した「月刊文化財」という雑誌の棚田特集なのですが、初めて棚田というものに文化的な価値付けをしました。この中で、佐渡の小倉千枚田を私の論文で取り上げました。小倉のすごいところは、傾斜地の水田開発の記録が古文書記録でしっかり残っているということです。このような場所は少ないのではないかと思います。どうぞ時間をかけて皆様ご覧ください。

それでは私の話なのですが、教育分野、特に若者と棚田という観点でお話をさせていただきます。「若者と棚田」というと、全然関係ないのではないと思う方もいるかもしれません。今日の開会式の来賓のあいさつにもありましたし、何と言っても地元佐渡総合高校の皆さんの素晴らしい事例発表を聞いたり見たりしているとこれからの農業、特に棚田の明日を担うのは、「やっぱり若い人たちだね。」と思われた方も多いのではないと思うのですが、いかがでしょうか。

学校教育の中で、社会科の教科書とか副読本を小・中・高と見比べてみますと、この10年ぐらいでかなり変わってきています。10年前と比べると棚田の写真がいっぱい載るようになったのです。驚くべきことだと思います。棚田でない農業一般の平野部写真で、新潟県の亀田郷や水田の農業の写真は以前から載ってはいるのですが10年前には考えられないことです。再度説明しますが棚田の写真が小・中・高の教科書で、どちらかというとも歴史よりも地理とか政治経済というところで位置付けられるようになってきたのです。しかし、テキストの写真としては印象に残りますが、どのような意味があるかということについて、残念ながら学校教育でしっかりと教えているわけではないのです。

ところが今、教育の手法も変わってきていて、新聞報道にもありますように、今度の新しい学習指導要領では、特に高校の学校教育が変わると言われています。一方的な説明型の授業ではなくて、アクティブラーニングと言いまして、生徒が主体の授業に大きく衣替えせざるを得ません。そして、持続可能な教育というか、過去のことでは終わるのではなく、現代の問題を考える、そのような問いかけをしなければいけない。そのような意味において、棚田を考えることは、

新しい教育手法に求められている好素材じゃないかと私は思っています。

私は16年間、学校教育の中で棚田に関心を持ってもらう授業をやっています。具体的に申しますと、まず中学生が高校に入る時のオープンスクールとか、体験授業があるのです。そこは棚田ではなく、新潟の平場の亀田郷や平野部の農業を取り上げて、そこを实际回ることはできませんが、疑似体験フィールドワークというサークルをしています。そのときに地図も使いますが、ドジョウやオタマジャクシやザリガニなど、その地域に特有な、まだいる生きものも地図に落とすようにしています。そのようなことを中学生が高校生になる時の授業でやっています。そのときに比較として同じ県内の中山間地の棚田を示します。皆、興味津々です。高校生に対してですが、高校は地理分野とか歴史分野の教科書にも棚田がコラムに少し載るようになりまして、そのようなところは時間をとってきちんと教えています。

新潟大学さんの方では16年間非常勤講師をやらせてもらっているのですが、専門の科目というよりも、どちらかというとも一般教養的な科目なので、それは浅く・広く、色々な学部・学科の学生さんが専門に入るための前段としてやっており、その中でも農業・農政をキーワードとして取り上げています。特に力を入れているのは、傾斜地の水田、中山間地域の水田です。かなり導入に無理があるのではないかと自分でも最初は思ったのですが、切り口としては写真・動画・風景画、特に新潟には酒井英次さんと言って「田んぼの画伯」と言われています棚田の絵を描く方がいらっしやいまして、これがまた良い味を出されていて、この方の棚田の絵ハガキを使うとすごく若い世代も入ってきます。



それから、そんなに多い人数は望めないのですが、高校生、特に大学生になりたての有志と一般教養の時間を使って、時々中山間地に行って田んぼの江ざらいや除草などのお手伝いをしたりしています。

16年間やっていると始めた頃とは異なる傾向が見えてきました。まずアンケート調査を最初の頃にやるのですが、そうすると棚田については知らないという人たちが、16年前では全く知らないという人が50%だったのですが、先日最新のデータをとりましたら60%と若干増えました。やはり教科書に小・中・高の中でも少し写真掲載されていることや少し取り上げられていることの影響なのかと思います。

あと変わってきたのは、「もっと知りたいというか、自分の郷里にも棚田があるのだけれど、どうしてそれがいいのか。」とか、「どういう意味があり、問題があるのか、もっと知りたい。」という興味関心が、10年前ですと50%だったのですが、先日アンケートをとったら70%に増えました。そしておもしろい指摘がありまして、私たちは小学生の頃田植え体験とかやったことがあるのだけれど、「厳しい作業しかやらされたことがない、楽しい体験はしたことがない。」ということです。これは鋭い指摘だと思ひまして、あとで授業を見直すようになりました。

もう一つ鋭い指摘なのですが、小・中でそのような田んぼに対する体験をしたとしても、高校で切れてしまうということです。通学する高校すら地元から離れてしまう人もいますし、高校を卒業して大学へ行くと帰って来なくなり、特に地方はそうで、佐渡もそういう状況だと思います。せっかく醸成された田んぼのイメージや田植えの体験との関わりが切れてしまっていることを彼ら自身の声で確認することができました。

ささやかですが若い世代と棚田をともに考える働きかけを16年間やりました。歴史的な価値付けも当然授業でやるのですが、それだけではおもしろくありません、意味がありません。16年間の棚田高大接続授業で配慮したことを整理します。

1つ目は、同世代への周知化です。「どうしたらもっと若い世代に知ってもらえることができるのだろうか。」ということ、大学生自身に考えていただきました。そうしたらこんな意見が出てきました。大学生が現地に行くと「地元の役

所の中では首長部局（市町村長の部局）と教育委員会が分離していて、ボランティアの申し出も理解してもらえない。」と言うのです。私は県庁で10年以上の行政経験があるのですが、大学生が言う言葉かと思ってびっくりしました。田植え体験とか農地・農政の問題というのは、確かに分離している気がしますので、大学生たちは鋭いと思いました。

特に佐渡に関わることでありますが、ジ阿斯（世界農業遺産）、ジオパーク、世界遺産はバラバラにやっているのではないのでしょうか。田んぼ・棚田なども3つのテーマ全体の中で考えれば、「もっと皆に見てもらえる性格を有しているのではないか、そして問題も見えてくるのではないか。」と思うのです。これは私が誘導したわけではなく、大学生から自然に出てきた指摘なのです。

2点目の観点は、価値付けです。価値付けはどうしても景観の方に皆目が行ってしまいますが、人文プラス自然という視点で、もっと広く見据えるべきではないのでしょうか。特に新潟大学の学生は、トキの関係で佐渡にやって来て餌場作りとかのお手伝いをしていますので、そのような多面的意識はやはり強いと感じました。

あとは、工学部の学生からは、「もっと土木的な観点で棚田のある地域の保全とか土地の崩落防止、その他保水機能とか、そういう機能を現実的な面で打ち出すことができないだろうか、遠慮する必要はないんじゃないか。」という積極的な意見も出てきました。

最後は、保持・保全です。これは一番難しいわけですが、農学部の学生からは、品種の改良が提案されました。工学部の学生からは、農道の整備・傾斜地の作業に合った機械の改良・農機具の改良が提案されました。それから法学部の学生からは、支払い保証制度の見直しが提案されました。経済や経営学部の学生さんからは、現実社会の中で棚田に関わる仕事がもう少し担保されるような経営と経済のあり方が提案されました。教育学部の学生さんからは、おもしろい可愛らしい絵が描いてありまして、学校の中で田んぼまで行かなくても、写真とか地図を使った疑似田んぼアートなど非常に柔軟な発想の仕掛けもされました。

今聞いていただいたように決してこれは現実の施策になるかどうか分からないし、少し素人の発想という感じがしないわけではないのですが、やはりそこが原点だと私は思うのです。若者の原



点は、そういうできるかどうか分からないけど、純粹にまず若い世代自身が感じるということで、私はある意味では、将来に向けて捨てたものではないと感じました。

そのようなことをどこかのフィールドで少し考えてみよう、新潟大学の地域から文化を考える授業の最後には山古志村に行って終わることになりました。山古志村で少しコメントしながら、今学生から出てきたことがどの程度実現可能かと考えました。

もしこの中で、今申しあげましたようなことに何か参考に供するようご意見・ご指摘がありましたら、ぜひ教えていただければ、今後それを活かして若い世代につなげて、刺激していきたいと思います。あくまでも私のスタンスは専門ではなくて、そこに入る前の学生たちに分かっていただき、つなぐ役割というか、あとはそれぞれの所属本部に帰っていただいて深めていただければと考えています。

**豊田氏** 大学生さんですか、色々な分野の学生さんたちが集まっているからこそ多様な棚田との関わりだとか価値付けができていのかと思うのです。色々な価値を色々な方向から考えたものを最初の方に学生さんの言葉で出てきたのですが、「土木の観点もあるよね、景観の観点もあるよね、品種のことも考えるよね、教育という切り口もあるよね。」と体系的に位置付ける。生物多様性とか生物文化多様性とか、最近「多様」という言葉が出てきますが、そのような観点が、多様なだけでなく、それらがつながり合うものとして体系的に発展していくような、その辺で先生の活動の中でヒントとかないですか。

**竹田氏** そうですね、現役の大学の教授を前に失礼なのですが、学問というと高校もそうですが、全て学問や教科が縦割りになっているので、一度それを取っ払って考えると、結局棚田をテーマにした体系付けにもなるのではないかと考えています。そして、一般論的整理にとどまらず、具体的な現実社会への還元をしないと全て始まらないような気がします。特に中山間地の農業には景観とは裏腹に厳しい現実があります。それを支えるものというのか、逆に励みになるようなというのか。そのように、正攻法で入るのではなくて、硬軟取り混ぜた投げかけ、問いかけをやって入っていくというのをやったら、いかがでしょうか。

先、言い忘れたことがあって、リアルに棚田を

感じることは難しいと思うのですが、私が県庁に勤めていたとき、カモシカの保護をやっていまして、カモシカが山間地の稲をかじってよく地元の人から怒られたのです。稲はガサガサになっていますが、そのときの稲を取っておき、大学の教室で見せたら手にとって山間の農業を肌で文字どおり感じてくれました。これはリアリティをもたせるささやかな仕掛けでした。だから私たち大人は、若い人たちに対しては遠慮しないで、もう少しリアルな問題を示していったらどうかと思いました。

**豊田氏** 今「リアル」というキーワードが出てきましたが、それぞれの棚田の現場はものすごくリアリティがあって、その中では色々な要素が複合的に絡まっていて、最後に現場体験があることが、重要なのではかと思いました。

では次のお話に移りたいと思います。中村さんです。

**中村氏** 中村浩二と申します。

私は棚田サミットに初めて参加させていただきました。今日は世界農業遺産に認定されている、日本では能登と佐渡、フィリピンではイフガオ棚田の話をしてします。

イフガオ棚田は、世界農業遺産であるとともに、世界文化遺産でもあります。ある時期には色々な問題があるので、世界危機遺産に指定されたこともありました。私は大学で教員をしており、45歳までの若い社会人を対象にした若手人材育成をとおして里山や棚田などの地域を元気にしていく活動を行っています。

私は棚田がある場所は里山環境の一部であると考えており、そのような意味で里山を広く定義しています。また、日本には里山里海という言葉があります。これは世界中で非常に高く評価され、持続発展を考える上で重要だと、評価されています。

里山里海が国際的に取り上げられたのは生物多様性条約です。COP10（生物多様性条約第10回締約国会議）が名古屋で2010年に開催されました。その後国連のFAO（国際連合食糧農業機関）が認定する世界農業遺産には、佐渡と能登を含めて日本で8地域が認定されています。最近、同じ国連のユネスコが認定する生物圏保存地域（BR、国内ではエコパーク）も、国内の里山や棚田のある場所がいくつも認定されています。

能登の世界農業遺産では、農業だけではなく、

色々な伝統文化、新しいイノベーション、制度体制、景観などがまとめて認定されています。佐渡は棚田や金山があり、素晴らしい伝統文化、能などもたくさんあります。

世界には全部で今 15 カ国 36 カ所の世界農業遺産があり、そのかなりの場所は、里山や棚田を含んでいるところです。世界農業遺産、あるいは世界文化遺産に認定されている棚田はたくさんあります。能登も佐渡も同じような問題があります。素晴らしい棚田を含めた里山がありますが、農業遺産に認定されていても過疎化・高齢化という大変厳しい現実があります。その中で大事なことは、若手の人材を育成することです。それは農家だけではなく、色々な人材を育成していくことが私たちの活動です。今も能登は人口が減り続けており、若い人がいなくなっています。

私は金沢にいますが、車で 2 時間半走ると能登の先端に着きます。そこの空き校舎になった小学校を使って、2007 年から「能登里山マイスター養成プログラム」を 5 年間やりました。現地に若手の教員を 5 人駐在してもらい、農業をする若手だけではなく、エコツーリズム、市役所の職員、JA の職員など、色々な若者を集めて里山マイスター養成をしています。地元の若者だけでなく、今は 3～4 割ぐらいが東京や神奈川、金沢などから来て、能登に定住しています。いずれにしても若手の人材を、しかも多様な志向をもつ若者、多様なバックグラウンドをもった人を集めて活動しています。

自然共生型農業の推進、食の安全とかエコリズム、これらはもちろん佐渡でもされており、そんなに目新しいことではありません。能登の取り組みの目標は地域を元気にしていくことです。はじめ第 1 フェーズは 5 年間、2007～2012 年までやりました。そのあと第 2 フェーズを 2012 年～今年の春まで 3 年間やり、この 4 月から第 3 フェーズに入りました。これまで第 1、第 2 フェーズでは全部で 128 人のマイスターが修了しましたが、金持ちになった人は 1 人もおらず、すごく苦労していますが、みんな大活躍しています。各自が自分のやりたいことを、自分だけでなく地域のために頑張ったり、能登の農業遺産を元気にしようとしています。

就農した修了生は、農業関係者だけではなく、近くにいる若者、自分が知っている若者たちを集めて 1 つの青年グループをつくり活動をはじ

めており、若者のネットワークが出来てきたことが、非常に高く評価されています。私たちのプロジェクトは、若者がやりたい活動ができるようにサポートし、色々なところで能登マイスターについて講演させていただいています。

次にフィリピンのイフガオの話ですが、私は以前から生物多様性締約国会議などを通じて、フィリピンの研究者とお付き合いがありました。フィリピンのルソン島北部、マニラから車で 9 時間のところにイフガオの世界農業遺産の棚田があります。ここでも若者が、都会へ出てしまうので、若い農業をする後継者がどんどん減っています。しかし、今でも地域の人々は伝統文化にすごく誇りをもっていますし、なんとか棚田を維持し、自分たちの文化を維持継承していきたいと頑張っています。ですからイフガオには、農業だけでなく、能登や佐渡とも一緒ですが、優れた伝統文化があり、耕作の儀礼、色々な宗教儀礼・文化儀礼があります。

2014 年 3 月から、「イフガオ里山マイスター養成プログラム」を、JICA（独立行政法人国際協力機構）草の根事業基金をいただき、今年 3 年目になります。地元イフガオの若者に毎年 25 人ずつくらい受講生になってもらっています。町役場で働いている人や、農業をしている人、それからエコツーリズムを志す人もいます。能登と一緒に色々な立場の人が自分たちの集落あるいはイフガオのために、世界農業遺産の維持を目指してたくさん集まっています。

毎年 9 月に 1 回、イフガオの受講生と担任教員の中から希望者全員を日本に呼んできて、能登をめぐる研修旅行をして農業法人、輪島塗工房、家族経営の酒造会社、白米千枚田などを訪問してもらっています。また、私たちの能登里山マイスターの能登学舎に来て交流や、意見交換会もしています。

もう既に 2 回修了式が終わり、1 期生は 14 人、今年の 3 月には 2 期生 21 人修了し、今 3 期生 25 人がさらに学んでいて、来年 1 月に修了します。私は毎月 1 回イフガオへ行っています。しかし、私が授業をしに行っているわけではなく、現地でイフガオ州大学の教員が中心となり受講生に授業を実施している様子を見に行くことが主目的です。日本から能登のやり方を持って行って、それをそのまま広めるようなことではなく、できるだけ現地関係者が、自分のやり

方を自分で作りあげて、マイスターを養成できるようにすることを期待しています。

やはり日本にもフィリピンにも素晴らしい里山や、素晴らしい棚田があり、農業遺産に認定されたところがたくさんあります。

しかしどこでも現実には色々な難しい問題があります。ただノスタルジーということだけではだめです。自然や伝統文化を活用して里山里海を元気にしていく、棚田をなんとか維持していくことが大事です。なぜ棚田が無くなったら困るのかを考えていく必要があると思います。色々な視点からの答えがあると思いますが、その一つは里山や棚田には、国際的な価値があり、国際的な交流、人材の育成の場となることです。能登の里山マイスターに参加している若者とイフガオで頑張ろうとしている若者たちがお互いに交流し、何か生まれてくるのではないかと私は思っています。

**佐々木氏** お伺いしたいことがあります。フィリピンと日本とでは状況が違うと思うので、それぞれのプログラムの中で、次に棚田を担う若者にどのようなことを教育の中で伝えていらっしゃるのかと、もう一つ私がどうしても聞きたいのが、能登に集ってくる若者たちでお金持ちになった人は1人もいないとおっしゃっていましたが、そこに集って来た人たちですごく元気に頑張っている人が、どのようなところにやりがいをもって一生懸命頑張っているのか、その2点をお話しいただけるとありがたいと思います。

**中村氏** 2つとも大きく難しい質問です。

まず、フィリピンのイフガオでも棚田を維持し、農業を続けていこうとする若者が減っていることは間違いありません。ですから休耕田が増えています。しかし人口全体はまだ増え続けています。しかし人口全体はまだ増え続けています。子供や元気な農家の方もたくさんいますが、壮大な棚田の維持は簡単ではなくなっています。私たちは地元の大学と一緒に仕事をしていますが、マニラにあるフィリピン大学とも連携して、人材養成を一緒にやろうとしています。どのような枠組みを作ればよいのか、まだ手探りの状況です。フィリピンの人々は「フィリピンの政府は何もしてくれない、それに比べたら日本ではどんどん行政がサポートしているように見える。」などとよく言います。しかし、それは誤解だと思います。フィリピンにはもちろん色々な行政の限界や問題があります。しかし、日本に

もよく似た問題があります。私は毎月イフガオに行っているけど、まだその辺はよく分かりません。現地の人々が何を本当に一番したいのかが今の段階では、まだよく分かりません。ですから、ここにいらっしゃる方で興味のある方は、私と一緒に現地に行って、違った視点から見ただけであればありがたいです。

2つ目ですが、若者が能登の里山マイスターになぜ集まってくるのかというと、1つは大都會での生活が行き詰まっているからです。特に東日本大震災や、都會での生活に色々不安を抱えており、それに比べたら能登に来て「何かやりたいことをやる方がずっといい。」ということです。一方地方の若者も、今のままでは能登半島から徐々に人口が減って、全体として元気がなくなることや心配しています。世界農業遺産に認定されてから能登が元気になったかもしれませんが、全体として長期的に見たら楽観できないと思います。自分たちの生まれ育った能登が、これからどうなっていくのか、たくさんの若者がある種の責任感と言いますか、使命感を持っています。

それから、外部から来た若者がお互いにインターアクションを起こし、ネットワークができつつあります。いずれにしてもこれから能登にはどんどん元気な人が集まってくると思います。ですから、成果を期待できるのではないかと私は思います。

**豊田氏** 教育や学びを押し付けではいけない、地域にそれぞれが何を追究していくのかを考えていくことがすごく印象的でした。

次に、本間さんのお話を伺いたいと思います。

**本間氏** 本間太郎と申します。

私は常々お坊さんのようなことを言っていますが、先祖伝来、この授かった命をどのようにしてつなげてくれたのか、それは食べ物によってなのです。これから子供や孫たちにそれをつなげていくために、今のような食の考え方で良いか、悪いかを真剣に考えてもらいたいのので引き受けました。

私の知っている若いご夫婦の一人がこんなことを言っていました。「俺が死んでも葬儀は急いでやらなくてもいい、防腐剤をいっぱい食べているから腐らないから大丈夫だ。」と、このような冗談を言える食生活をしていて、これから子供や孫たちに、健康寿命をつなげていき、私の年代まで生きるためには、「さあ、果して大丈夫だろう

うか。」と考えています。農業をやっている目から仲間がやっていることを見ていると、疑問が残ります。なぜ、田植えをする時期に、「夏場の穂肥の時期になると、忙しくて穂肥を振れないかもしれないから、今全量を施しておこう。」と、今年のように春先に天気が良く稲の生育が進み、肥料分が全部上がってしまい黄色くなってくると穂肥の時期まではもちません。「穂肥を少し振ろうかな。」すると5割減ではなくなります。自分の都合が悪くなるとJAの言う通りにやっています。そんないい加減なやり方で「安心して召しあがってください。」と、生産者の立場から言えるのでしょうか。それはなぜか。

自分がどのような取り組みをしなければいけないのかわかりませんでした。若いときから色々と考えながらやってきて、戦国の武将さんで例えるならば、色々な旗印や、今で言えば家紋のようなものに出会ったのが、楠木正成の『非理法権天』という言葉です。若いときでは理解することが難しく、自分にそれを調べるような辞書もありませんでした。しばらくして、それが分かったのは、「非は理にしかず、理は法にしかず」法は権、権力にその当時ならば解釈できました。「でも天に勝つことはできない、じゃあ、天とは何なんだ。」と、自分なりに考えてきて一言言うならば、それは誠であると思い、それを誠にするのが人の道だと思いました。人の道に外れるようなことをして農家の人たちが、佐渡のトキをダシにして高く売る、そのような試みになってはいけない、人の道に外れたようなことはせめて農家はやってはいけないという思いで日々仲間と研鑽しています。

今の時代はどこからでも「ピピピッ。」と情報が入ってきます。そのようなことではダメです。自分たちの生態系の中で持続可能であって、土壌や生物を考え、そして共生できる、そのような農業を私たちは『応用生態系循環型微生物共生農法』と言ってきました。4年生になる孫の英語塾の先生が私の家に来て、子供たちのママ友や、孫友であったりする中で、造語をもらったのです。そして『エイムスサイクル』という格好いい言葉だと思いますが、私は説明できません。その中で、生態系をどう利用していくのかこれから取り組んでいかなければいけないと思います。肥料一つ考えても産業廃棄物からできています。私たちのやっていることも産業廃

棄物が入っています。魚を捕ったのを海へ投げればゴミ、拾えば資源、使えば宝物それをどう使うかということ、今ふうに応用して、海水と麹菌とで魚を分解させ、それを肥料にして使っています。それは海の物を利用することになれば、私たちでなければできないのです。

去年の米の国際コンクールで5千件の中で40番の中に入れ、石川県で表彰されました。漁師をやりながらでも挑戦することによって表彰されることが可能になります。

また、すし米コンテストで特別賞をいただきました。私の住んでいるところは、そのような農業のできる環境ではない佐渡島の一番北の端です。ですから、棚田の人たちならばやる気があれば必ずできます。冒険に向かって挑戦する気持ちを捨ててはいけないと思います。1俵で11万4千円なり5千円する米、今の米の価格にしたら10俵とってもほぼ同じですが、10俵とるか1俵でいいか、だからとることではなくて、目指す気持ちを絶やさないでいこうと頑張っています。

**豊田氏** 『やる気・挑戦』という言葉が出てきて、不利な条件にある農地でも、絶やさなければいいのではないか、そこに原点があるのだろうと思います。いつも夢とか、挑戦という言葉が本間さんからよく出てくるのですが、どうしてそのような気持ちが常に湧き起こられるかが、私はいつも不思議だと思っているのですが、どうですかね、本間さん。

**本間氏** それは孫に後ろ姿を見せるということだと思います。「勉強しろ、勉強なんかしなくてもいい、宿題だけやれ、そうしないと明日学校へ行って恥をかくぞ。」でも、「運動会はビリでもいいじゃないか、その次のときにビリから2番目になればいい。」私は、自分に対して自己ベストを常に目指すような心を育てていきたいです。それをやるには、爺さんも口先だけではダメなのです。背中を見せる生き方が大事なことはないかと思います。人様に言えるような話ではないですが、そのような気持ちが子供にも孫に伝われば、必ずその方向に向いていってくれるという期待をしています。

**豊田氏** では、ここから皆様の声も伺いたいと思います。

今お話を聞いて気になった言葉、この言葉を強調したい、この分科会はこの言葉をキーワードとして提案したいという言葉 皆さんから出し

て欲しいと思います。

どなたか、何か気になった言葉、あるいはこういうことを提言に組み込みたい、という思いをもっていらっしゃるいませんか。

まず、佐々木さんから気になった言葉はありませんか。

**佐々木氏** 私は質問を出していましたが、これは棚田に限ったことではなくて、農業の本質だと思いますが、命を作り出して、命を伝えていく、それによって命を支えていくことが農業の本質ではないかと思っています。だから取り組んでいる私たちも自信をもって、あるいは棚田が特に維持するのに非常に厳しい条件であればあるほど、色々な人に支えてもらい、色々な人の共感をもらいながらでないと続けていけないと思います。その時に伝えていくべき『心』の中にあるのは、命を救い出して食べてくれる人や、関わる人の健康を支えているのということをしかり伝えていくことが非常に大事なのではないかと思います。色々な人にそのことが伝わり、色々な関わり方をしてもらおう中で、これからの棚田の維持・保全があるのではないかと思います。

もう1つ、本間さんが言われた、姿勢を持ち続けることが大事だとすごく思っていて、私自身、今4歳と6歳の子供がいますが、田んぼに連れて行き、田んぼの色々なところを見せたり、泥の中に入れたり、田んぼの中にある色々な生き物の話をしたり、田んぼは生きものだということを一生懸命伝えようとしています。それが伝わっているかどうかは別ですが、やはり伝えていく姿勢が非常に大切ではないかと思っています。

**豊田氏** では会場からどなたかいらっしゃいませんか。

**会場** 私は話を聞いて、「初めて棚田のお米が美味しいことを知った、食べている子供たちの姿を初めて見た。」という言葉が印象的でした。命をつないでいくことは、忘れられてしまったらおしまいなのだと思います。

例えば本間さんが言っていたように、後ろ姿を孫に見てもらおうことが、つないでいくことだと思うし、初めて知ってもらうのもいいので、棚田を再発見してもらおう、それが大事かと思いました。

**豊田氏** 他にございますか。

**会場** 大野先生に1つ質問があります。

本間さんとも関係するのですが、私は、佐渡の

ある小学校で、米飯給食をやっています。その時に「この米、家で食べるのより不味いわ。」と言った生徒がいました。その時に栄養士さんはどう考えるか。良い悪いは別ですが、そのような時に大野先生はどのように考えますか。

**大野氏** 私は園長も兼務しているので、いつも子供たちが食べる前に検食するのですが、どうも炊き方が悪いです。せっかく美味しいお米なのに佐渡で食べたお米とは違って、もちもち感が全くないです。どうにかならないのかと、炊く前のお米を精米してから水に漬けておく時間とか、その辺を栄養士たちが色々調べて変えました。途端に、急に佐渡で食べたお米と同じもちもち感が出て、美味しくなりました。今までは、せっかく美味しい食材があるのに、栄養士たちは食べていなかったの、「味はこんなもんか。」と調理の仕方を気にしていなかったのですが、私は食べていたので、味の違いを指導しました。やはり、その食材も活かす調理方法も大切だと思います。

**会場** 全体的な話で私はいつも思うのですが、農業をやっている本間さんもそうですが、農業って毎年変化があってもおもしろいものなのですが、実はそこで生きていくためには、当然ある程度の収入を得ることがベースになってきます。その辺りが常に若い人たちがつまずくところですよ。

年取ベースの話をする、なかなか次に進まないのが現状です。その時に、本間さんのように自分でどれだけ努力をして、自分の作ったものをブランド化する形をとっていかない限り絶対ダメなのです。もっとひどい話をする、テレビなどでも、田舎に住もう、農業をやろうとか、ブームと言ったらいいのかわかりませんが、収入の部分は絶対出てきません。それで佐渡にも結構若い人たちが来ても、実際に何人かと事情があって話していますが、確かにいまいちだと感じます。

そこで中村先生にお聞きしたいのですが、確かに情熱など色々なものはあると思いますが、最終的に残っていくためには絶対に必要なものとは出口の部分、それを作って消費することではないかをしていくかをやらないとダメだと思いますが、その辺についてどう思うかまず1点。

もう1点、お願いがありますが、お話に出た中で人材の育成という言葉がありましたが、人材のザイは材料の「材」から財産の「財」に変えていただけませんか。それはお願いします。

**中村氏** 私たちの里山マイスターがやっているのは、特定の農業技術を教える人材育成ではありません。広く色々なことをやっています。受講生には、農家の跡取り、JAから来ている人、大都会の勤めを辞めて能登にきて、新たに新規就農を目指す若者もいます。その中にすごく儲かって金持ちになった人はいないと言いましたが、色々なやり方で少しずつ成長しています。自分は生産を主にやり、販売ができるようにするためにはマーケティングができる人と組んで、新しく法人を作るとか、たくさん色々な形で仕事を続けながら少しずつ成功させ、発展させています。

少なくとも私たちのところでは若者が少しずつ成功しています。しかし、私たちはある特定の自然農法を教えたり、特定の栽培方法を教えたりはしていません。これは私たち自身が農業の専門家ではないからです。その代わりに、能登で活躍している人、あるいは農業法人の方に里山マイスター支援ネットワークを作って、伝えてもらい、技術をはじめ色々な支援をしていただいています。

それから2つ目は、漢字のことですね。個人的にはあまり「財」の字をあてはめるのは、好みではありません。普通の「人材」を使っても困らないと思いますし、「財」の字を使いたい人は使っていいのではないのでしょうか。

**豊田氏** 農家は経営者でなければならないことについて色々ジレンマを持ちながらされているのが本間さんなのですが、本間さん何か一言お願いします。

**本間氏** 私が普及センターから常々「工場長を卒業して経営者になりなさい、そういうことばかりやっていて、経営者にならないとダメなんですよ。」と言われていました。でも、作れなくては経営者になれないし、自分一人ではない、仲間がいる、仲間たちも同じ足並みになる、そうなるにはどうしたらいいか。自分おこしができて、家族おこしができて、その次に仲間おこしができて、地域おこしにつながるような手順でいくと、ダメです。だから、常に工場長でいて、同じものがある程度のもにならないと、仮に良い成績を国際コンクールで上げて、「まとめて30億欲しいです。」と言われた時は、「バンザイ」です。

**豊田氏** 他にもご質問でも結構ですので、どなたか発言をお願いします。

**会場** 私たちは9名で棚田の維持管理を行っていま

すが、この高齢化の進んでいる中で、佐渡では維持管理はどのようにされているのかお聞きしたいです。

私たちは、オーナー制度を常葉大学や拓殖大学の学生に協力してもらい、色々やっていますが、これに関係したビオトープを整備してくれています。田んぼにはオタマジャクシが何種類いるとかまで大学生が調べてくれますが、中には青色をしたカエルまで見つけてくれて、「これは何というカエルだろう。」と学生やオーナーの皆さんが写真を撮って、「こういうカエルがいたよ。」と見せてくれます。私たちは、この土地にいながらびっくりするような状態でした。

石部に来た方は分かると思いますが、面積的には4.2haですが、300枚も数があります。この間も畦刈り（葦刈り）が9名で6日かかりようやく終わり、今年は特別暑かったので、このような状態ですが、佐渡では維持管理はどのように行っているのかお聞きしたいです。

**会場** 私も同じような質問ですが、実際に作っている生産者の声を聞きたいです。

佐渡でも高齢化が進んでいわゆる限界集落になっているところが大半で、これから消費者として見ても、「あとどれだけ続くだろうか。」と、私はすごく心配しています。

岩首からも来ている生産者がいらっしゃるので、その辺の現状や、これからのことをお聞きしたいです。

**会場** 岩首の後藤と申します。

実際に岩首ではそのような団体的な組織はありません。今おっしゃられたようにほとんど高齢者だけでおよそ8割やっているのが現実です。これからどうするのがか、これから岩首でも課題になると思いますが、まだどうしていいかわからないです。皆さんからの色々な意見を聞いてどのようにしていくかを考えなければいけないです。

例えば、組合を作るのか、オーナー制度をもってくるのか、まだはっきりしていないのが現実です。実際今百姓をやっている人が70代後半から80代以上になってしまうとなかなかできないので、「もう田んぼできないわ。」という人も出てきていますので、これからの問題になると思います。

**豊田氏** 佐渡の北片辺の農事組合法人の方、もしよかったですら何か取り組みがあったら聞かせてください。

**会場** 北片辺集落で農事組合法人をしている村田です。

私たちは9名の組合員で約5町歩の棚田を管理しており、7名の構成員で大体行っています。ただ、病気や色々な事情で「草刈りできないしこれ頼むわ。」という場合がかなりあります。それを5～6人の生産者が協力して1日でやる場合もあれば、2日かけてやる場合もあり、夏の暑い時期は高齢で体に応えるので、組合員でなくても若い人をお願いして、「ちょっと1日これ頼むわ。」というやり方です。一番負担になるのが、やはり草刈りです。岩首でも同じことを言われますが、草刈りをどうするかが、棚田を守っていく人の一番のネックだと思います。

**豊田氏** そうしたら竹田さんから、大学生の色々な学部の学生さんたちが、「もっと棚田の維持管理にこういうポイントが必要なんじゃないか。」という提案を考えていらっしゃるといってお話だったので、例えば、その中でこれは素晴らしいアイデアだとか、実際に現地山古志村へ行かれて最後を学ばれるということだったのですけれども、そういう中で、実践につながるヒントは、今まで生まれてきているのでしょうか。

**竹田氏** 例えば、本来の目的とは違うかもしれませんが、先ほどから出てくる高齢化の問題ですが、結果として農作業のお手伝いに行きつくのですが、今介護体験というのが学生や社会人にも課せられているので、そのことが結果として山間地の棚田があるようなお宅にお邪魔していく、行政や大学生と組織的にドッキングさせることができました。

やはり、例えば大学とか行政で配布する色々な体験イベントのチラシがあるので、その趣旨説明が書いてあるものを回覧していたら、手を挙げる学生が出てきました。とりわけ山間地の高齢者のお手伝いで農作業を体験するケースが増えました。ほんの一瞬だったかもしれませんが、光が見えたことがありました。

**豊田氏** 色々な関心があるので、うまく結び付けてあげる仕組みがあるといいのかもしれません。

**中村氏** 今棚田に住む農家さんや生産組合の方が高齢化していることは、どこでも起っていることで、本当に大事なことです。

例えば、輪島の千枚田は昔は10軒、20軒の農家があったのが、今は1軒に減り、70代後半の方が1軒あるだけです。残りはみんなオーナー

制とかまた別の集落の方に耕作をお願いしています。その方も、もう70歳を越え、10年間頑張ってきたので、「棚田をどうしていくのか。」については、地主の方、土地を持っている農家の方、生産組合の方が一緒にやっていたら一番良いと思いますが、そろそろ難しくなっています。そのときにボランティアの話が出て、大学生が手伝ったりしています。

大学生にボランティアに来てもらっても長続きしないことや、できることが限られています。初めは農家の方も喜んでいますが、ずっとやっているとなかなかうまくいきません。それからオーナー制の話もよく聞きます。

今一番求められているのは、「大事な棚田を何とかやりたい、残したい、発展させたい、棚田を本当にこれからどうするか。」をみんなで議論し、やっていくことではないかと思っています。ボランティアだけでは続けていけないでしょうから、行政もうまくハンドリングしてくれないと困ります。みんなで議論をすることが大事だと思います。

**豊田氏** 大変な作業で、特に農家の方々は目の前の農地をどうするか、荒れてきているのをどのように維持管理していくかが、一番の課題になります。でも私たちは棚田の体験とか、棚田を通して何を伝えていくのかを考えたときに、その作業を継承していくことが果して棚田を保全していくことにつながるのか、いったい私たちは何を伝えようとしているのか、もう一度そこに返らないといけないのかと思います。

「皆さん、草刈り大変ですよ、だけど、それだけではないですよ、棚田ってすごく奥行きのある文化ですよ。」

**会場** 私も山の天辺で細々と棚田をやっていますが、正直きつくて辛いです。高校3年生の孫が継いでくれるかと期待していたら、この間はっきりと言われました。「農業は辛いから嫌だよ。」って。でも私はそれに対して「辛くないんだよ。」とは決して言えませんでした。自分も腰を痛めたり足を痛めたりして、年がら年中痛いと言っているで、そうまでして何でやっているのかと、自分にいつも問いながらやっています。マムシに追いかけられたり、ヤマカカシに食いつかれそうになったりしています。草刈り機全開でエンジンをかけ、法面がひどいので、去年は、草刈り機ごと下の田んぼに落ちて泥だらけになり、

もう少しで死ぬところでした。夫にあとで機械を見てくれと言ったら、夫は「機械は大丈夫だったか。」とそればかりを心配していました。そうまでして、自分がやっている理由は、辛すぎて理由付けをしないとやれません。食べるときは『美味しく・楽しく食べる』という言葉、私はいつも頭の中で考えていました。地域の人が、「あなたの棚田のところのお米をいただいて食べたらもう他のお米は食べられません、どうしてもあなたのところのお米でないと私は食べるのが嫌だから、どうしても分けて欲しい。」と言われると、うちの夫はおだてられてただで配ったりしているので、確定申告はいつもマイナスを計上しています。でも地区の人にそれだけ喜ばれています。「棚田米は美味しい。」皆さんにそう言うだけで、「よし今年も辛いけど頑張ろう。」という気持ちも出てきます。大野先生の食べる時は『美味しく・楽しく食べる』の言葉が今日はすごく印象に残って、明日からまたこの言葉を頭に浮かべながら頑張れます。

**豊田氏** 佐々木さん、生産者でもあるのですよね。

**佐々木氏** 私は棚田志願兵で、就農したときは平場の田んぼばかりでした。佐渡の棚田でどうしてもやりたいと志願して棚田に行きました。最近島内に移住して、佐渡の街中で暮らしていたのですが、もう少し里地や里山みたいのところへ移住して行ったのですが、価値観の基準を少し変

えて眺めてみると、確かに収入は里地、里山では効率は悪くなるので下がっていく方向にあるとは思いますが。ある程度最低限ギリギリで生活していけるぐらいのバランスのところ、その代わり得られる里地里山とか、棚田で暮らすことで得られる豊かさを感じながら暮らせる、今のご時世棚田とか里山が、特に若い人に輝いて見えるものがすごくいっぱいあると思います。そこに1つの可能性があり、どうしてもブランド化や付加価値というだけでは難しいと思います。そもそも厳しい条件に、美味しいお米が作れるのはあるのですが、生産面でみると厳しい条件があるので、おそらくブランド化・付加価値という基準では難しいのではないかと私は思っています。そうしなくて価値観を変えて棚田とか里山の持っているものを眺めてみたときに、若い人にとってむしろそこに可能性があるのではないかと、私は志願してそちらの方へ今向かい、感じております。

**豊田氏** そろそろここで締めようと思っています。パネリストの4名の方、コメンテーターの佐々木さん、何よりも会場の皆様、今日は本当にありがとうございました。

これで第2分科会を終わりにします。





◆テーマ

「棚田には温ぬくもりがある！

～棚田の温ぬくもりを活かせば、たくさんの夢が広がる～」

- 座長：森山 明能 氏 (榑御祓川シニアコーディネーター)  
 コメンテーター：南雲 純子 氏 (元佐渡市観光戦略官)  
 パネリスト：多田 寛子 氏 (春蘭の里、農家民宿春蘭の宿 女将)  
 連河 健仁 氏 (NPO 法人 DREAM ISLAND 副理事長)  
 齋藤 倫子 氏 (岩首集落在住者)  
 千田 倫子 氏 (鼓童文化財団、NPO 法人 佐渡芸能伝承機構 副理事長)

森山氏 こちらのテーマは「棚田には温ぬくもりがある！～棚田の温ぬくもりを活かせば、たくさんの夢が広がる～」ということで進めていきたいと思っています。私からまずどういった分科会にしたいと思っているかについてイントロダクションしていきたいと思っています。

今日の分科会は全部で3つございます。第1分科会のテーマが「棚田には米がある」、第2分科会は「棚田には命がある」ということで、それぞれ、第1分科会は米作りの現場としての棚田について議論されているはずで、第2分科会の方は、お米というよりも生物多様性、そのような話をしているはずで、第3分科会は、棚田のお米ではなく、生物多様性でもなくて、「3つ目の価値」を議論する場だと思っていただければと思います。「3つ目の価値」、例えば、「都

市部と交流をしていますよ。」だとか、「こういうことで観光に使っていますよ。」だったりとかについて、ここではお話をしていければと思っています。

棚田の第3の価値ということをここでは議論するわけですが、それについて皆さんどう思いますか？とだけやると、分かりにくくなってしまいますので、今日は論点を2つに絞って進めます。

1つは「発掘」です。第3の価値自体が何なのかということ、「どうやって発掘したのですか？」という話を聞いていこうと思います。今日のパネリストの皆さんはそういった第3の価値のある場所で活動されているとお伺いしております。

もう1つは「発信」。第3の価値を活かす時には、情報発信が大事ということで、「どうやって



発信をしていますか？」という話です。実は明日、サミットの共同宣言が採択されることになっていまして、共同宣言の中にぜひここで実際に議論をした内容を提案として盛り込みたいと思っております。「発掘」と「発信」のキーポイントをまとめて提言するのが、この第3分科会だと思っていただければと思います。

パネリストのご紹介を簡単にします。まずは多田寛子さんです。

**多田氏** 石川県の奥能登・能登町で民宿「春蘭の宿」を経営しております、多田寛子と申します。主人がやっていますが、私は一従業員でございます。よろしくお願いいたします。

**森山氏** 続きまして、小豆島の方からお越しいただきました連河さんです。

**連河氏** 小豆島から来ました連河健仁と申します。よろしくお願いいたします。

**森山氏** そして地元から2名、実は同じ漢字を書くのですけれども、1名は齋藤倫子さんです。

**齋藤氏** 岩首集落に住んでいる齋藤倫子です。よろしくお願いいたします。

**森山氏** そしてもう1名同じ字を書くのですが、こちらは千田倫子さんです。

**千田氏** 千田倫子と申します。佐渡に移り住んで約25年になります。実家は横浜なのですが、「鼓童」という和太鼓集団がありまして、入りたいと思い25年前に渡ってきました。お世話になった佐渡のために地域振興のお手伝いをする「鼓童文化財団」に所属し、スタッフをしております。どうぞよろしくお願いいたします。

**森山氏** 座長を務めさせていただきます森山明能と申します。株式会社御祓川という能登半島の付け根の方にあります石川県七尾市の民間まちづくり会社でコーディネーターをしております。佐渡は3回目で、非常に楽しみにしてまいりました。皆さんのお話が中心ということですが、私も地元でまちづくりのコーディネートをたくさんしており、里山地域での都市部との交流の仕掛け人をさせていただいております。

最後に今日はコメンテーターの方を1人お呼びしておりますので紹介をいたします。南雲さんです。

**南雲氏** 本日コメンテーターとしてお招きいただきました。3月31日まで佐渡市で観光戦略官という任務についておりました南雲純子と申します。自己紹介につきましてはこのあとのコーナーで

させていただきますので、よろしくお願いいたします。

**森山氏** それでは今日はこのような6人のメンバーで進めていきたいと思っております。まず、少し南雲さんにお話をいただいたあとに、各パネリストから発表をいただいて、先ほど申し上げた発掘と発信、第3の価値をどうやって見つけ出したのか、発掘段階の基本とは何か、第3の価値をどうやって活かしたのか、発信段階のキーポイントは何かということ、ぜひ今日は皆さんに聞いていただこうと思っております。その上で各地での取り組みのヒントにさせていただいて、ぜひ帰ったら、実践を1個していただければと思っております。

それではコメンテーターの南雲さんに、自己紹介を兼ね、これまでの活動と、また今回パネリストの皆様の発表で聞きたいことと参加者の皆さんに注目して聞いて欲しいといったポイントがあればご紹介いただければと思っております。

**南雲氏** 2014年4月1日から2016年3月31日までの2年間、民間から行政に人材登用で一般公募がありまして観光戦略官という立場で佐渡市の観光活性に携わってまいりました。3月に任期を終了していながらなぜ元観光戦略官での登壇かという話もあると思っております、とにかくお米が大好きであえて言うなら最期の晩餐は新米の時期の炊き立てのご飯がいいと公言しておりました。そのようなお米好きのところを買われて今回お招きいただいたのかと思っております。

今回は短い時間でございますが、パネリストの皆様から貴重なご意見をいただいて、今日のお話を皆さまの今後の活動に役立てるように引き出していきたいと思っております。

この分科会は「柵田地域の第3の温もり」ということで、体験や交流をとおして柵田を活用していこうというのがテーマになります。観光という切り口で少しだけお話をさせていただきます。ここ10年ほど観光と呼ばれるものが非常に変わってきました。皆様の地域でも色々感じられていると思いますが、観光施設を巡る箱物観光と言われるものや、露天風呂や温泉を楽しむのがメインの旅から、地域を歩く・その地域の美味しいものを食べる・地域の歴史や文化、人と触れ合うというものに、旅の目的がシフトしてきました。佐渡市はまだまだ団体ツアー旅行が多いですが、佐渡市の中でも、集落に出かけ、地域の人たちとの交流を求める旅行が増えてきました。

今回のテーマ「棚田を通しての交流」ですが、佐渡には現在 120 程の集落で鬼太鼓という伝統神事が続けられています。春と秋、田植えと稲刈りの時季に五穀豊穡や家内安全を願って鬼太鼓が各集落の一軒一軒を回る門付けといわれる伝統芸能です。今日は岩首集落からもパネリストにお越しいただいていますので、実際にどのように行われているのかを聞いてみたいと思っています。今日は、全国各地から素晴らしいパネリストの皆様にお越しいただきましたので、このような点に注目して聞いていただきたいものをお伝えしたいと思います。

最初にお話をいただくのは NPO 法人「DREAM ISLAND」の副理事長の連河様。「島はよすが(縁)」とおっしゃってしまして、小豆島を知ってもらい・楽しんでもらい・好きになってもらう、ということをテーマに活動をされているようです。島を楽しむツアーであったり、その島の味を伝えるカフェなどを運営されていて、すでにこの分科会で目指しているところを再現されていると思うのですが、苦労した点、克服したときの原動力などをお伺いしたいと思います。

次に、春蘭の里の多田様。農村の再生をテーマに地域でやる気のある人たちが集まって「春蘭の里実行委員会」を立ち上げられたと伺いました。平成 9 年の農家民宿 1 号から現在は 47 軒にまで農家民宿が増えたということで、民宿の活性が難しい中、このような集落全体で頑張っている、地域の協力体制の作り方や運営の仕方をお伺いしたいと思います。

岩首集落の齋藤様。岩首は、海沿いの集落から 350m ぐらい山間に位置して、朝日が非常に美しい集落です。9 月には例祭があり鬼太鼓が舞います。そうした棚田で暮らす人々の思い、次の世代・子供たちにかける思いや、「談義所」という場があり、そこに集まるコミュニティがあると思うのですが、談義所での交流についてお話を伺いたいと思います。

最後に鼓童文化財団の千田様。世界で活躍する鼓童、皆さんご存知と思いますが、鼓童は地域づくりにも非常に注力をされてしまして、2014 年から「地域づくり」コースを設け、2 年間の過程を経て卒業された 2 人の女性がいらしたかと思えます。明日からも「鼓童見聞講座」がありまして、鼓童が感じている・持っている・実践している、地域への思いについてもお話を

伺いたいと思っております。

**森山氏** 非常に簡潔に、ぜひ皆さんに聞いていただきたいポイントをまとめていただきました。

それでは早速、活動のご紹介をいただこうと思います。連河さんお願いします。

**連河氏** 小豆島の千枚田、正確には千枚も無いのですが、まん中あたりでカフェをやっています。5 年前に始めて今では年間約 4 万人のお客様が来ます。最初から来たのではなく、年を追ってどんどん増えてきたのですが、その話をちょっとできたらいいと思います。

まず流れを言うと、小豆島には 10 年前に移住しました。きっかけは会社がバブルで弾けたことでした。それまでは東京のライブドアという IT 企業で働いてました。社長が有名なので知ってる人も多いと思いますが、例の事件で砕け散りました。僕は今年 44 歳になるのですが、2 回バブルを経験しました。1 回目が不動産バブル。2 回目が IT バブルです。2 回バブルを経験して何を思ったかということ、お金を目的にした活動は何か欠けていて続かないということです。お金が軸になると人間関係もお金でしかつながっていないから、会社が弾けた途端人間関係も弾ける。もう本当に空しさしか残らないです。そのような経験があって、これから 10 年先、20 年先がどのような時代になるか考えたとき、人口構造の問題がある意味羅針盤になりました。100 年後の人口は半分になり、更に 200 年後は半分になり江戸時代の人口構造に戻ることが分かっています。つまり、人が減る時代に経済が発展するはずがない。それで、方向転換したわけです。

東京から出て島に行くときに、会社の人に「そんな過疎の田舎に行ってどうするんだ。」とか、「何を考えているんだ頭冷やせ。」とか散々言われたのですが、僕は逆に思いまして、むしろ東京が一番危ない。例えば出生率に関しても実際に田舎は増えているけど東京は低いです。環境が整備されているのにも関わらず出生率が低いのです。何で低いかというと、答えは当たり前すぎて話題にもなりません、自然が無いからです。どれだけインフラを整えても、コンクリートだらけの場所では子供を育てていこうというスイッチが入らないのです。最終的には人間も自然の一部だということです。だからもっと自然豊かな場所で、お金を軸にしない生き方をしていた方が豊かだと感じ始めていました。それで、た

また瀬戸内を旅したときに、直感的に感じるものがあって、「ここに住もう！ここで海と関わって生きていこう！」そう思い島に移住しました。現在の本業はシーカヤックガイドです。シーカヤックという小さなカヌーを使って海を伝えるのが仕事です。年の半分は海に出ています。それとは別に棚田のまん中で食堂もやっています。食堂の話は後でお話するとして、ガイドの仕事は自分たちが暮らす地域のおもしろさや心地良さ、豊かさや深さなどをわかりやすく伝えるのが仕事です。

佐渡には今回初めて来ましたが、車で回って感じたことをガイド目線で言うと、まずは水資源が豊かだということでした。至るところに田んぼがあることにビックリしました。地元の人にとっては、水があり田んぼがあることは当たり前かもしれませんが、僕が今住んでいる小豆島や瀬戸内の島々は田んぼが出来る島の方が少ないので当たり前ではないです。雨が降らないから水が無いのです。瀬戸内は日本有数の日照時間を誇りますが、逆に言えば雨が降らない日本有数の干ばつ地帯です。更に水を受け止める大きな山が無いから、川幅が細く干上がってる川も多いです。おまけに火山灰地質なので田んぼに適した土壌ではないです。佐渡や北陸地方に水がたっぷりとあるのは、地勢的に対馬の暖流が水蒸気をつくり、それが山で雨をたくさん降らせて川となるからです。海があって、山があって、川があって、水が豊かにあってはじめて田んぼができるわけです。

加えて、佐渡を回って思ったことは、佐渡は鉄の島だなということです。金銀が有名ですが、ぼくは赤土が多いことが羨ましいです。土が赤いということは鉄分が多いということです。鉄は植物が育つためには必要不可欠な栄養素です。更に鉄が多いと海も豊かになります。海草がよく育つからです。海草が酸素も供給しますが、同時に魚たちの住処となり魚介類を育てますので鉄分が少ない海域には魚がいません。その鉄は広葉樹林帯の森で育まれますが、森が育んだ鉄分を川が海に運び、海草が育ち、魚介類が育つ。という命の循環なのです。そのような観点で眺めてみると、佐渡は全ての条件が整った非常に豊かな恵まれた環境です。水資源に乏しい瀬戸内の人間からすると、羨ましい限りです。

話が反れましたが、起業した背景には色々

な危機感があったからですが、中でも少子高齢化や過疎化の問題は深刻です。佐渡も年間1,000人ぐらい減っているようですが、小豆島はその半分で、年間500人ペースで減っています。人口は佐渡が約6万人に対して小豆島は3万人なので比率はほぼ同じです。10年後には高齢化率が50%を超える予測です。全国有数の高齢化先進地ですが、このままではヤバイと思いました。

棚田に関しても後継者不足が深刻です。担い手の年齢も平均80歳を越えていて、後継者は皆無です。今のままだと棚田の景観は20年もたないだろうと思います。では何で後継者がいないのですかと聞いた時に、「こんなちっちゃい田んぼをやっても飯が食えない。」と言います。つまり、儲かる仕組みにしない限り未来は無いということです。足りないのは、経営とマーケティングの2つです。ここをしっかりとやらないと未来は無い。ビジネスとして、あるいはサービスも絡めた六次産業化していかないと希望は見えてこないということです。そこで、棚田を存続させていくための一助になればと思い食堂をはじめました。

食堂は「おにぎり」をメインにした食堂です。カフェでなく、食堂にした理由は「食」をしっかり伝えられたからです。地域ならではの味や食文化を伝えること。更に、食文化は地域資源や環境を伝えることでもありますが、棚田にしかない資源は何かと思った時、土台にあるのは水があることです。島は水に乏しい場所ですが、棚田がある場所だけ水が湧き出てるのです。その水を利用して棚田が出来るのです。はじめに水があって棚田がある。それまでは人が来ても見ただけで終わっていたのですが、「棚田を眺めながらおにぎりが食べられたらいいだろうな。」と思って食堂を始めたのです。すると、どんどん口コミで広がり、週末には行列ができるぐらいお客様が来るようになりました。ただ、特別なことはやっていません。というか、ど素人からはじめた店なので本当のところは特別な技術も無いのです。ただ、こだわりがあります。全部地元の食材を使った完全手作りのご飯、島でとれた魚、とれたお米や野菜を使った簡単な田舎料理ですが、結果は3年で年間3万人くらいが来るお店になりました。地元食材にこだわったお店が、ありそうで無かったのです。外からは島の人がいいつも食べている普通のご飯が食べたいのです。僕が他所者だから余計に思うのですが、同じ事を考える人が多かつ

たということです。現在はスタッフも地元産です。地元の若者を雇い、彼らががんばっています。最近はお米も自分たちで始めています。自分たちでお米を作ることによって新たなものが見えてきます。

**森山氏** 小豆島の千枚田は石垣を積んでいるのですか。

**連河氏** そうです。石垣です。西日本は東日本と違い土地の面積が狭いので、土ではなく石を積んでいる棚田が多いです。石垣にして田んぼの面積を増やすのです。

私たちのお店は元々は地域の精米所で修繕前はほとんど納屋というか生活ゴミが散乱した納屋でした。まず最初にゴミ処理から始まり、元々あったものを活かしながら、自分たちでガチンコで作りました。テーブルの杉板だけは買ったのですが、お金が無かったのであるものを活用して店をつくりました。お金がなければ知恵を働かせるしかないですが、それがおもしろかったです。

うちのお店の定食はおにぎりと漬物、瀬戸内の魚、野菜を使って1,280円です。最初は1,000円で始めましたが、きちんと計算してみたら食材費が半分以上かかっていました。これはヤバイです。普通、食材費は3割以下にするのが飲食店の鉄則ですが、最初はそんなことも知らなかったです。更に企業ですと、大量に仕入れるのでお米もなんでも安く仕入れるのが普通ですが、こちらは農家に田んぼを続けてもらいたいのでそれまでの価格より高く米を仕入れることにしました。なので食材費がとても高いのです。

**森山氏** おにぎり定食のメニューは皆さんの家で昼飯に食べているものほとんど変わらないですよ。

**連河氏** そうですね。1,280円という値段は高いと思います。でも、安い高いか決めるのは最終的にはお客様です。「価格は経営」と言われますが、安くても満足してもらえなければ評判は落ちるし、儲からなければスタッフの給料も増やせません。やる気が起きなければ笑顔も増えません。当然ながらそのような店は潰れます。総じて飲食店で大切なのは食材の鮮度や美味しさはもちろんですが、提供するものはスーパーに売っているような単なる食材として、あるいはものとしての価格ではなく、サービスも含めた価格だということです。実際、1,000円で始めた時も高いと思ったのですが、お客様はどんどん増える

一方で、行列ができるようになりました。問題は、行列ができ始めると満足度が下がるということです。待っている人がいると食べている人は落ちつきません。誰しもゆっくり食べたいと思っています。加えて、行列ができれば地域にも迷惑がかかります。ですから、価格を上げたのです。それでもお客様は減るところか増えています。

**森山氏** 連河さんからまたこのあともお話をいただきます。南雲さんからコメントをいただきたいと思えます。

**南雲氏** 1,280円のおにぎり定食は非常に驚きましたけれど、お客が来てしょうがないというお話でした。どのように告知をして、お客様を集めているのというところをもう少し補足していただけますか。

**連河氏** 1,280円は地元の感覚からすると高いと思います。でもお客さんはものとしての価格だけを見ているのではなく、わくわく感やイメージを買っているのです。そこで過ごす時間、空間や環境、お店の雰囲気やサービス、居心地、更には経営者の考え方や思想、ライフスタイルまで色々なものを瞬時に感じとっているし、そこまでを含めた価格なのです。それと、表記はしていませんが、「環境税」が入っているのです。田舎の美しい景観は全て「手入れ文化」がもたらす賜ですが、棚田は米をつくるだけではなく、生態系を育み、景観をも育む社会的共通資本です。つまり、お客様は食べることで間接的に地域に貢献することができる。美しい自然や景観を後世に残したいと願う感情は、人間だけが持つ本能的なものですが、そういった目に見えない気持ち良さも得られる。そこが普通の飲食店とは決定的に違うところです。僕らは目的が違うのです。飲食店をやりたくて始めたのではなく、棚田や景観を存続させるための手段としてお店をはじめました。しかも素人が。その挑戦に対して共感する人がお客様となる。だから価格が高いと思う人は来ないし、客層も非常に良いです。お店の雰囲気が良かったり、笑顔が増えると必然的に口コミも増えます。田舎の飲食店にはそうした目に見えない思想や空気感、あるいは仕組みが大切だと思います。

また、農業をどう捉えるかですが、一つのビジネスとして考えると、農家の人はお米をJAに卸している段階で赤字になっていることに気が付いていない人が多いと思います。つまり、卸

値には人件費が入っていない。でも、これでは後継者を育ちません。人がいなければ継続できないのだから、そう考えるとやはり儲けないといけません。

**森山氏** お客様が止らないというのは、情報発信を何かうまくやっているのか、それともなぜか止らないのか、それはどちらですか。

**連河氏** いずれにせよ、HPは相当な影響力があります。何をしても伝えなければ始まらないし、来店するきっかけはWEBが中心です。なのでHPも含めたWEBメディアはほんとに重要です。加えて、伝え方や考え方、それらを伝えるコピーやビジュアル一つ一つも大切だと思っています。なので、僕たちはHPも自分たちで手間暇かけて全て手作りしています。考えの基本として、僕たちは食を提供していますが、食堂はあくまで地域を伝えるための手段であり、伝えているのは「環境」だということです。美味しい水があって、美しい棚田があり、暮らしがある。まずはそこが基本。その上で、ホテルが飛び始めましたとか、カエルの合唱が始まりましたとかを日々伝えていきます。一つのおにぎりができるまでの暮らしや環境を伝える中に美味しさが垣間見えるのだと思います。間違っても「美味しいから食べに来て。」と言ったらダメなのです。実際に食べてみるまで美味しいかどうかはわからないし、味や匂いをWEBでは伝えられません。でも、雰囲気や香りなどは伝えられるし、考え方だったり、日々の作業だったり、食べている人の笑顔だったり、しずる感や雰囲気みたいなものは伝えられる。

また、外から来る人たちが島に何を求めているのかを色々考えた末に辿り付いた答えは、「島は縁（よすが）」がだということです。ここが考え方の基本でありキーワードです。「よすが」は島の語源でもある言葉ですが、他に「えん」や「ふち」、「えにし」ともいいます。いずれも人との「つながり」を意味する言葉です。また、島は英語にすると“Island”ですが、これは大陸的な見方であり、日本人にとっての「島」とはだいぶ意味が違います。英語のIslandは、「孤立したもの」あるいは「孤立した場所」を指す言葉です。対して島国に暮らす日本人にとっての島は感覚が逆で、島は船を着ける「ふち」であり「抛り所」みたいな意味です。もっとも、大都市に住んでいる人からしたら日常的に島に住んでいるイメージは

ないと思いますが、日本は全てが島です。正確には国土の7割が海で囲まれた6,200の島々の集合体、それが日本。西洋の人たちにとっての島は離れ小島のようなイメージかもしれないけど、島の人から見る島は抛り所みたいな所であり縁（よすが）、平たく言えば「癒し処」。つまり、島には癒しを求めて来るのだと思います。自然環境だったり、美味しいものなど、何か元気になるようなものをみんな求めて来る。だから、そのようなものを提供していきたいと思っています。その1つの形がツアーであったりするのですが、そうした日本人としての忘れた感覚を取り戻すために、カヌーで島から島へ自力で海を渡ることもやっています。

**森山氏** 非常に示唆することが多いお話だと思いました。皆さんも1,280円だと高いと思うかもしれませんが、この中には棚田の風景があり、しかも小豆島までわざわざ来ているわけです。その環境も含めての全部、よく言う話で、スターバックスが良い例かと思います。コーヒーは100円でも買えるお店がありますが、スターバックスに行くと400円とか500円とかでコーヒーを飲むわけです。ただ皆さんはコーヒーを飲むというよりも、お店で過ごす時間だったり、雰囲気だったり、そういったことにお金を払われると思うのです。棚田地域でも全く同じことが言えるかと、話をお伺いしていて思いました。

それでは続きまして、能登半島から来ています多田さんに農家民宿のお話をさせていただければと思います。

**多田氏** 去年は12,000人ほどのお客様に来ていただいて、そのうち1,700人が外国の方です。意外なことに利用される方の1割強が外国の方です。言葉が通じなくても、各民宿47軒は身振り手振りのジェスチャーでお伝えして、喜怒哀楽を顔に出し、体に出してコミュニケーションをしています。言葉が通じなくても、向こうも一生懸命伝えようとすることがすごく熱くなり、みんな抱き合って写真を撮ったりしています。

私たち47軒は民宿ではありませんが、自分の家に帰ってきたようなおもてなしをするので、それがお客様の心に伝わって行って喜ばれていると思っています。

歌とお酒は世界各国共通だと思います。外国人の方は最近日本酒好きの方も多く、宴会場には輪島塗りの食器等を並べてお父さんが歌うと外

国の方が大盃の日本酒を飲んで、今度その国の唄を歌うとお父さんが飲むというコミュニケーションをお父さんが覚えて、外国の方にはおもてなしをしております。

お料理は地元のもので私たちのところは山と川でとれた料理を出しており、海の魚は出していません。川もヤマメとゴリを囲炉裏で串焼きにし、串のまま食べていただいております。山菜やきのこは一年中塩蔵しており、食べていただいております。椅子もあるのですが、あえて日本風に座っていただいております。私たちのところは昔ながらの日本家屋で囲炉裏があり、外国の方にすれば、うちに泊まると本当に日本に泊まりに来たという感覚があって、それで好まれているのだろーうと思います。

また、うちのお客様はベジタリアンが多いのです。肉をお出ししませんので、フキノトウをとって、家の前でテントを張り、揚げて食べてもらっていますし、秋はきのこをとって、テントの下で天ぷらをお客様が揚げて食べていただいております。このスタイルはヨーロッパの方に好まれています。

修学旅行は、今年は250人規模の学校が7回来ていますので大変です。また、修学旅行で田植えをしたいということで、一斉に裸足になって植えてもらい、秋とれたお米を学校へ届けています。子どもたちは関東の方が多いです。この修学旅行も今や学校では教育旅行としまして、「子供たちに布団を敷かせてください。輪島塗りのお茶碗など食器は自分で持ってくるようにしてください。何でも手伝わせてください。」ということをお学校の先生が希望するのです。お金をいただいて、お布団を敷いてもらって、お茶碗を持ってきてもらって、すごい楽な仕事だと思われていますが、今お子さんが家で布団を敷いたり、片付けたりということが無いそうです。

親御さんの中には、お爺ちゃん、お婆ちゃんと囲炉裏で会話をしたり出来る修学旅行に行っている学校を選ぶ方もいるらしいのです。私たち田舎の学校の修学旅行は、沖縄や東京へ行ったりしますが、都会の子は私たちの家庭の中で当たり前前ことをさせてくださいということです。喧嘩もしますし凜凜しい子もいればそうでもない色々な子もいるのですが、あまり腹を立てない程度に教えてやるというのが、私たちの修学旅行の仕事です。

**森山氏** 会話の中で輪島塗りの話が出てきたのですが、私の方で補足しておきますと、輪島塗りは高級感のある食器であることはもちろん間違いないですけど、能登では結構家々に冠婚葬祭用に何セットかあったりします。それを出してきては使われているということです。逆に言うと、あるものを使うということをされています。

**多田氏** 私たちの地域の中には、「私はもう使わないから。」と言って、使わない輪島塗りを持ってきてくださる方もおり、300脚ほど集まっています。ですから新たに民宿をする方にはこれをお貸しするという形で、輪島塗りを使ってもらっています。

**森山氏** 地域の輪島塗りがいっぱい集まっている状況が作られているのですね。南雲さんにもコメントをいただこうと思います。

**南雲氏** 今回のテーマである「温もり」人と人との交流の中でやはり一番大切なのは、心を通わせる、伝えるということだと思ふのです。今12,000人のお客様の中の1,700人が外国のお客様ということで、最初は怖いとか分からないと思ったこともあったかと思ふのですが、体とか表情だとか、色々なものを活用しながら伝えようとする、そういったコミュニケーションというのを図っていて、温もり・交流というのを一生懸命実践されているのだろーうと思ひました。

輪島塗りの話がありましたが、地域の宝を自分たちできちんと把握して、活かして、周りの人たちの協力体制というのがどんどん出来てきて300も集まってきているのです。47の民宿があるということなので、200人とか250人とかの結構大きなお客様も集落で受け入れられるようになってきたというお話もあり、皆様でおもてなしをされているのだと感じました。

もう1つ、「体験」というのがキーワードになるかと思いますが、外国の方が山菜をとられていたりして、ただ泊まるだけではなくて、地域の食材に触れて、自分たちで収穫して、調理していただく。田植えをする、教育旅行する、日頃当たり前のようできていない思いをする、皿洗いをする。そういった体験ができるのがすごく大きな価値あるポイントではないかなと思ひました。

**森山氏** 非常に先進的な事例だと改めて我が能登ながら思うわけですが、このような形を波及させているのが重要ですね。最初は1軒からのスタートで、それが少しずつ広がり、10軒にな

り20軒になりと、軒数が増えたことについては、のちほどご紹介いただければと思っております。

それでは次に、齋藤さんお願いします。

**齋藤氏** 住んでいるところに棚田があるということで、どのようなことを思っているかを少し伝えられたらと思っています、よろしくをお願いします。

私は今住んでいる岩首集落より10キロぐらい離れた佐渡市野浦に生まれ育ちました。小さい頃から、山へ連れていかれ、家族で田んぼを作っていました。当時は父・母・祖父母・曾祖父母と姉で、私は双子なので、私は姉で妹の9人家族で育ちました。両親と祖父母も仕事をしながら家族みんなで田んぼを作っていました。私は小さい時から連れて行かれて、田んぼに行けば周りの友だちも同じ環境だったので、そこで遊んだり話したりという楽しい時間を過ごしてきました。1日を通して作業をすることもあったので、お弁当を持って行ったり、おやつを持って行ったりして、畦で家族と食べるおにぎりは美味しかった記憶が今でも残っています。22歳の時に結婚し、今住んでいる岩首に嫁ぎました。すぐに子供を授かり、2007年に第1子の女の子、第2子の男の子が生まれ、しばらくは子育てで忙しく周りを見る余裕もなく過ごしていました。少しずつ子供たちが大きくなると手を離れ、子供と一緒に田んぼ作業を手伝うようになり、一緒に田んぼに行くようになりました。実家の田んぼは基盤整理がしてあり、時代と共に機械を買ったりして徐々に楽にはなってきたのですが、旦那の田んぼは変形田で手作業をすることが多く、実家の田んぼと比べると不便さを感じています。しかし、子供と一緒に田んぼへ行くことは楽しいことで、子供が畦で遊んでいる姿とかを見ると自分が小さかった頃を思い出し、家族と過ごす時間を大切にしていきたいと思うようになりました。

今回この棚田サミットに関わる機会があって、ここで話をさせてもらっているのですが、私は全然棚田活用に対して何もしておりません。全く棚田ということも知らないくらいでした。私が棚田というのが分かったのは、どこかに飾ってあった、黒とピンクでデザインされた棚田のポロシャツが可愛くてそれが着たくて、「棚田に関係ないけど着てもいいの。」と聞いた時に、棚田に関わっている人が、「私のところも棚田だよ。」と言うぐらいに棚田のことを全然分かっていなかったし、

興味もなかったです。

棚田があることで岩首の地域に色々な人が来るようになりました。岩首集落の中心には小学校があります。その小学校は閉校になってしまったのですが、その学校を有効活用しようという会が発足して、棚田をはじめとした里山の耕作保全活動や竹林整備を大学生や都市住民との交流を行いながら、今は「談義所」といった拠点施設として活用しているそうです。その中でも、小さな集落で人との交流が無い中で、都会から来たお兄さん・お姉さんとの交流が、子供にとっては非日常的であり、とてもわくわくして過ごしています。もうすぐ夏休みになるのですが、夏休みになると大学生が大勢来てくれるのです。そうすると親がいなくても談義所に遊びに行き、大学生と1日遊んだり汗だくになって帰ってきたりとかして、楽しい様子をいつも話してくれます。そういう様子を見ると、親としては嬉しいと思いますし、ありがたいと思います。

私自身は談義所活動には関わっていなかったのですが、4年前から横浜市立大学の料理部の人が来るようになって、大概最終日には料理を作って地域の方へおもてなしをしてくれるのです。その中で子供と一緒に何かすることがあって、私も大学生生活をしていなかったのに、その大学生との交流がすごく楽しくて、いつもならできない経験をその場でさせてもらい、楽しい時間を過ごさせてもらいました。私も自分で楽しいと思える場があることはすごく良いことだと思います。楽しいところには人が集まって来るし、楽しい集落であればいずれ自分の子供たちが岩首や佐渡を離れたときに、また戻って来てくれるかという思いがあります。岩首に来る大学生の人たちがどのようなつながりで岩首に来てるか私は分からないのですが、人と人をつないでくれるところには、棚田があったり、談義所があったり、里山の環境があるのだという思いがあります。私は自分の子供には、自分の生まれ育ったところを好きでいて欲しいと思っています。それがこのような大学生との交流からでも良いかと思っています。そこから始まればと思っています。

私がこのサミットに参加しようと思ったのも、子供たちに自分の住んでいる集落を好きでいて欲しいと思ったからです。私は今住んでいる岩首の田んぼも手伝いますし、実家の田んぼも手伝いに行っています。当時は9人いた家族ですが、



曾祖父母も亡くなり祖父も亡くなり、今は4人しか家族はいないですけど、9人でやっていた作業を4人でやるのはとても大変なことなので、私も手伝いに行きます。新潟に嫁いだ妹も時期になると帰ってきます。それも生まれ育ったところが好きですし、楽しかった思い出があるので行っているのですけれど、自分の子供たちも今の私たちの歳になったときにそう思ってもらえるように、自分もこれから子供と関わっていきたいと思っています。

明日は現地視察があるのですが、私の子供と学校の子供たちも岩首のスタッフとして一緒にお手伝いさせてもらえるということで、大勢の方が岩首に行く姿を自分の子供たちが見て、どう思ってもらえるかが今すごく楽しみです。子供たちが岩首と佐渡を好きで戻って来れるような地域づくりをしていきたいと思います。

**森山氏** 「楽しさ」を次の世代に伝承する背景には棚田があるのではないかとおっしゃっていただきました。南雲さん、一言お願いします。

**南雲氏** 交流ができたことで、最初はあまり興味がなかった棚田に対して、非常に自分にとって大切なものなのだという価値を知ったとのお話を伺うことで、交流の温かさを教えていただきました。今のお話の中で「つなぐ」というものと「つなげていく」ことがすごく自分の中で腹に落ちました。人と人とを棚田がつなぐことと、今を生きる皆様や先人たちが築き上げてきたものと、今の自分から次の世代の子供たちに棚田の思いをつないでいくことが非常に感じられました。

**森山氏** 最後のパネリストで、伝統文化の話が少し入ってくるのかと思います。千田さんお願いします。

**千田氏** 私は実家が横浜ですけれども、鼓童のコンサートを観て演奏者になりたくて入ってきました。今でも、鼓童の舞台に立ちたくて全国各地から、人が集まっています。

**森山氏** すみません、今日は皆さん全国からいらしゃって、鼓童はとても有名だと思うのですが、知らない方もいらしゃると思うので少し鼓童の説明もしてください。

**千田氏** 「鼓童」の前身「鬼太鼓座（おんでこざ）」が佐渡に生まれたのは45年前です。そのきっかけは、当時学生運動がもう終わるか終わりかけという時期だったそうなのですが、その時に、それまで学生運動のリーダー格をしていた人たちの中に

田耕（でん たがやす）さんという方がいました。その方が今の自分たち若者がどこを目指すべきかということで、運動から離れて全国各地を旅したそうです。奄美大島から東北まで行かれたと聞いているのですけれども、その訪れた中に佐渡もあり、そこで民俗学者の宮本常一先生とお話をする機会があった田さんは、全国を歩いた中で、日本の縮図と言われる離島である佐渡を面白いと思って、全国に呼び掛けて20代の若者を集めようとしたそうです。それは元々職人大学を作ろうという話だったらしいのですが、色々なものづくり（手仕事）のためにもその資金稼ぎのために太鼓をやって、ちんどん屋で太鼓を叩いてお金を稼いで大学を創ろうとしたそうです。その音楽の公演の方は、資金集めができて職人大学が創れたら、そこで解散するというので始まったそうです。どうして和太鼓を始めたかという、それは全国の郷土芸能を見歩いて、その素晴らしさに田耕さんはのめり込んだそうです。ただどこでも若者が土地を離れて過疎になってしまって、祭りの芸能が衰退している、郷土芸能は先祖返りをしなければいけないということ、45年前の段階で思ったそうです。そこから職人大学も創ってものづくりをし、太鼓も打ち、「その地域づくりのための祭りもやろう。」と意欲のある人たちを佐渡だけに呼びたいということだったそうです。

それに宮本常一先生も賛同してくださり、先日亡くなった永六輔さんの深夜番組で全国の若者に呼び掛けて、全国から10数人集まったのが「鬼太鼓座」のはじまりなのです。鬼太鼓座自体はその後10年で分裂してしまって、「鼓童」と名前を変えて佐渡に私たちの先輩が残りました。鼓童を発足して今年で35年になります。鬼太鼓座時代は10年間やりました。そのうち和太鼓は当時そんなにやっているグループも無かったものですから、その当時の都会から来た若者たちが、全く新鮮な思いで佐渡の暮らしとかの中で郷土芸能を学ぶわけです。その素晴らしさに目覚めていって、音楽、芸能をやる方が面白くなって、軌道に乗り、職人大学の方はいつの間にか立ち消えになり、和太鼓の公演活動だけが残っていったという歴史を聞いております。

鼓童というグループは国内でも海外でも公演をやっていますが、私は東京でそれを観まして、エネルギーをすごく感じました。そのときの鼓童は

表現、各地の郷土芸能を元にした舞台用にアレンジしてもらった曲をベースにやっていたのですが、そこにもものすごく生きるエネルギーを感じ、この人たちは「何者なんだろうか。」と、佐渡を拠点としていること、毎回わざわざ海を渡って公演活動をしているところにすごく興味をもちまして、「私もあの舞台に立ちたい、この人たちの考えていることを知りたい。」と思って佐渡に渡ってきました。

研修所というのをにおいて、舞台には6年ぐらい立ち、その6年間のうちに岩手をはじめ、各地の郷土芸能に出会うことができました。しかし、そのうち自分が舞台に上がるために習いに行っているということがすごく苦しくなりました。他所の土地に3日～4日、「この芸能を教えてください。」と言って習い、それをアレンジして舞台に上がって、お客様からお金をいただくことが、その土地の方とお付き合いを深めれば深めるほど、苦しいことになってしまいました。それで私は佐渡の方に受け入れてもらい、「うちの祭りの稽古に参加しないか。」などと言ってもらえる機会も増えてきました。そのような機会が増えてくるにつれて、自分たちは鼓童の舞台を観ていたうちは、芸は単なるパフォーマンスとしか受け取れなかったのですが、佐渡に暮らすようになってから、地元の郷土芸能をしている方とお付き合いし、その背景にあるもの、この芸能はその先人が生きるために土地の生活に必要なこと、その編み出されてきたものの背景が分かってきて、そちらの方にもものすごく興味をもち始めました。舞台活動をやっていると、佐渡の祭りのサイクルの中にどっぷり浸かって芸能を習うことができないので6年で舞台をやめました。佐渡の人と一緒に、お祭りの稽古期間からお祭り当日までどっぷり過ごさせてもらうことになったのが20年ぐらい前です。佐渡の祭りが私にとって大切なものになりました。私が舞台を降りても20年以上経ってもずっと佐渡にいるというのは、佐渡にはこの生活に根ざした素晴らしい集落の祭りがあったからです。

佐渡の中に120の鬼太鼓（おんでこ）という団体があります。それぞれ隣の集落で少しずつ違うのですが、プラスその他の形態のものも合すると170ぐらいあると思うのですが、だいたい他所の土地でいう保存会というスタイ

ルが無いのです。年に1度、4月の祭りでしたら、その前の2週間だけその祭りの芸能のための稽古をする。祭りが終わったら来年の3月まで、もう芸能には関わらない生活の中にある芸能なのです。その魅力にはまり芸能を習っていくうちに、この方たちの芸能の元は、岩首の田んぼであり、その循環というのでしょうか、先人から伝わってきたものが大事にされて祭りがあって、集落を維持するために協力し合っています。私は年に一度の祭りのことを、「喜びの爆弾が爆発する。」としか言いようがないのですが、佐渡の祭りを大事に思って今まで過ごしてきております。

鼓童の取り組みとしては、鼓童の人間は佐渡の方とお付き合いする中で知った祭りの素晴らしさを、佐渡の方とお付き合いするうちに、本当に若い世代にも伝えていきたいことで、今、鼓童の舞台に上がるのはメンバー養成を2年間の研修所で行うことをしています。齋藤さんが住んでいらっしゃる岩首の隣の隣の柿野浦という集落で、廃校になった学校をお借りして研修生が2年間の修行をしております。その場で鼓童の舞台に立つ者は、そのような日本人の今まで先人の営みを理解し、体験的ではあるのですが、田んぼもほぼ手作業でやってみることをして、稽古がメインなのでそこまで農作業の時間を取れないのですが、苦労を一通り2年間味わってみて、自分の手を掛けたお米がどれだけ美味しいのか、土地の水がこれだけきれいだから美味しいのだということや、そのような実感をもって打った人の太鼓の音の豊かさを信じて、鼓童の舞台人養成に伝えていくことで、向かっています。このような山間地に研修所を開設して、2年間2年制の研修所になってから20年近くなります。修行をしてそこから経て舞台に立つ者もいますし、残念ながら舞台の試験に落ちて地元に戻る者もいるのですけれども、それを経験した人たちは地元に戻ってもタフで活躍できる、地元の良さを見つめ直す視点を持つことができるような、人材を育成して送り出せているのではないかと考えております。

**森山氏** 昨晚千田さんから送られてきたYouTubeの動画サイトで拝見したのですが、研修所の様子がすごいですね。

今日いらっしゃる皆さんのそれぞれの地域にはそのような芸能があると思うのですが、背景にある自然、棚田であったり、里山だった

り、信仰だったりを含めて教育をしていく場所になっており、すばらしい取り組みだと思っています。南雲さんにコメントをいただこうと思います。

**南雲氏** 鼓童の公演は、1年間のうち約3分の1を海外で公演をしていらして海外の方には佐渡イコール鼓童というぐらい、とても名前の知られている太鼓芸能集団です。何で鼓童がこんなに本物か、心に響くのだろうかと思うのですが、いつも拝見する度、命を削って太鼓を叩いているのではないかと思う位の迫力で、観ると涙が溢れてしまうのです。これはいったい何故なのだろうと思っていたのですが、千田さんがおっしゃたように、最初はちょっとその文化に触れただけで、なぜかパフォーマンスで気持ちが悪かった。そこで自分たちがしっかり地域に入ることで、背景を本当に自分たちが学んで、演じ得たからなのだと感じたのです。佐渡における背景、先ほどから太鼓も120の集落で鬼太鼓があると申し上げましたが、ただ単に鬼太鼓がイベントのように舞っているわけではなくて、田植えと稲刈りの時期に行うということ、大切な命を育てていただいている田んぼに非常に深い関わりがあるのです。そのような背景・ストーリーが重要なのだと今回改めて感じました。

**森山氏** 改めて、発掘段階のキーポイントは何だろうということ、皆さんのお話にあったのですが、皆さん気付きましたか。4名とも実は何か新しいものを創作するよりは、どちらかというその土地に元々あるものです。芸能もそうですし、農家民宿の輪島塗りもあるものが使われているとか、あるものを活用するのですが、多分皆さんの地域にもあると思います。それが発掘されるかされないかの、「この違いつて何なんだろう。」というのが、結構皆さん気になるポイントかと思っています。

まず連河さんにお伺いしたいのですが、最初にここの棚田を見て、「ここだ、ここに体験をもってこよう、見るだけでなくおにぎりを作ってやってみよう。」となったのではないですが、ご自身は外から入った者として、この発掘をするときに、何かこれだと思った瞬間があったのか、または誰か刺激になる人がいたのか、そういったところで発掘のときに実はこのようなことがありました、ということがあればぜひお願いします。

**連河氏** 一番は、「そこにしかないものって何だろ

う。」ということです。外から来る人たちって、やはり食べ物は特にそうですが、土地ならではのものが食べたいし、旬なものが食べたい。昨日佐渡を回って、たまたまイカ釣りの基地が北の方にあり行ったら、「今年はイカがとれないんですよ。」と言いながらイカを焼いてもらって、すごく美味しく、大満足でした。やはりそこにしか無いものがキーワードです。

僕が島に来たときに色々教えてもらったことは、「観光という言葉の意味を知ってる？」と言われました。知っていらっしゃいますか？ 観光と一般的によく言いますが、「国の光を観る」という意味です。国というのは国家ではなくて、地域のことです。地域にある暮らし、知恵、伝統とか、そこにしか無いようなもの、その国・地域にしか無いものの「光」（良いところ）を伝えていくことが「観光」になっていくのです。観光地を作ることではなくて、暮らしを伝えていくことが一番大事なことで、観光地を作っても暮らしと通常は切り離されているのです。観光客がそこに来て観光地を見て帰っても、1回は来ても2回は来ない。それをつないでいくのは何かというと、人でしかない。先ほど多田さんの話にもあったのですが、外国人が来るから英語で伝えなくてははいけない。これは多分失敗します。僕らのところにもたまに外国人が来ますが、最低限の簡単な英語だけで、ほとんどは日本語で伝えます。その方がおもしろいからです。何を伝えようとしているのか、相手を思い一生懸命伝えること、そして伝わるのが楽しい。総じてどれだけ感動してもらえるか、喜んでもらえるかが肝心です。観光系の人たちと話していて感じるのは、統計データだけ観て話している人が多い。それは結果論であって、中身が大切です。どうやって楽しんでもらうかは、どのようなおもてなしをして喜んでもらうか。結果的にはそこに数字が付いてくるだけです。

**森山氏** 「観光」という言葉の意味は興味深いですね。ここでいう「光」は政治のやり方が良いとか、農業経営システムが良いとかということまで含みます。まさに暮らしを伝えることが観光だということです。そこに人が介在しないと、人でしか伝えられないものがあることが大切です。

多田さんは春蘭の里でたくさんの人をこれまで受け入れられていると思います。先ほど47軒あるということでしたが、1軒だけでは暮らしを

たくさんの人に伝えられなかったと思うのです。47軒に広げていく過程でご苦勞もあったと思いますし、ある意味棚田や里山での暮らしというものを発掘していくときに、先ほどの議論からすると、発掘より先にもものはもうあるわけですから、それを使える人を用意することの方が大変だったのかと想像します。どのように広げていったのか、そこでも苦勞がおりだったと思いますので、話せる範囲でお願いします。

**多田氏** まず「農家民宿をやきましょう。」と言っても、ご主人は気が乗るんですけど奥様が「私の料理なんて食べる人はいないし、家も片付けなくちゃいけないし…」とか言って奥さんが引くのです。でも決定したあと、試しに1回やるとおもしろいのです。ある地域にも「民宿をやりませんか。」と言って話してきたら、「私は民宿をやらなくても食べていけるから。」と言ったところもあるんですけど、民宿をやっているのが楽しいのです。生徒さんとのやりとりも楽しい。意外と言葉が通じなくても何か楽しいのです。そこに利益を求めるのではなくて、文字通り私たちは地域おこしをしているので、そこに住む人々がお客様を迎えて楽しければ、お客様も楽しいのです。そのようなことで「一步踏み出してください。」ということを常々言っています。

あとは鬼太鼓の話も出ましたが、能登はキリコが有名です。御神輿の前を照らす行灯です。それを田植え体験の他にキリコを担ぐ体験というのがありまして、大工さんが小さい、中学生が担ぐぐらいのキリコを10基ほど作りまして、Aの小学校と書いて、次の時にはBの小学校と名前を替えて、それを担ぐのです。笛や太鼓は地元のお爺ちゃんがやって、今の発掘です。それで東京の子供たちが、能登のキリコを担ぐので、とにかく喜ぶのです。そのようなお祭りに参加させると地域のお爺ちゃんが頑張れる。それからもし雨が降ったら、雨が降った時の対応で体験をさせる。爺ちゃんや婆ちゃんの知恵袋で、屋根のあるところで草鞋作りなどをすることもやります。民宿をできない人には違う労働を提供してもらったりして、とにかく楽しもうということでやっております。

**森山氏** 楽しいからこそ巻き込めるし、楽しいからこそ巻き込まれたくなる、参加したくなると思うのかと思います。これはもしかすると齋藤さんファミリーが今談義所に行くようになったの

と同じで、楽しさが大事なのですね。

**齋藤氏** そうです。子供が楽しそうなのを見て、じゃあ私も行ってみようかということになります。

**森山氏** 「楽しさ」がもしかすると発掘のキーワードになってくるのかと感じました。そこで楽しさは人でしか伝わらないという連河さんの話もありましたが、楽しさを伝えてくれる人をどのように地域の中で説得していくかということには、掛け合わせ、相互補完性と言いますか、そのようなことがあるのかと思いました。楽しいから人が参加するし、人が参加するから楽しいというような、好循環が地域に生まれているのではないかと考えています。

もう一つの発信の段階ということで、連河さんのHPが結構重要であるという話をされていましたが、いかがでしょうか。

**連河氏** 入口としてHPは重要です。ただし、イメージを先行しすぎると、現地へ行ってがっかりするケースもあります。だからそこそこでいいのです。キレイに作り過ぎるとマイナスになることもあるし、いかにも業者がつくりました的なものは最悪です。業者任せはダメです。都会の人が田舎に求めているものは、ふる里とか癒しとか素朴とかの温かさです。だから、下手でもできるだけ手作り感が出ていた方がいいし、味があるかどうか重要です。キレイなWEBサイトよりも、ワクワクするようなものや、田舎の人の人間性が透けて見えるようなものなど、リアリティーがあるかがとても大切な要素です。

また、お客様は最初から来たわけではなく、徐々に増えていきましたが、大切なことは、まずは一人のお客様を大切にすることです。一個人に対して自分たちにできる最大限のおもてなしをして喜んでもらう。そしてそれを繰り返すと、お客様はいつの間にか増えていくのです。加えて、夢やビジョンを伝えていきました。僕たちの事業は島をどうにかしたいという切実なところから始まっているので、一生懸命思いをHPに書きました。そうするとまず誰が動くかということ、メディアが動くのです。メディアはおもしろいネタを探しているのです。なぜこのようなことを始めたのか。ビジョンやストーリーを描くと、メディアがおもしろがって取材に来るのです。ちなみにうちは観光系の雑誌にはほとんど掲載されていますが、実はお金を出して広告を掲載したことは一度もありません。全部勝手に来て、勝手に

紹介してくれるのです。広告ではなく全て取材記事なのです。それを見てお客様が来てくれる。感動した数ほど口コミは広がっていきます。

それと、今はスマホの時代ですが、これはかなり重要です。お客様は来て何をするかというと、まずスマホで写真を撮ります。それで、撮った写真は Facebook や Instagram にタグ付けして投稿します。着いたらまず撮って「来たよー。」という写真を出したいのです。次に「今日のランチ」これもほとんどの人が写真に撮ります。つまり、HP や WEB 媒体はある意味旅のきっかけでもあり、追体験でもある。だから、撮りたくなるようなメニューや景観・風景とか、写真を撮りたくなるようなシーンを意識しています。うちは月に300件くらいの投稿があるのですが、Instagram なんかは勝手に増殖しています。

**森山氏** 今の時代に SNS（ソーシャルネットワークサービス）という言葉がありますけども、有名なのは Twitter や Facebook、Instagram などがありますが、スマホやパソコンでできる情報発信の仕方です。自分がそれをするとツイートとかするのですが、一気に多くの人に拡散する方法があるのです。それで自分が発信したら自然といつの間にか広がってくるのが起こり得る時代になっているかと思えますし、これまではマスメディアがその役を担ってくれたのかと思えます。その他の方法論が出てきているのかと非常に感じているところであります。

ちなみに、千田さんの鼓童の活動も逆に世界に大発信をされているわけですが、研修所の方の背景だったり佐渡のことというのは、先ほどの南雲さんのお話にもありましたが、鼓童と言えば佐渡、佐渡と言えば鼓童という状況になっていることもあると思うのですが、何か情報発信の時に、地域の事だったりを発信されているのですか。

**千田氏** 公演にまつわる情報も発信するのですが、その中で鼓童が大事にしていることは先ほど申したようなことです。例えば、以前鼓童が三宅島の太鼓の曲をアレンジしたものをずっと昔から海外でも公演していたのですが、アメリカの太鼓グループの中で、それがパフォーマンスとしておもしろいというおもしろ味だけでアメリカの中、オリジナルとはかけ離れた雰囲気でものすごく広まってしまったのです。それは何ら背景も無いパフォーマンスだったので、これはまずいと、今までこの太鼓が生まれてきたところをよく理

解してもらいたいので、全米から太鼓打ちのプロや愛好家が集まる会議の時に、その三宅島の方をお連れして、色々なお話をさせていただいたり、ワークショップをしたりとかで、日本人が生活の中で生み出してきたものを理解してもらいたいということを、特に気に掛けてやっております。その発信を鼓童メンバーの誰もがしようとしています。

またそのように通ってきて、今日このあとの全体交流会に、佐渡の春日鬼組の芸能がありますが、そこにアメリカの太鼓打ちの人たちが10年通い詰めて、この春にとうとうアメリカでの活動を許されることになりました。佐渡の鬼太鼓という芸能がアメリカで、その地域の単なるパフォーマンスとしてだけでなく、きちんと地域コミュニティを作り上げるものとして理解され、継承するという形で伝わったということでもあります。

**森山氏** 世界的に発信をするときには色々な工夫が非常に必要で、その時にはきちんと背景が必要で、理解をしていくのはベースなり、強みになるのかと話を伺っていて思いました。

最後に齋藤さんをお願いしたいと思います。先ほど子供たちへの思いを少し語っていただいたのですが、今日こうやって多くの方の前で、「楽しい」というキーワードを出してくださいましたが、どのような楽しさを感じてもらっていったらいいのかということや、子供たちは、まだ10年ぐらいは岩首に住んでいると思いますので、これから10年、どのような経験をしてもらいたいか一言もらえたらと思います。

**齋藤氏** 楽しい集落にするには親たちは頑張らなくてはいけなし、周りのお爺ちゃん、お婆ちゃんも子供と一緒に楽しんでほしいと思います。岩首にも鬼太鼓があるけど、それをみんなでやっていく、つないでいくというのに関わると子供たちも楽しいのかと思います。親がいなくても、それでも地域の人と一緒に教えてくれる、そのところが楽しい。終わればみんなで話ながらジュースを飲んでというのが多分子供たちも楽しいと思います。田んぼの作業も、おっちゃん・お婆ちゃんたちと一緒にしゃべりながらやって終わるのが子供たちは楽しいのかと思える。人とのつながりをできるだけさせてあげて、「このようところが楽しいんだよ。」と思えるようにしていきたいと思います。

**森山氏** 今のお話にあった通り、「楽しさ」には必

ず人が必要だし、そこには地域のお爺ちゃん・お婆ちゃんがいて、最近は棚田があることで人が外からもやってくる、外からやってきた人たちが仲介役になってくれることで、その良さがさらに伝わってくるという話だと感じました。

あえて議論を少しふんわりしたままにしようと思います。本日議論した内容を自分たちの地域もここは真似できるなというところがたくさんあると思います。最後にコメントーターの南雲さんにコメントをいただきたいと思います。

**南雲氏** 先日、本屋さんに行きまして『死ぬまでに行きたい！世界の絶景』という素晴らしい本を手に取りました。その中に棚田が何と3カ所も紹介されていました。残念ながら佐渡は入っていませんでしたが、山古志と大山千枚田と浜野浦の3箇所が素晴らしい写真と一緒に掲載されていました。そもそも棚田はものすごい資源なのです。自分たちがいつも生活しているので、これがすごい資源だとなかなか気が付かないのですけれども、そのぐらい思いの強い人たちがたくさん興味をもって見ている素晴らしい資源です。その資源に地域の人たちの誇りをもつとその資源は、地域資源に変わります。棚田が好きで好きでしょうがない、人との交流で棚田が好きになった齋藤さんもそうです。とにかく地域の人が誇りをもって棚田を愛している人がいることが重要です。ただ地域資源のままではなかなかお金を生みません。お金が主軸ではないのですが、お金が無いと生きていけませんし、次の世代につなげていけないのです。そこでお金が回る、経済を循環していくということには、「観光」というのをぜひ活用していただきたいと思っています。資源に地域の人たちの誇りが入ると地域資源になります。その地域資源に観光を活用してお金を回していただくと、それは観光資源になります。今回連河さんのおにぎり定食が1,280円だったりとか、多田さんの民宿が47軒も活動をされていることも、最初に地域にお金が入るといことが地域を守っていくためにも非常に重要なことだと思いますので、このような今日のことを少しでも参考にしながら、明日からちょっ

と変えていただけたらありがたいと思います。

今回佐渡市から参加させていただいておりますので、佐渡が全国棚田サミットで皆様をお迎えるのにあたり、棚田地域だけではなくて各地域が一生懸命色々なことを考えました。小川という地域では通常7月の下旬から8月上旬に満開を迎えるヒマワリを1か月早めに種を蒔きまして、今がちょうど見頃です。明日15日の交流プログラムで尖閣湾の方に行かれる方、もしくは明後日の姫津のイカイカ祭りに参加される方は途中通りますので、ぜひヒマワリを見てください。また、両津という地域では「佐渡バル」というチケットを3枚1組2,200円で販売していきまして、飲食店では「ワンフードとワンドリンク」を、旅館では「温泉とワンドリンク」という形で皆様をおもてなしさせていただきたいと頑張っておりますので、ぜひ佐渡を楽しんでいってください。

**森山氏** 素晴らしいコメントを最後にいただきまして、今日のテーマとバッチリ合いました。皆さんの地域は間違いなく資源があると思います。資源が発掘できると地域資源になる、その発掘できた資源を発信できていくとそれが観光資源に変わっていく、この段階が必ずあるのですね。この段階の中で自分たちの今の状況はどこのだろうと、ぜひ帰ったら考えてみてください。そして、まずやらないといけないことがきっと見つかるのではないかと思います。帰って実践！これができる第3分科会であつたら嬉しいと思います。これをもって第3分科会は終了します。



# 棚田のまもりびとミーティング

座長：中島 峰広氏（NPO 法人棚田ネットワーク代表）

## ・A グループ

くぬぎだいら  
榎 平 棚田保全活動推進委員会、中沢棚田保全会、佐渡棚田協議会、  
NPO 法人 十日町市地域おこし実行委員会、くらかけ  
鞍掛山麓千枚田保存会、  
おにき  
鬼木棚田協議会

## ・B グループ

NPO 法人 大山千枚田保存会、小倉千枚田管理組合、おぼすて  
嫉捨棚田名月会、  
NPO 法人 恵那市坂折棚田保存会、さかおり  
つづら棚田を守る会

## ・C グループ

鴨川市川代集落、しろよね  
輪島白米千枚田愛耕会、NPO 法人 せんがまち棚田倶楽部、  
NPO 法人 明日香の未来を創る会、いおり  
伊折集落営農組合、いなぐら  
稲倉棚田保全委員会



**中島氏** 今年は 17 団体にご参加をいただき、3 つのグループ A、B、C と分けました。A はオーナー制度を行っていないところでどちらかというところ米の販売を中心とした活動を行っているところです。B、C は棚田オーナー制度を長く行ってきたところで、地理的なバランスなどを考えて分けました。

まずは、A グループは十日町の山本さん、B グループは恵那市の田口さん、C グループは明日香の濱田さんに、取り組み紹介をしていただきます。その後、3 つのグループに分かれて意見交

換をしていきます。

A グループでは、お米の売り方などについて話していただきましょう。B、C は長年にわたってオーナー制を行っているところですので、マンネリ化など長く続いたことで出てくる課題を中心に話していただきます。その後、グループで話されたことを共有したいと思います。

では、十日町市地域おこし実行委員会代表の山本さんです。

# 棚田のまもりびとミーティング

## 事例紹介 A：NPO 法人 十日町市地域おこし実行委員会（新潟県十日町市）

**山本氏** 十日町市地域おこし実行委員会の山本です。十日町市地域おこし実行委員会は新潟県十日町市の池谷・入山集落というところにあります。平成 16 年に中越大震災という大きな地震がありました。これをきっかけに、東京に本部がある JEN という国際 NGO から市に入ってくださいました。東京でボランティアを募集してもらって、年間を通じて定期的にボランティアを派遣していただくという仕組みが作られました。これをきっかけに都市交流が進みました。

もともと高齢者が多い集落でしたので、震災をきっかけに四百数十年も続いた集落がいよいよ終わりかという状況だったのです。昭和 30 年には 37 軒、211 人の記録がありました。一時、6 軒 13 人にまで減りましたが、現在では 10 軒の 23 人にまで回復している状況です。震災をきっかけにボランティアとの都市交流が進んだためです。

魚沼産コシヒカリのはぎ掛け米を「山清水米」というブランドで販売しています。1 kg 650 円で、思うように販売は増えないですが、年間 10 トンくらい出ています。直接お米屋さんとの取引もあり、JA さんに出すよりもはるかに高い値段で取引しています。

もともと主役の高齢者は現在では 80 歳前後になっています。移住者を受け入れないと集落は存続できないとはっきりしていました。

そこで、分校を市役所から借りて、改修し、ボランティアの拠点としました。地元の行政からのお金はほとんどもらわず、色々な仕組みを駆使して改修しました。

移住してきた若者は、平成 22 年に地域おこし協力隊として家族 3 人で移住してきた方が第 1 号でした。翌年に 23 歳、24 歳の若い独身の女性が移住してきました。ボランティアで通っていた方です。昨年、新規就農者研修住宅を 1,600 万円かけて自前で建てました。これを作ったことで、29 歳の若い男性が 1 人、移住してきました。職員とし

での採用です。

また、去年 1 年間、インターンで来ていた若い男性が地域おこし協力隊に任用されて、池谷集落に住んでいます。今年、新たにインターン生が愛知県から来ました。整体をやっていた方ですが、彼は来て 1 か月もしないうちに「インターン後もここに住みたい、田んぼをやりながら、整体の仕事もしてここに住みたい。」と言ってくれました。最初に入ってきた家族に、その後第 2 子、第 3 子が生まれ、5 人家族となっています。その他に集落に田舎暮らしをしたいと入ってきた若い女性が結婚し、子供さんがいます。小さい集落に 23 人中、子供が 5 人もいますので、子供の割合が全国平均よりずっと高いです。80 歳を過ぎたお年寄りたちが、体を壊し、私たちも農作業を頼まれる状態です。ギリギリの状態までできていましたが、おかげさまで若い人材が揃ってきました。お年寄りもかなり安心している状況です。

**中島氏** まさに奇跡の集落ですね。

**山本氏** ある大学の先生がそういう名前をつけてそのように呼び始めました。

**中島氏** 米の売り方が特徴的ですから、参考になると思います。

次は、恵那市坂折棚田保存会の代表の田口さんです。





## 事例紹介 B：NPO 法人 恵那市坂折棚田保存会（岐阜県恵那市）

**田口氏** 恵那市坂折棚田保存会の田口です。第9回の棚田サミットは恵那市で開かれました。私は平成16年から代表をやっています。20年も経つと色々考えることがあります。

棚田は、条件は悪いですが、何百年と守られてきたわけです。昔は手作業でしたが、今は小さな機械を使って棚田を守っています。

私たちが子供の頃の景色を守るにはどうしたらよいかと考えると、大事なのは里山周辺に住宅があることではないでしょうか。人が住んでいないと、景色は守れない。石積みの棚田です。たまたま手ごろな石が出るので、それを処理してつくられてきましたが、50年も経つと崩壊するのです。昔の人はすぐ直したのですが、今はやりません。壊れたらそのままです。技術もないし、人もいないからです。これをなんとかしないといけません。

サミットが契機になって、地元の人たちの中に、「自分たちの棚田がよいところなのだ。」という認識が広がり、知名度も上がりました。このことは、そこに住みたいということにつながるのです。実際、「お金がなくてもゆとりのある生活がしたい。」と何人か移住してきました。

棚田の周囲は、昔は柴を草刈り場として肥料にしたものです。これが何百年も続きましたが、最近は化学肥料ができたのでその必要がなくなりました。草刈りが無くなると、荒れてくるのです。「そこに住んでいる人だけでは棚田を守れない、都市からの応援を得たい。」と考えています。

**中島氏** 都市の力を借りても大変だということでした。拠点がないとなかなか都市住民との交流は上手くいかないようです。

それでは、3番目が明日香の未来を創る会の濱田さんです。実は濱田さんは地元の農家さんではなく、都市住民です。これがまた特徴があります。明日香は歴史の古いオーナー制度を行っていません。よろしくお願いします。



## 事例紹介 C：NPO 法人 明日香の未来を創る会（奈良県高市郡明日香村）

**濱田氏** ご紹介いただいたように、明日香の未来を創る会の事務局長を担当しております、濱田です。大阪市内に在住しています。明日香村は南北に長い奈良県の北西部にあります。人口はおよそ5,500人、面積は24km<sup>2</sup>です。明日香村は1972年高松塚の古墳の壁画が発見されてから一気にメジャーになりました。しかしながら埋蔵文化財ですので、あまり関心呼びません。観光客は年間50万人ほどです。飛鳥川という川の河岸段丘に作られた棚田があります。枚数は315枚ほど、面積は10haの小規模なものです。オーナー制度は1996年からスタートし21年目です。棚田が荒れ始めた理由は皆さんの地域と同じだと思います。

当時の村長から特別にミッションを受けた役場の職員が非常に熱心に村民を説得し、オーナー

制度開始にこぎつけました。これが棚田ルネッサンス実行委員会のスタートです。

全国で2番目だったので、オーナーさんがどんどん集まりました。毎年拡大し、一時は80区画となりました。年間4万円ですから、実行委員会の収入は320万円。他にも畑オーナー制度もありましたので、500～600万円の収入がありました。ところが、棚田オーナー制度が1つのビジネスモデルとして確立しますと、色々な地域でオーナー制度が採用されるようになります。ビジネスとして競争が激しくなり、近くに他の地域があると、そこに人が集まっていきます。日本の人口全体が増えませんが、当然オーナーの数も減ってきます。当初は地元の皆さんだけで熱心にやっていたのですが、このままでは継続が難しいという状況になりました。NPOにした

# 棚田のまもりびとミーティング

方がいいということで、6年前にNPO化しました。そのおかげで、我々が運営に関わらせていただくようになりました。

ところが、20年以上もやっていると、色々な所に制度のほころびが出てきます。関わっている人もどんどん変わってきます。中にはリーダーとしてふさわしくない方が代表になることがあるわけですから、停滞することもあります。「もっと頑張って一緒にやろうよ。」ということで、色々な取り組みをしています。1つは皆さんもやっていらっしゃると思いますが、田植えや、稲刈り体験などを、一般の方を募集してやっています。こういった成果が実りまして、大阪市内からの中学2年生が職場体験学習で、200人ぐらいが2年続けて来ています。

それから、我々の明日香の未来を創る会という名前には、「オール明日香」、つまり明日香村全体でやろうという願いがこめられています。今は明日香村の商工会とコラボレーション事業をやっております。インバウンドでたくさん来られる外国人の方にオーナーになってもらおうということです。富裕層をターゲットにしている、普通のオーナーさんが4万円の所、7万円をいただこうと、来年は少し商工会と連携して、もう一回栄光を取り戻そうと頑張っています。

一つの課題は、我々は村外の人間ですから、「あ



れをやりたい、これをやりたい。」と思っても、地域の人たちと一緒に考えないことにはうまくいきません。やはり地域の中から地域全体を引っ張ってくれるようなリーダー、NPOの代表としての資質を持ったリーダーが現れることを望むわけですね。これもただ待っているだけではしょうがないので、「棚田の保存を私たちと一緒にやろうよ。」という呼びかける機会を作って発掘し、次世代の人を巻き込んでいければよいと思っています。とはいうものの、やはり百姓の作業というのはマンパワーです。人がいないとどうしようもありません。これからの人口減少社会では、地域の自助努力だけではどうしようもないこともあります。ですから、我々も一生懸命、命ある限りは尽くしていきたいと思っています。

## グループ別 意見交換の要旨

### < Aグループ >

- ・組織における後継者の不足、リーダーの育成が課題である。
- ・運営資金の獲得方法を工夫するべき。
- ・棚田米販売についてはブランドの確立やJA以外の販売先の確保の努力を続ける必要がある。
- ・小口にするなど販売方法の工夫が必要である。

### < Bグループ >

- ・管理の担い手がない。若者だけよりも、退職後のシニア世代をターゲットにするのが有効的ではないか。
- ・取り組みではボランティア活動から脱却し、事業化が重要である。
- ・オーナー制度のみではなく、独自に事業化を進める必要がある。

### < Cグループ >

- ・保存活動を広域化し支える人を集め易くする仕組みづくりが重要である。
- ・人を集めることで観光や旅館への波及効果が発生する。
- ・担い手の労力として学生の作業参加がきわめて有効的である。

◆テーマ

「自然共生社会の構築に向けて  
～外貨獲得と学校教育～」

座長：千賀 裕太郎氏（棚田学会会長）



**司会** 佐渡市農林水産課の伊藤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。それでは第22回全国棚田（千枚田）サミット 首長会議を始めます。テーマは「自然共生社会の構築に向けて～外貨獲得と学校教育～」で進めます。座長とアドバイザーを紹介させていただきます。座長は、棚田学会会長 千賀裕太郎様、アドバイザーは農林水産省農村振興局農村政策部地域振興課長 圓山満久様（代理：島田課長補佐）にお願いしております。

それでは早速首長会議を進めていきたいと思えます。座長の千賀先生よろしくお願いいたします。

**千賀氏** それでは首長会議を始めます。それぞれの首長から自分の自治体での事例をお話した

だいて、参考にするというのは非常に大事です。その中で疑問点や提案等が出てくれば、ディスカッションする時間をとっていきたいと思います。まずは、取り組みをご紹介します。

では、山形県上山市からよろしくお願いいたします。

**山形県上山市** 上山市の横戸でございます。一昨年、上山市を会場にサミットを開催させていただきました。またその際は大変多くの方々にお越しいただきまして心から感謝申し上げます。今日のテーマは「外貨獲得と学校教育」ということですが、外貨獲得という色々あると思います。我々の棚田は比較的新しい棚田で、どちらかというと中山間地域の標高が高いところにありますが、そういう意味におきましても、本市では水稻栽培

もありますが、温度差を利用しまして花卉栽培、<sup>かき</sup>リンドウや啓翁桜<sup>けいおう</sup>といった花を栽培しております。外貨獲得といえるかどうか分かりませんが、そういった色々な作物を混合して耕作し、総合的に棚田を利用しているのがうちの特徴だと思います。そして、どうしても棚田は耕作放棄地が出るわけでございます。今うちには造り酒屋がないので、ワインに特化した事業を展開しております。その中でワイン特区の認定をいただきました。耕作放棄地にワイン用のブドウ栽培をしていこうという形で、棚田とを含めた中山間地の利用を今図っているところでございます。ワイナリーも新しく1カ所できましたし、そういう形で進めてまいりたいと思います。

あと学校教育ですが、過去に市内の小学校が米を作って市内で販売しました。あとは、自然学習ということで、今市が進めております上山の里山でのウォーキングとか、あるいは放課後授業ということで、市内に武家屋敷が4軒あるのですが、そこで寺子屋授業を行っています。地域の方々から地域にある伝統文化をはじめ、色々なことを指導していただいております。地域の方々と連携を図りながら、伝統を後世に伝えていく授業をやっています。

いずれにしても、本市は盆地のような地形でございまして、そのような地域資源を極力活かしていこうと今取り組んでいるところでございます。

**千賀氏** それでは次に新潟県十日町市、よろしくお願ひします。

**新潟県十日町市** 新潟県十日町市の市長の関口です。平成21年に第15回全国棚田(千枚田)サミットを本市において、開催させていただきました。当市の外縁部には里山が広がっておりまして、松代地域の星峠の棚田や、儀明の棚田や、蒲生<sup>かもう</sup>の棚田など、松之山地域の棚田にも非常にたくさんの写真家の皆様が訪れています。

そうした中で、今日は棚田バンクの取り組みについて、皆様にご紹介をさせていただきます。皆様ももちろんこのような取り組みはされていると思いますが、私どもの特徴といたしましては、地元の農家の皆様とNPO法人の越後妻有里山協働機構が、うまく連携する中で、約16年にわたる取り組みを続けてきたということでありまして、効果についてですが、2003年から少しずつ耕作放棄地を管理するようになりまして、今年

5.4haを管理し、最近では急速に管理面積が増えてきています。そして棚田バンクに参加する方は、主に都市生活者が多いのですけれども、収穫米の配当をお支払いすると、それに対して出資をしていただいて、田植えや草刈り、稲刈りの時に従事していただくという仕組みになっております。

棚田バンクの加入数の推移ですが、2015年においては、小口加入は1万円の会費ですが、この件数が157名で、標準会員は35,000円の出資をしていただいて、それに応じたお米を得られるといった方が64件で、徐々に出資の件数も増えてきております。今年の田植えには200名以上の方から参加いただき、その打ち上げが大変盛り上がりました。市の中心部の住宅地に美田が広がっているところで、魚沼コシヒカリの産地がございまして、その辺りに住んでいる方が棚田での耕作に魅力を感じて1万円を払って棚田バンクに参加しており、このような市民なども増えてきているようです。

さらにこのNPOについてですが、私どものこのエリアでは「大地の芸術祭」というイベントを3年に1度やらせていただいております。それをサポートする意味でもNPOがこのような棚田バンクという取り組みを行っており、今職員が29名おります。そのうち、1ターナー者が10名、Uターナー者が9名で、若者が喜んでこのNPOに就職して、そうした棚田を守る活動に一生懸命しているのが現状でございます。

**千賀氏** 質問は3市ぐらいまとめて質問の時間をとりたいと思います。

それでは新潟県上越市、お願ひします。

**新潟県上越市** 私は上越市副市長の野口でございます。

上越市の取り組みですが「ふるさと玉手箱事業」を紹介させていただきます。私どもは、平成17年1月に14市町村が合併いたしまして、975km<sup>2</sup>と非常に大きな市となりました。人口は19万8千人でございますが、中山間地域も合併しています。

玉手箱事業でございますが、昨年度に制度を作りました。事業主体は地域のマネジメント組織で、私どもの上越市には12組織ございます。このマネジメント組織は、集落を越えて広域で農地の保全、そして農地の利用調整や担い手の育成、野菜の庭先集荷などを実施しており、将来的には、さらに福祉といったことまで事業を拡げる

構想もごさいます。ここが主体となって、毎年ダンボール箱に米や地元野菜、山菜、味噌などを詰めて、1箱3千円ぐらいで、東京にある「ふるさと上越ネットワーク」などに配送して収入を得ています。平成27年度で市内7組織が取り組み、約1千万円の収入があり、今後につながる成果がみられました。この後も逐次改善しながら進めてまいりたいと考えております。

**千賀氏** それでは、上山市、十日町市、上越市の3地域につきましてご質問がありましたら、お願いします。

**静岡県** 静岡県の佐藤と申します。静岡県は全国47都道府県の中で唯一、県として首長会議に参加させていただいております。

十日町市の棚田バンクの取り組みについてご質問させていただきたいと思っております。通常、棚田オーナー制度はよく聞きますが、そのオーナー制度との違いございましたら、教えていただければと思います。

**新潟県十日町市** 私どもの地域にいくつか昔から続いている棚田オーナー制度がありますが、やはり担い手不足で非常に存続が厳しい状況になっています。その中で若い皆様がNPOに就職されて、その人たちが担い手になり、どんどん活動が活発になってきています。

また、学生が多いので、それぞれのいくつかの大学の支所のような感じで横に広がったりしているようなこともございますし、また企業研修などで棚田バンクの外側に、新たにそれに共感して田植えなどの農作業に参加していただけるような方なども増えてきている実態もあります。

**静岡県** NPOの職員さんが29人もいらして、すごいと思います。ただ、給料はどのように確保されているのですか。

**新潟県十日町市** そこは、棚田バンクだけで守っているのではなく、先ほど申し上げたように、私どもの方で取り組んでおります大地の芸術祭という、現代アートを使った地域おこしの取り組みがあるのですけれども、その事業の一環として、この棚田バンクをやっておりますので、その他の仕事も含めてたくさんあるのです。

**静岡県** 地域おこし応援隊などとは関係ないですか。

**新潟県十日町市** そうですね。この町には地域おこし協力隊も当然たくさんおり、今も18名おりますし、今日も何人かこのサミットに参加してお

ります。

また、定着率も非常に高く、卒業生も33名おりますが、73%ぐらいの定着率がありまして、非常にありがたい状況になっております。彼らは彼らで、地域ごとで棚田バンクの取り組みとは別のところでやっていただいております、今日は、特に小口加入の加入金をいただく中で少しずつ増えてきておるものですから、その中での棚田バンクの取り組みを取り上げさせていただきました。

**千賀氏** 上越市の「ふるさと玉手箱事業」で「地域マネジメント組織が集落を越えて」とありますが、具体的にはいくつかの近い集落をまとめたのか、それとは関係なく12の組織をまとめたのか、教えてください。

**新潟県上越市** 「棚田地域の維持は難しい」そういったことを解消するために、「個人でやるよりも集落でやれば何とかできるのではないかと、集落でダメだったら複数の集落で取り組んではどうか。」という発想です。元々は、中山間地域等直接支払交付金制度の事務が煩雑であったことから、個人や集落だけでは難しく、マネジメント組織の中に事務員を雇い、事務作業をやっていただきながら集落の共同作業を行うなど、そういうところから動いて広がってきました。そのような中で、さらに外貨を獲得するために「玉手箱事業」や学校給食への供給などをやっています。このマネジメント組織は市内に12組織あり、全ての組織ではありませんが、職員が1~2人います。

**千賀氏** そのようなことをやられている市町村は少ないのかもしれませんが。

それでは次の新潟県佐渡市からお願いします。

**新潟県佐渡市** 佐渡市の三浦でございます。

佐渡市も棚田オーナー制度をやっておるのですが、今日この場では観光に絡んだ外貨獲得ということを紹介させていただきます。

佐渡の中の有名な棚田の一つで、<sup>いわくび</sup>岩首の棚田というのがありますが、海沿いの集落から標高350m以上のところに460枚ぐらいの棚田が張りめぐらされているという地域で、棚田の近くにきれいな滝もあり、佐渡観光の中では、比較的人気のある地域にもなっています。またこの地区は、廃校になった小学校を「岩首談義所」と名づけ、地域のコミュニティの拠点施設として活用し、維持・管理しております。棚田の研究など様々な研修等で訪れた首都圏の学生を受け入れてい

ることが口コミ等で広まり、岩首地区を訪れる学生が年々増え、最近では観光客も含めて、年間1,000名を越えるお客様が訪れています。

また、この岩首地区は世界農業遺産認定をきっかけとして、棚田散策ツアーを観光協会と連携し実施しています。地元の方々がガイドを務めて、お客様に散策しながら棚田の価値、魅力をお伝えしています。散策者ですが平成25年は504名、26年は800名を越え、ガイド料金もわずかですが新たな収入としていただいています。

ただ、その一方で、ツアーに参加いただいているお客様とは別に、口コミ等々で広がって棚田を見に来ようという一般の観光客も増えており、通常入られたら困る棚田の畦に入り写真を撮ったりするなど、マナー的な問題も発生していますので、お客様に対するルール整備や、それに伴う周知方法が課題になっております。

学校教育を通じた人材育成については、先ほどアミューズメント佐渡で佐渡総合高校の生徒が皆様に世界農業遺産を説明させていただきました。この取り組みは能登地域の高校生とも連携しながら、実際に農家や関係者への取材や、生きもの調査などを実体験しながら佐渡の農業遺産というものを勉強していただいて、それを市民のみならず、同じ県内の高校生などにも一生懸命に広める活動をしており、その活動が評価され、環境大臣賞など受賞させていただいております。今後この活動を生かすためにDVDを作成し、教材として島内の教育機関に配布するなど、授業の一環に使っていただくこうのことを進めております。

**千賀氏** 次に長野県小谷村、よろしく申し上げます。

**長野県小谷村** 私が就任する前の10年ぐらい前から棚田オーナー制度というのを始めたと思うのですが、現在は年間で40組から50組ぐらいの方がオーナーとして登録しております。基本的にはオーナーになっていただくと、田植えと稲刈りだけは来ていただきたいのですが、来なくてもお米はとれた分は送る制度になっています。またオーナーの皆様のご希望に十分に答えることができないのですが、高齢化が進みましてなかなか田んぼを管理する方がいなくなる悩みがございます。若い方の営農組織があるのですが、棚田は労力に比べて収量が少ない課題がありまして、なかなか尻込みをしていて手を出していただけないという悩みがあります。本来は一番の産業

は観光でございますので、そちらの方と連携しながら、できるだけオーナー制度や、棚田自体を増やしていければいいと思っています。

**千賀氏** それでは次は静岡県、お願いします。

**静岡県** まず外貨獲得でございますが、今回のテーマに直接的に関する活動が県内でなかなかないので、その土壌づくりということで今日ご紹介をさせていただきたいと思っております。

多様な人・資源を呼び寄せるためのプラットフォームづくりということで、この度「むらサポ」という形で都会の皆様へ農山村の魅力をたっぷりご紹介させていただいております。内容は農産物の情報伝達、農業体験ということもありますし、あとは棚田のボランティア、こういった情報を掲載するサイトを県で作りました。県の色々な部局を横断して、それぞれ農山村で行われるマルシェであるとか、お祭りとかの情報を収集し一括してこれに登録をいただいた県民の皆様へ情報発信をしています。今年の4月1日から始めまして、だいたい1日で5、6件、6月現在までに520件ぐらいの登録件数がございます。そういった登録をいただいた方にどのような形で発信をするかということですが、1週間に1回、県内で行われる色々な情報を集めて配信をしています。

我々のねらいは、とにかく情報を発信することで都会の皆様や市民に関心をもってもらい、イベントなどに参加していただくということです。また、村や地域の棚田について、ファンを増やすことで色々な形で資源の結合といえますか、そういったものが起きてきます。このような取り組みが「一社一村しずおか運動」という取り組みでございまして、企業の皆様へ農山村の色々な支援活動、いわゆる企業のCSR活動という形でご協力をいただいております。特に、棚田では高齢化や人口減少で人手不足が起きておりますので、企業の皆様へCSRという形で参加していただいております。外貨に限らず、色々な農山村で不足している資源について、情報を発信あるいは受信することで、それを集約し地域にある資源を活用して、いずれは外貨を稼げるような仕組みを作っていきたいと思っております。あわせて外貨の獲得だけではなくて、雇用の創出につなげていければと、県を横断して情報発信をしているところでございます。

**千賀氏** ではこの今の3つの事例に対するご質問・

ご意見があればどうぞご発言ください。

**新潟県十日町市** 佐渡市長にお聞きしたいのですが、佐渡総合高校は素晴らしいパフォーマンスだったと思います。総合高校というのは結構今流行ですけど、元は農業高校だったそうですが、農業の授業は実際にやられているのですか。

**新潟県佐渡市** 授業としてもやっています。昔は農業専門の高校でしたが、今は高校の中に農業以外のいくつかの専門分野もあります。昔は佐渡島内の他の学校にも水産科があるなど、専門分野がありました。今ではその専門学科が総合高校に集約されています。

**会場** ご説明いただきました岩首談義所が廃校利用をされているということですが、その活用方法や佐渡市でどのような支援をしているのか、もう少し詳しく教えてください。

**新潟県佐渡市** 岩首地区の廃校になった旧小学校については、市から地元地域への無償貸与という形になっております。今回のサミットにも参加していただいている佐渡棚田協議会の大石会長が中心になって、この談義所の維持・管理をやっていただいています。例えば、早稲田大学等の首都圏の大学のゼミ等が棚田の研究で談義所を拠点として活動する際に、使用料をいただくとともに、談義所の掃除や、集落の竹林整備など

ボランティア活動もしていただいています。

また、佐渡の大きな酒蔵が、廃校になった小学校を新たに「学校蔵」として利用している事例がございます。そこを酒蔵として活用するだけでなく、地域活性化、島おこしの講義を、今回のサミットの基調講演の講師である藻谷先生にも協力してもらいながら行っています。また、この学校蔵では、東京大学とも連携し、太陽光パネルを設置し、お酒造りに必要なエネルギーも佐渡産として、丸ごと佐渡の資源を活用したお酒を造る取り組みを始めていただいています。あとは別の棚田地域でも、太陽光パネルの下で野菜を作る営農型ソーラーシェアリングの実験を行うなどの取り組みを始めています。

**長崎県長崎市** 長崎市でございます。静岡県の実例についてお聞きしたいのですが、「むらサポ」は素晴らしいアイデアだと思いますが、この情報発信ですが、これは県独自でされるのか、それとも各団体から色々な情報をくださいということで、県の方で集めていらっしゃるのかを聞かせてください。また、これまでの実績で「一社一村しずおか運動」というのがあるのですが、例えば棚田等の場合、資源が同一であることが多いと思うのですが、成果・効果がどのくらいあるのかお聞きしたいと思います。



**静岡県** 今、静岡県ではこの活動に合わせて、「ふじのくに美しく品格のある<sup>むら</sup>邑づくり」といった地域づくりを行っています。地域で農村の資源を守っていきこうということで、多面的機能支払のようにコミュニティができていますが、皆様の活動組織としての母体でございます。元々、情報発信を個々にやっていたのですが、それを集約して皆様に情報提供していただいて、県から試験的に情報発信しています。この活動を始めたことによって、元々あるコミュニティ以外の方にも関心をもっていただいて、情報をどんどん寄せてくださるようになってきました。いわゆるネットワークでつながることによって、どんどん拡散して色々な情報が集まってくることを目指していきます。幸いに今のところそういう形になりつつあります。あともう一つは、「一社一村運動」のマンパワーの関係なのですが、これは実績としては年間県内で6,000人ぐらいのマンパワーの応援があると想定しています。

**千賀氏** 「クラウドファンディング」とはどういうことですか。

**静岡県** これについては、ハードルも高いということが分かったので、今から、皆で勉強しながら、進めようと考えているところです。

**千賀氏** それでは次に静岡県松崎町からお願いします。

**静岡県松崎町** 松崎町の高橋と申します。

私どもは「外貨獲得に向けた取り組み・ルール作り」ということとお話をさせていただきたいと思えます。はじめに、松崎町は伊豆半島の西海岸にあり駿河湾に位置し、静岡県で一番小さな町でございます。この松崎町の町内にある石部地区に約4haの棚田があるのですが、この棚田は平成12年当時、耕作放棄地になっていました。その棚田を地域住民の力で改良して現在の棚田になりました。そして、自立した棚田の持続可能な取り組みを図り、棚田を単なる生産の場としてとらえるのではなく、都市住民との交流などの多面的な機能を与えることを目的として、平成14年から棚田のオーナー制度を始めました。会員はオーナー会員、トラスト会員ということでそれぞれオーナー制度を設けております。現在は、オーナー制度開始から15年を迎えました。この間、毎年100組程度のオーナー会員と70名のトラスト会員にご協力いただいております。オーナー制度の収入としては年間約400万円と

書いてありますが、こちらは補助金に一切頼らないでオーナー収入で保全の費用をまかなっている状況です。オーナーは1年ごとの更新で、1年経ったらまた新たなオーナーを募集しています。毎年オーナーの7割がリピーターで、そのうち6割の方が首都圏の方になってもらっている状況です。

今後の課題であります。15年も経つとマンネリ化が挙げられます。一方で、保全の費用にオーナー制度は大事な制度ですので、棚田オーナー制度をさらに見直して新たな方を呼び込めるように展開していきたいと思えます。なお、35,000円をオーナーの方が払って田植えや稲刈りに来ていただくと、地元に泊まって家族4人で10万近くのお金が掛かるわけです。そのような中でもなぜ棚田オーナーに申し込むのだろうかということですが、「お金では換えられないものがこの棚田にはあるのだよ。」ということを私どもの保存会長は強く言っております。今後ともこのような取り組みをさらに発展させるように頑張っていきたいと思っております。

**千賀氏** それでは次に愛知県新城市、お願いします。

**愛知県新城市** 愛知県新城市の安形と申します。新城市は旧鳳来町時代に第11回全国棚田(千枚田)サミットを開催しております。

さて、私の方からは学校教育を通じた事例についてご紹介させていただきます。新城市では地元新城小学校でやっているJA主体によるこども農学校、市内農業高校による農業クラブ、豊橋調理製菓専門学校による棚田での田植えから収穫までの棚田体験を実施しております。子供たちが千枚田で農業体験をすることによりまして、棚田の果たす役割や生物と共生した棚田に優しい米作りを経験し、稲作の大変さを肌で感じ「食の安全・安心」に、より一層の関心をもつことを目的に実施しております。効果としましては、田植えから収穫までの生育調査や自然豊かな田んぼの生物などをテーマに学習発表会・学園祭などで成果を発表し、市民や父兄に好評を得ているということでございます。

また、田植え・田の草取り・稲刈り・脱穀など稲作体験を通して米作りの大変さを実感しているようです。

課題としましては、今後も引き続きこの稲作体験を実施していくこととありますが、四谷の千枚田においても耕作者の高齢化が進んでおり、講



師となる後継者の育成が必要となっております。

**千賀氏** それでは引き続き、和歌山県有田川町からお願いします。

**和歌山県有田川町** 有田川町副町長の山崎でございます。私どもは2013年に棚田サミットを開催しまして、みなさまにお越しいただきました。今回にいたるまであまり棚田についての運営の効果が上がっていないのですが、農家の後継者も高齢化しておりまして、それに加えて鳥獣害対策が大変ひどいことにつまずいている状況です。

テーマの学校教育を通じた人材育成についてですが、やはり棚田保全については棚田の良さを皆様にご存知いただくことが大事です。まず地元の小学生、中学生、高校生、和歌山大学観光部の学生さんの皆様に、棚田における米作り、そしてまた棚田ができた歴史、できたお米で地産地消のマニュアルということを地元の方々と交流をしながらやらせていただいております。これから官・学・民が一体となってより一層のこのような活動を努力して継続することを目指しています。

**千賀氏** それではただ今の松崎町、新城市、有田川町のご報告に対するご質問・ご質問がありましたらお願いしたいと思います。私からも1点質問があります。

今、和歌山県有田川町で農業高校と小学校の郷土学習の実習などの話が出ました。実は、私は水に関する賞の審査委員長をしておりまして、北海道の中標津農業高校の生徒が小学校に農業体験を教えている事例を見て、「本当にいいものだな。」と思ったことがあります。小学校の子供たちが「先生、先生。」と言って農業高校の生徒に教えるを請うている姿は、涙が出そうになりました。これからは特に農業高校は非常に注目させるものだと思います。全国的に農業高校の卒業生が地域で頑張っておられるというのも大事なことです。また、若い農業高校の生徒たちを励ますという意味でも、小学生に教えるような機会を、農業で与えていけるといいかと思って、有田川町からの話を聞いていました。

それでは次に進ませていただきます。山口県長門市からです。

**山口県長門市** 山口県長門市の農林課長をしております光井と申します。本日の総会におきまして、平成31年に第25回の棚田サミットを開催の推薦をいただきまして、市長の代わりにお礼申し上げます。本市では平成25年度に「ながと成長

戦略行動計画」というものを作成しております。その中で「自然栽培米の供給基地化」というもの目指すということで、現在日本の棚田百選に選ばれている湯谷東後畑地区というところを拠点に作付けをしております。委員の中に、石川県羽咋市のスーパー公務員といわれるローマ法王に米を献上された高野さんがいらっしゃいまして、その方からアドバイスをいただき、取り組みを進めています。

平成26年度から作付けを行っておりまして、平成28年度については250aの面積で取り組んでおります。耕作放棄地の復元をいたしまして、その完全無農薬無肥料の栽培をやっているわけですが、収量が反当たり5俵ということで、伸びていないのが課題であります。今後米の品質等を向上させるということで、このような品種は土壌の改良など研究・対策も一緒になって研究しています。

できたお米につきましては、大都市圏との取引の拠点ということで、行政と農協、漁協、養鶏組合の4社で出資して作った「ながと物産合同会社」という会社で、全量買い取っていただいております。1俵あたり最初は30,000円を目途にやりましたが、品質にちょっと問題があったので25,000円としました。

あとは、今年5月下旬に県立大学の学生22名と韓国の釜山の大学の教授1人、それから安倍昭恵夫人をお招きし一緒に田植えをして、地元の農業高校の生徒も一緒に手植の田植えを実施しました。安倍昭恵さんの希望で自然栽培米を使ってみたいという思いもありまして、去年から引き続き一緒に田植えをやって、秋には稲刈りを一緒にやる計画をしているところでございます。

**千賀氏** それでは次に徳島県上勝町です。

**徳島県上勝町** 外貨獲得についてはオーナー制度を少しずつやっております。ただオーナー制度については民間が主導でやっております。たぶん私どものところが100㎡あたりの単価が一番高いのではないかと考えておりますが、5万円をいただいております。15,000円は事務局の方で、35,000円は農家ということになっていただいております。

学校教育に関しては、小学校・中学校の2コースがございまして、それぞれの学年でテーマを毎回検討しており、棚田での米作り体験は5年生が行っています。

あとは上勝の面積の約9割が森林や山でありますので、畑作りとか、森林に関する学習についても中学生、小学生の中で取り組ませていただいております。

それともう1件、地方創生、我々のところでは地域創生という名前ですけど、それもテーマを絞らせていただいて、そのうちの一つが「上勝町で子どもを育てる教育」というものに取り組んでいます。

実は現状として、他市の普通高校へ入りたいという理由で、中学校から他市に転出する子供が多いという問題があります。なぜかと言いますと、郡部の枠がございまして、他市の学校へ入ろうと思ったら、かなり偏差値が高くないと、試験では入れない。ただ中学校から他市の中学校へ行くとストレートにずっと入れる事例もございまして、そういったところをねらっている保護者が多くなっています。最近では子供が1人とか少数になったからそういうことになって、昔は3人も4人も子供がいたら長男だけは他市の学校に行かせる、そういうことは考えられなかったです。今は子どもが1人の時代になり、最善を尽くしたいということで、親御さんもそれでいいという事例ができてつあり、非常に危惧しています。そのようなことから、平成27年度から中学校については、隣町へ行かないと塾がないので、学力を上げるために公立塾というのを開設しています。

国語と数学と英語ですけれども、月・水・金の午後の放課後に塾をして1年生、2年生、3年生と3科目をローテーションでいきます。これがかなり好評です。公立塾で、町令でやっております。講師については民間の私塾の先生をコンバートしております。28年度からはそれをさらに小学校でも広げ、宿題をすることから始めて、勉強する機会を身につけることをテーマにしています。お家に帰っても隣近所に子供がいない状況ですので、やはり宿題ぐらいは皆と一緒に仕上げ、そのあとは学童保育で時間を潰して、お家に帰っていただいております。要は学習する気持ちを育てるという面で公立の小学校でも今年度から取り入れさせています。

**千賀氏** 次に佐賀県唐津市、お願いします。

**佐賀県唐津市** 佐賀県唐津市でございます。私どもの方は日本の棚田百選に指定を受けております  
棚田百選  
相知町 蕨野と肥前町の大浦の棚田の2つの事例

を挙げさせていただきます。

まず、相知町蕨野の棚田でございますが、ここは地元の佐賀大学と地域交流協定を締結いたしまして、大学生によるボランティア活動、それから大学生の色々な試験等のフィールドとして利用していただいております。まさしく住民と行政と市民、大学の連携による棚田活動が進められているところでございます。

次に学校教育を通じた人材育成についてですが、地元の棚田実行委員会が棚田組合と地元の小学生を対象に体験活動をされていまして、まさしく農業後継者となる地元の小学生の方々と手作りの田植え・稲刈り等を実施している状況です。いずれも都市間交流といたしましては、棚田ウォークや自然を生かしたコンサートといったイベントが主流の棚田の活動でございます。

課題・展望は、私が地元と話をする中では、当地から棚田をどうかしていこうというグループが集まり実行委員会が立ち上がってもう10数年になるわけですが、農業後継者不足とあわせ、実行委員会の世代交代もないので、実行委員会も大分くたびれたということをお聞きしております。イベントにも疲れてきていることが課題になっております。そのような改善策を地元とともに行政としても話し合いを続けていきたいと思っております。

**千賀氏** それではただ今の長門市、上勝町、唐津市の3つの地区に対するご質問・ご意見のある方はどうぞ。

**会場** 上勝町の塾の先生について、どのような方が塾の先生になっておられるのですか。

**徳島県上勝町** 1人は教師の免許を持っている地域おこし協力隊の方に、テーマは子供たちの学習ということでやっていただいております。講師の中でもずっとしゃべっている先生と、本当に子供に教えるのが好きな先生がいるので、大勢の前でただしゃべってあげるのではなくて、一人一人の伸びる力をつけることが大切です。ごくわずかのお金で、先生方には協力をしていただいております。

**千賀氏** どうしても塾というと私塾を利用しがちですが、農村地域でもそういう力のある人を探して塾をやってもらうことは、大変ですが非常に意義深いことと思えました。

**長野県小谷村** ちなみにその塾は無料なのですか。

**徳島県上勝町** 受けるのは無料なのですが、参加

するのも自由になっています。ですから、中学生の8割ぐらいが参加しています。あとの2割は、野球クラブなどの民間のクラブへ入っていて塾へ来れない人です。小学生の方も、やはり少年野球とかの合間にしているのですけど、声掛けをしてみますと8割ぐらいの方が参加していただいています。

**会場** つまり何人ぐらいがその塾に参加しているのですか。

**徳島県上勝町** 中学校は1クラス15人ぐらいですから、30人のうち26人が参加しています。

**千賀氏** 今までに聞いたことがないような取り組みです。

**会場** 長門市にお聞きしたいのですが、有機肥料栽培米が250aということですが、これは増えている状態なのか、それとも停滞している状態なのか教えてください。

**山口県長門市** 最初の平成26年度は60a、それから27年度の2年目が130a、3年目は250aということで、年々増加はしているということです。農家も自然栽培研究会というのを作っておりまして、今後も増えていくというところがございます。

**千賀氏** それでは次に、佐賀県玄海町からお願いします。

**佐賀県玄海町** 昨年お話をした時にクラウドファンディングの話を見せていただいて、私ども玄海町の「音音」というお酒は、実はクラウドファンディングで作ったお酒です。500万円で募集して、実はすぐ集まりました。ですから、クラウドファンディングというのはやはり「ふるさと納税」のおかげかと思っております。ですから今度はこの「音音」をもっと販売をしていくような努力をしていきたいと思っています。

それから、棚田で作っているお米は棚田米コシヒカリとして「ふるさと納税」の返礼品で300件以上の注文をいただき、18,860kgの発送をいたしました。これは米を作って頑張っておられる農家にとっては大変助かることです。玄海町が買い取って、現金を農家の方にお渡しして私どもが送らせていただいています。ところが「ふるさと納税」の返礼品をうちは6割地元から取っていますから、4割から5割ほどしかキックバックしません。ですから一部の農家以外はそのような仕組みを維持していきたいと思っています。幸い12俵～13俵のうちの規模でもまだ大丈夫

なので、これを維持していきたいと思っています。

それから、学校については、私ども去年から小中一貫校にして、玄海町内に学校が1校しかございません。保育園は2園ありますが、保育園にも小学校の先生に行ってもらい学校に上がりやすいように担当者をつけてもらって、保育園児が1年生で戸惑わないように、フォローはさせていただきます。ですから、小学校では田植えや稲刈りはさせておりませんが保育園の年長・年中さんと田植えと稲刈りをさせている状況です。4歳・5歳・6歳というのは人間として培われた能力を出してくれる一番の年代だと思っています。保育園も我々としては大事に考えていきたいということで、今そういうことをさせていただきます。

先ほど上勝町の花本町長がおっしゃったように、これが少し時間をかけて、小学校・中学校で少し事務的なことを私どももやっていますが、なかなかこれがうまくいかないのが、小学校でも勉強ができるように考えていきたいと思っています。浜野浦の棚田を私どもは未来へ残したいと思っていますので、今後もさらなる努力をしていきたいと思っています。

**千賀氏** それでは次に長崎県長崎市、お願いします。

**長崎県長崎市** 長崎市です。まず外資獲得に向けた取り組みですが、長崎市の棚田は大中尾棚田とあって面積が8ha、そして450枚、農家数が45軒、他と比べると小さい棚田でございます。そのほとんどが自己消費型なものですから、あまりお米を売るといふ気持ちは少ないという状況です。ただし、今言ったように農家の方の高齢化と遊休地化するのが心配ということで、「棚田のオーナー制度」ができました。

それと「棚田トラスト制度」ということで、応援の部隊を作りたいと考えていたわけですが、今現在のところ会員はゼロで、学生の方は現在97名の方が参加をしていらっしゃいます。労力支援というところでは非常に活動されている状況でございます。

また、効果についてですが、トヨタの環境保全活動「アクアソーシャルフェス」ということで、このような企業の方も一緒になって棚田保全に協力していただいておりますという状況でございます。

それから、学校教育はほとんど皆様と一緒にです

がグリーンツーリズム活動に対しての支援をしている状況で、大中尾棚田関係では平成27年度は4校、263名の子供たちに来てもらっている状況でございます。

課題としましては、市街地から棚田まで40kmほどあるので、子供たちや学生を送迎する車代に非常に苦しんでいらっしゃる状況で、この辺が一つの課題でございます。

**千賀氏** それでは次に長崎県雲仙市、お願いします。

**長崎県雲仙市** 長崎県雲仙市でございます。3点ほどご紹介します。

雲仙市の岳地区ですけど、美味しいお米がとれるところです。

まず棚田オーナーについては平成25年度からスタートしまして、これまで毎年7口、8口、5口という数で、今後に期待したいと思っております。

それから体験学習ということで、平成20年度の全国棚田（千枚田）サミットを機会に長崎の調理学校と地元の千々石<sup>ちぢわ</sup>青年農業者と一緒に田植えなどの農作業をすることで非常に地元インパクトを与えております。

それから学校教育については第二小学校という生徒数15名の非常に小さい学校ですが、田植え・

稲刈り等を行って、できたものを使って三世代で親子餅つき大会をしており、行政の方でPRし支援しているということでございます。

課題を申し上げますと、美味しい米ですが、販売には苦勞しております。しかし、棚田米ということで変な安売りはしてはいけないと値段だけは安くならないようにして、この地区はがんばっておられます。私個人的に思うのですが、よく米袋に棚田米という表示があるけれど、「何が棚田米なのか、棚田米はなぜ美味しいのか。」という部分のPRがあまりないので、棚田米は「苦勞して作ったお米であり、おむすびだけでも美味しいですよ。」というPRが必要であるのかと思っております。

**千賀氏** それでは、ただ今の3地区についてご質問・ご意見などがありましたらどうぞ。

**会場** 雲仙市に質問ですが、棚田米が安くならないようにというお話しですが、値段はいくらですか。

**長崎県雲仙市** 値段は30kg、1万2千円で頑張っております。この地域は千々石というところですが、一番上流が1万2千円で、その下の地域は1万円にするか9千円にするか8千円にするかと検討しています。少なくともこの千々石の棚



田米は他の地域よりも若干高く売れております。

**千賀氏** それでは次に長崎県波佐見町、よろしくお願いします。

**長崎県波佐見町** 波佐見町は日本の棚田百選に選ばれる以前の平成5年から鬼木地区の農産物加工センターが稼動しており、棚田百選に選ばれてからは案山子コンテストで人を呼び込み、3週間で2万人の皆様がおいでになります。また、待っているだけでは売れないので、町内に行われるたくさんイベントにどんどん出店・販売をして、年間1千5百万円以上の売り上げがあります。加工センターはその地区の全戸が出資してやっておりますので、それなりに自立している状況ではないかと思っています。

今日初めてこの会議に出席させていただきました、オーナー制度は今後うちの町でも大変大事じゃないかと強く感じました。

**千賀氏** それでは次に熊本県山都町、お願いします。

**熊本県山都町** 地震の救援にお礼申し上げていない市町村もあるかと思いますが、もう一回お礼を申し上げたいと思います。4月の熊本地震ではこの協議会の会員の皆様方をはじめ、全国から本当に大きな支援をいただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。いち早く人を入れていただいたこともあります。本当にありがとうございました。今後皆様方からのご厚情に応えるためにも1日も早い復旧・復興を行っていきたくと思います。今後ともご厚情賜りますようによろしくお願いたします。

地震の際、私どもが一番感じたことを言わせていただきますと、「避難所は公のところはかなり危ない。」ということです。特に小さい公民館等は危ないので、しっかりと見直していく必要が

あると思いました。もう一つは、自衛隊の皆様にはお礼を言っても言い尽くせないほど助けていただきました。

事例については、今年は自然観察会を含めた公設の「山都塾」、実はあさって開校するはこびの「ふるさと学」・「未来学」というものがあります。この「ふるさと学」の方で自然観察会を、歴史・文化を知る会、それから「未来学」の方では農業・林業、特に特徴的な事業を展開していらっしゃる方を紹介しながら、この町は何もないのではなく、「何でもある、資源を活かした町創りを子供たちにしっかりと伝える」そういう教育をやっていきたくと考えております。

**千賀氏** ただ今の波佐見町、山都町に何かご質問・ご意見はありましたらお願いします。

**新潟県佐渡市** 案山子コンテスト、ものすごい訪問者数ですね。だいたいどの辺りの地域から来て入るのか、またあとこのイベントのPRはどのようにされているか教えてください。

**長崎県波佐見町** まず、祭りを継続していると地元新聞が取り上げ、シーズンになると必ずテレビでも取り上げていただいております。特別なPRは行っておらず、口コミやリピーターで年々盛んになっている状況でございます。棚田の周辺は狭くて駐車場もないため、別に大きな駐車場を確保し、そこからシャトルバスを出しています。参加者は県内以外にも、佐賀県や福岡県からおいでになります。車でおいでになる方がほとんどです。

**千賀氏** これで首長会議を終わりにしたいと思いません。



## ◆テーマ

## 「棚田の未来を具体化する ～夢のある企画を考え実行しよう!～」

座 長：高桑 智雄氏（NPO法人 棚田ネットワーク 事務局長）

コメンテーター：藻谷 浩介氏（㈱日本総合研究所 主席研究員）



**高桑氏** 第22回棚田サミットのU30棚田サミットを始めます。私はNPO法人棚田ネットワークの事務局長をやっている高桑智雄と申します。このU30の趣旨を皆さんにお伝えしておきます。

棚田サミットは今回22回目ですが、このU30棚田サミットは今回が初めての企画です。なぜこの企画が開催されることになったかと言うと、大石さんという岩首の方が、棚田サミットを佐渡でやりたいと言ったときに、「棚田サミットはいつも棚田の未来をどうしようか、未来の棚田をどうこうしていこうと言っているわりには、未来を背負う若者の参加者が少ない。それでどうすれば未来に棚田を残していく議論ができるのか。」という思いがあり、また若い人に来てもらいたいという熱意がありまして、U30を、サッカーのU20のような意味で名付けました。ただU30と言っても、基本的には20代から40代ぐらいの人たちを対象としています。もちろん、気持ちが30代とかは大歓迎で、そういった若さをもっ

ている人たちに集まっていたいだと思っています。ただ限られた時間しかないので、これで何かを作ろうというのなかなか難しいですが、ざっくばらんに始めていきたいです。

その前に、皆さん「アイスブレイク」って知っていますか。ちょっと堅苦しい席でリラックスしてもらうことを目的に行う、アイスブレイクというのが最近流行りなので、それを佐渡の地域おこし協力隊の岩崎さんにこの場でやっていただきます。

**岩崎氏**（アイスブレイクに「ライスブレイク」とかけて1口大のおにぎりを参加者に配布）

このおにぎりは、佐渡の北片辺とういう地域のお米で、明日現地視察のコースに入っています。

**高桑氏** まずはこのお米をちょっと味わってください。実はライスブレイクとは、冗談での企画ですが、みなさん「和」って知っていますよね、調和の和です。和というのは禾(のぎへん)に口(くち)と書きます。禾というのは、禾本科、つまりイネ科を示しますので、お米を口にするというの

が「和」の元々の意味です。お米を口にすると調和が生まれるというのが、日本の昔からのスタイルでもあると思うので、お米を噛むことによって皆さんがここで、仮に激論になって殴り合いのケンカになったとしても、お米を噛んで味わっていただければ、良い調和が生まれるという快いコンセプトなのです。皆さん、それぞれ自分のところの棚田米が一番美味しいと思っていると思うのですが、自分のところのお米よりちょっと美味しいのではないかと思う人、(参加者から手が挙がる)結構いますね。自分のところのお米の方が美味しいよという人は、(参加者から手が挙がる)。このおにぎりは佐渡の海洋深層水を使って炊いたおにぎりです。

では始めたいと思います。今日のテーマは「棚田の未来予想図を描こう」という形で、限られた時間で皆に話してもらっては無理だと思うので、知らない方もいるかもしれませんが、Facebook上でメンバーの方たちに、「こんな棚田がいいんじゃないか、こんな棚田の場所があるんじゃないか。」ということ、自己紹介と一緒に出してもらっています。当初は未来予想図を皆さんに出してもらって、ナンバーワンを決めて、それを棚田サミットの宣言に載せようという趣旨だったのですが、あまりにもいっぱい出過ぎて選ぶことも難しく、また選んでいいものなのか、ということもあります。例えば、棚田にロリータを呼びたいとか、棚田で双六をしたいというのがあります。そのようなことを棚田の明日の宣言に出すと、似つかわしくないのではという

こともあります。30人程からいただいた意見を分類するとおもしろいことが分かってきて、皆さんの企画が3つぐらいに分類されてきます。

一番多いのが「イベント交流」でした。棚田の資源や棚田の空間とか、棚田のとても素敵な空間を利用して、色々なイベントとか交流の場所にしたいという意見がほとんどでした。

次に多いのが、棚田の伝統、棚田の技術とか、そのようなものも全て含めて「学ぶ場所」という意見が出てきました。人材育成ということも含めて、このような学びの場所として棚田を活かしていこうということです。

少数派ですが、もう一つすごく大事な視点がありまして、実は棚田は日常の空間、日常の場所でお米を作る場所ですよ。これが大切だという人たちもいらっしゃいます。

日常に比重を置いている人たちもいて、イベント交流に比重を置いている人もいます。学びの空間だと比重を置いている人もいます。だいたいこの3分類に分かれました。ただこれらは単体であるわけではなく、日常とイベント、例えば日常空間を大事にしながら、小さなイベントをやっていこうという人もいますし、イベントと学びを合わせて、イベントで色々なことを学ぶことをしていきたいという人たちもいますし、この学びの企画をすることによって、日常の棚田を保存していく人たちを育てていこうという人たちもいます。色々な地域ごとに、色々なマッピングができるのではと思っています。

これらをバランス良くできる棚田もあります



## U30 棚田サミット

が、地域おこし協力隊の人たちは、棚田はイベント交流の場であるという視点をお持ちかと思えます。やはりそれがミッションで、棚田を活かしていくことを一つの仕事としていますので、イベント交流というところに目が行きます。ただ、地域おこし協力隊の人たちでも、2、3年経つてくると、学びという視点も持ってくるのです。最初は、棚田でイベントをやらなくては行けないと色々活動しながら地域の学びをしていくと、棚田の日常が見えてくるという、このような循環が起きてくるわけです。日常の棚田にはイベントをやっても「地域の人たちが疲弊しちゃうよね。」と色々見えたり、この状況を見ていくと我々若い人たちが棚田に入ったときに、この3つのどこを欠いても今の棚田は保全できないと思うのです。その地域ごとに色々なバランスがあるし、その人ごとに色々なバランスがある。これを一つのモデルとして、皆さんに意見としてもらったこのモデルをU30の宣言として、盛り込んでいきたいと思っています。

モデルを継承するために今日は皆さんに色々自分たちは今このような場所で棚田の保全をやっていて、うちはここをやらなくては行けないという意見を出してもらいたいと思います。まず佐藤さん。自分たちのこのモデルに照らして今Facebookで言われたことで、こういうところに比重を置いてやっていきたいということを話してください。

**佐藤氏** くぬぎだいら 山形県朝日町の榎平の棚田の保全管理をしております佐藤恒平と申します。僕は2010年から地域おこし協力隊で朝日町に移住しまして、3年後独立して、今は町の中で地域おこしの会社を起業しております。今日は僕と現役の地域おこし協力隊の青木君と保全会の仲間たち数人と一緒にU30サミットに参加させていただきました。僕は3年前から棚田の一部の田んぼを貸していただいて米作りも行っています。そんな中で、U30サミットで何か発表しなくては行けないということで、Facebookに何を投稿しようかと、棚田の皆と話し合う時間を先々週に設けました。7、8人ほど集まってもらったのですが、それはもう本当にお葬式のような状態でして、棚田の未来を思い描くとはいうものの、あまり意見が出なく、「どうしたらいいのかね。」みたいな話になりました。どうしてこのように思っているのかということをお話してみたら、僕たちの

提案は、みんな忙しくて、あまり考える時間が無いということだったのです。これを棚田に「あまり余裕がない問題」と話したのです。

それともう一つ、僕は高桑さんの話だと日常的なところの提案が多かったのですが、もう1個問題があり、観光のお客様にたくさん来ていただいて、写真を撮ったり、棚田を見ていただくのはすごくありがたいのですが、棚田を保全している方たちは農家が本業なので、農業に集中したいのだけど、来ていただいているから愛想をふりまかなきゃいけないと、その辺のバランスが難しいことが「観光客に気を使っちゃう問題」。この2つが大きく上げられました。ですので、このような棚田だといいかという提案に対しては、この2つの問題をどう乗り越えていくかが大事かと思っています。

一つ目の「あまり余裕がない問題」に関しては、皆さんは棚田をやっているのですが、果樹とかもやっていて、リンゴを作っていたりサクランボを作ったりしておられるので、時間がどんどん割かれて忙しいのです。そのような中で棚田もやらなくては行けなくて、棚田は普通の田んぼよりも草刈り等の時間もかかりますので、そのような部分をもっと楽にするためには、何かしらで草刈りを自動化するとか、肥料や農薬を撒くのを自動化するとか、そのようなものが必要かと思いました。

そこで、最初は「自動化で作業は楽な棚田」というのを提案しようと思ったのですが、そこで完全自動化するともう1個問題が起きることが分かったのです。それは、完全自動化して暇そうになると、なぜか上からもっとこのようなことをやれとミッションが降ってくるのです。つまり全自動化しては行けないのです。半自動化するのです。リモコンを持つなどして「私は作業をしていますよ。」という雰囲気を出しながら自動化していかないと、仕事をしているように見えないのですよ。仕事をしているように見せながら楽することをして、考える時間をとることが一つ大事なところかと思いました。「半自動化の作業の楽な棚田」というのが提案1です。

そしてもう一つ、「観光客に気を使っちゃう問題」なのですが、やはり気を使うのは、お客様を大事にしたいのですが、お客様を大事にしたいと思えるぐらいまで我々のテンションがあまり上がらないというのがあり、それはなぜかと



いうと、棚田は写真を撮って見るだけで、あまりお金が落ちないからです。あとは、来ていただいでコミュニケーションをとるのですが、来た方は一期一会なのでお話とか楽しいのですが、聞かれることはほとんど同じだったりして、特段こちらに利益が還元される知識が増えるわけでもないの、なかなか観光客が来ることにテンションが上がらない。一番分かりやすいのは、観光客が来たら分かりやすくお金が落ちるようになっていけば、1人の観光客が上から歩いてきたら、「500円が降りてきたな。」となってくれたら、「10人降りてきたら5千円か、今日は1万円か嬉しいな。」と思えるようになるのかと思います。

または若い女性しか来ないような棚田にして、若い子だけ来ればテンションが上がるとか、テンションの上げ方は自由だと思うのです。そのような感じで観光客が来たら農業をやっている人のテンションが上がる、そのような棚田にしていくことによって、この「観光客に気を使っちゃう問題」をいい意味でポジティブに好転できるのではないかと考えました。

**高桑氏** 今のモデルの中では、「日常」を大切にしながら、イベントはそれなりにやっていかななくてはいけないというわけです。

**佐藤氏** 高桑さんがおっしゃった通り、入りはイベント交流から僕らも入ったのです。そこから学び、日常にいったのですが、そこから、イベントに戻るサイクルの部分につなげられないということです。

**高桑氏** 続きまして、<sup>いなぐら</sup>稲倉棚田の石井さん、よろしくお願いします。

**石井氏** 信州上田の稲倉の棚田から参りました地域おこし協力隊の、年代的には問題があるかと思うのですが石井と申します。私は去年の8月に委嘱されまして、まだ1年経つ前で、やはりイベント交流を学びにしようという問題を抱えていると思っていました。今まで地域おこし協力隊が入ったこともなく、普通の棚田で、なんと驚いたことにJAに普通にお米を卸しており、ちょっとまずいところからスタートしたのです。まず人を呼びたい、注目を浴びたいというところからスタートしているのが現実です。そのような中で色々努力することで、ご協力をいただきながら少しずつ発信力とか、実際にものを売る力を蓄えているところです。やはり今はイベントとか、

現状を分かってもらうところに注力しています。ただおっしゃる通り、だんだん別のところにシフトしていかなければいけない、まず初歩的な段階だろうと思っています。これはどこも抱えるサイクル、順番なのかという気がします。

**高桑氏** もう一つの視点で、「学び」の場であるということをおっしゃっている方がいまして、NPO法人<sup>あいだうえやま</sup>英田上山棚田団さん、その視点からお願いします。

**水柿氏** 岡山県的美作市の上山というところから来ました。僕はもともと2010年から2012年まで3年間、地域おこし協力隊でした。出身は東京だったのですが、協力隊が終わってもそのまま引き続き上山に住んでいて6年になります。今月結婚します。僕らは都会から移住した人とか、大阪の方が月2回ぐらい通ってくる形で棚田の再生などを、移住したメンバーと他所者を中心に進めているのですが、やはり最初はイベント交流を色々やりました。本当に色々やって、空いている棚田にヘリを飛ばしたこともありますし、棚田で結婚式をもちろんやりましたし、映画祭といって巨大なスクリーンを軽トラに単管で括りつけて、幕張りの白シートに映写して棚田の映画祭をすとか、棚田で1000人のタップダンスをすとか、色々なことをしました。しかし、結構疲弊するのです。僕らは棚田15haぐらい再生しているのですが、そもそも管理だけでも疲弊して、イベントもするので、かなり辛くなってきています。

やはり住んでくると日常とか学びの部分、普段どう使っていくかということにどんどん考えがシフトしています。今は学びの部分で振っていただいているのですが、特に日常の学びのところを強く言いたいと思っていて、日常のところを言いたいの、お金が落ちないところです。来て写真だけ撮られて、棚田の畦を踏まれて、せっかく作った畦が崩されて、そのようなところが日常的な課題と捉えています。見に来られるだけでなく、どう地域に還元するかということなんです。僕らは今トヨタさんから2億円ほどいただいて一緒に農業、観光、あとは住民の生活支援をやっています。そこで大事にしたいのが、中東の油を使ってお金を払っている話もありますけど、今小型EVに乗ってもらった静かな地域の観光をガイド付きですとか、お金を落としてもらえる仕組みというのをするようにしています。企

画を練っているところなのですが、勝手に車を乗り付けてきて、道の真ん中に置いて写真を撮っているとか、人によっては、人の庭にまで行って玄関先にまで入って、「この方が景色がいいから。」と言って、観光客が勝手に入ってくるとか、そのような防犯上とか、あまり良くない問題も棚田地域にはあると思うのです。勝手に自分の敷地に入られる、そのようなことを解消してお金を落としてもらうのをきちんとやらなくてはいけないというのが、まさにその通りだと思っています。

学びの場として「いいのじゃないかな。」というの、この上の世代、昭和1桁代の世代が必死に守ってきて、なんとかそこの地域をどう守っていくか、どうつないでいくかというのをせっかく蓄積してきているのに、その下の世代の人たちに全く引き継がれていないまま、今にきているというのを現状として感じています。皆土地の守り方も知らなければ、守ろうというプライドも正直無いのです。なので、協力隊が終わった後に僕は爺ちゃん・婆ちゃんの困りごとを解決する「孫プロジェクト」というのをやって、爺ちゃん・婆ちゃんの孫になりに行くという仕事をしています。話を聞いていると、今の70代後半と80歳過ぎぐらいになると、自分の家の周りだけでなく、離れた農地もお金を払ってでも草を刈ってもらおう状況になっています。その下の世代になってくると、もう家の周りだけきれいになったらいいかと、土地を守る意識が格段に変わってくることをすごく感じていて、そこの間の世代は、皆さん都会へ出られた方とか、意識として土地を守っていかなければならないことを教育として教わってこなかった方々が多いと思います。その下の世代、もう1個飛ばした世代に学びの環境、農村の環境をきちんと体験してもらって、原体験としてそのような農村で爺ちゃん・婆ちゃんと一緒に暮らしながら土地を守ることを経験するとか、そのようなことを身に付けた人材を農村から育てないと、地方の現状の視点を持った人が育たないまま、若者は大学とかで出してしまうので、都会にばかり人が集まってしまいます。そこをもっと、企業に送り込む人材も地方の視点も得たうえで送り込むとか、そこの地域に残って地域を守っていくとか、そのようなことを棚田地域・農村地域はしっかりやっていかなければいけないかと思っています。

もう一つ思うのは、それをまた企業とか都会の方に売り込むことで、今まで景観保全でお金を支援で出してきた企業さんとかも、やはり人材育成にもお金をしてくれるという流れにすることです。今までは景観保全だけに払っていたのが、きちんと農村にお金を出せば、そのような地方の視点を持った人材が返ってくるのです。これからの企業の新しいビジョンとして、地方に向けた視点を持った人材をきちんと得られるようになる、体力が無くなってきている企業も、景観保全でも農村にお金を出す意味が出てくるのかと思います。景観保全だけではない寄付をきちんといただく理由を、農村側も作っていかないといけないかと思っています。

**高桑氏** 日常で、実際棚田で日常をやっていくには、農家さんだったらできるのですが、我々外から入った若い人たちが、このような棚田の日常で実際はどうなのだというところを、松崎町の有馬さん、棚田で稼げる場所が良いということですが、どうでしょうか。

**有馬氏** 静岡県伊豆にある松崎町から来ました有馬と申します。石部<sup>いしぶ</sup>という棚田で保全をやっています。今、地域おこし協力隊3年目で、今年度3月末で任期が終わるのですが、私は協力隊としては一番悪いパターンで、棚田保全はしっかりやってきました。一方でこれから食べていくにはどうしたらよいかを疎かにしてしまって、どのように生きていこうかと考えています。家も見つかると思っていたのですが、空き家はあっても借りるのはなかなか難しい。今住んでいるところも次の隊員が入ってくるため、空けなくてはいけないと思いつつも、まだ次に住む家が見つからないのが現状です。

**高桑氏** 棚田をどのように活かしていきたいと考えていますか。

**有馬氏** 棚田には可能性があると思います。そもそも協力隊になったのも、都会から出て黙々と土いじりしたいという思いがありましたので棚田の保全は本当に一生懸命にやってきました。最近ヤギも飼い出して翻弄されているのですが、食べていく術が、棚田の仕事とヤギの世話など、そのようなことで手一杯で、なかなか考える時間も無いのです。

**高桑氏** もう一人ぐらい農家さんはいらっしゃいますか。農家さんの立場、伊藤さんはいらっしゃいますか。個人農家の立場として棚田保全をど

う考えますか。

**伊藤氏** 去年から佐渡に引っ越して米作りを始めました伊藤竜太郎と申します。ひたすらこの日常のお米づくりをずっと続けていれば、棚田は守れると単純な考えでいます。それしかなくて、捻りがないです。イベントは、まず情報発信をしていくことはやった方がいいと思います。

**高桑氏** 棚田にロリータファッションの女の子を呼びたいというのは君ですね。私も同じことを考えたことがあって、棚田で女の子を呼んで写真撮影をして、ちょっと泥が付いたりして、棚田の「泥ドル企画」一緒にやりましょう。傾斜角度から見上げて撮るのがいいかと色々盛り上げるものがあるかもしれないです。

**伊藤氏** 去年は見習いで農家さんのお手伝いに来て、1年だけ仮移住しようかと思っていたのですが、いきなり「田んぼを4枚貸してやるからやってみろ。」と言われました。ただ、来年やる分の農地とか、これからの家はなかなか借りられずじまいなところはあります。ただ続けていくしかないのです。「田んぼをしっかりと続けていくと、周りの人もやって欲しいと言ってくれるようになるよ。」と言われるので、ひたすら泥まみれになりながらやっているだけなのです。

**高桑氏** 佐渡で棚田の泥ドル企画をしましょう。

NPO法人棚田LOVER'sさん、都市と農村をつなげるという意味で、我々と同じような団体かと思いますがその視点からお話をお願いします。

**井上氏** 棚田LOVER'sの井上と申します。今回、10年間棚田LOVER'sをやっている代表が来られなくなってしまって、まだ1ヶ月しか経っていない私ですが、「今どうしよう」と思っています。都会から人を呼ぶのは難しく、代表はイベント大好き人間で、このようなことを皆さんの前で言っているかわからないですが、イベントだけはひたすら1ヶ月に8回ぐらいやったりしますが、1ヶ月いて思うのは、あまりお客様はいないということです。「皆さんはどのように人を呼んでいらっしゃるのだろう、どうやってイベントを成り立たせているのだろう。」というのを学びたくて来たので、実際成功しているとは言えないです。ひたすら都会のカフェとかにチラシを置いていただいて、見た人が来てくださっているか、来てくださっていないかと分析もきちんとできないまま、イベントばかりたくさんやっている状態なので、今は反省点ばかりという状

況です。

**佐藤氏** 棚田LOVER'sさんは今の話だとどうやって生活しているのか、よく分かりませんが。

**井上氏** 1ヶ月しかいない私が言うのもなんですが、食べていけているのはやはり補助金です。補助金しかない私は今思っています。補助金が尽きたとき、「どのようにしてこれから生活していくのだろう。」とずっと思いながらやっていて、そのような知恵も皆さんに今日お伺いしたいと思っています。

**高桑氏** 次に学びは色々な意味もあると思うのですが、学生とかはこの学びから入ってくることが多いと思いますが、学生さんが1人いたと思うのですがいかがでしょうか。

**江龍田氏** 和歌山大学観光学部地域再生学科3年の江龍田と申します。僕自身は孫ターンで、今大学の授業に行かずに半年間佐渡に住んでいます。僕は先の話だと、家とか農地は元々爺ちゃん・婆ちゃんが持っていて、一軒家があって、今田んぼは人にやってもらっている状態です。その学びの視点ですが、僕は和歌山で棚田ファームという団体の活動をしていて、棚田ファームは和歌山県が全国棚田（千枚田）サミットをやったときに作られました。僕自身は直接絡んでいなかったのですが、僕が入学してからもずっとその棚田ファームの活動は続いていて、最初はイベントとか、棚田サミットがあるから作られたので、若い大学生を呼ぼうという趣旨から始まったと思います。年々先輩方が卒業していく中で、何が足りないかと考えたときに、学びまで行っていないと、行って体験して終わりという、それだけで良いと地域が思っているのならそれでいいと思うのですが。僕自身地域に入っていく上で、もっと学んでいけば気付くことはたくさんあるというのを実感しました。今、前期の代表は別の人にやってもらっていますが、10月にまた大学に帰ったら、大学でも出来る資料とかを見て学べることと実際に地域の人に話を聞いたりしてそこから学べるものがあると思うので、「体験」から「学び」までどのように落とししていくか考えています。学生自身も最初のきっかけは、例えば単位を取りたいから棚田に来ている人もいて、元々棚田に興味があって来ている人もいて、学生の中にもばらつきがあります。そこら辺のバランスをどのようにとっていくか考えて、そこに楽しさも加わったらいいかと思っ

## U30 棚田サミット

ています。10月にまた大学に帰ってから実際やってみるのですが、残りの佐渡の期間で色々考えていけると思っています。

**高桑氏** もう一つの視点があるかと思うのですが役所の視点から棚田をどう活かしていきたいかをお願いします。

**熊懐氏** 福岡県うきは市の熊懐くまだきと申します。私は市の職員ですが、ここのような格好でいつもいるので地域おこし協力隊とよく間違えられます。私1人で棚田の担当としてやっているのですが、ずっと関わっていて裏も表も知っています。20年前ぐらいからイベント交流を市（町のときに）が仕掛けて、棚田サミットを呼んできたときぐらいから棚田オーナー制度をやっています。ただ、棚田オーナー制度をやっても完成棚田オーナーです。100組ぐらい毎年常連さんが来てくれるのですが、市役所の職員が告知して、「このようなおじちゃん達が頑張っているからどうですか。」ということをやっています。どうにか100組から120組ぐらいが来るのですが、おじちゃん達はあまり関心がなく、普通に米を作っています。だから喋りも普通のおじちゃんぐらいのところで止まっているのです。私達としては、その人達が、「よし、俺が喋ったらこれだけ来るぞ。」と感じて欲しいのですが、興味がないのです。うきは市は福岡市まで1時間ぐらいで行けるので、子供さん達もそっちに行ってしまう。「そこそこ幸せだけど、子供には良いところだ。」と言わないのです。九州大学等の大学も近いので、学生は「棚田を学びたい。」と感激をして、「学びたい。」と来てくれます。10人、20人連れて来てくれるのですが、「地元の人には勝手にやってろよ。」みたいな感じで、掴まったおじちゃんが「教えてください。」と請われる感じなのを間を取っているのです。棚田米を作れば売れる、そこそこの値段で売って終わっている状態です。20年経った今後継者がいないという状況になっています。色々な主体を市役所としては間を取って呼びたいので、九州大学のお世話もするし、どこでもお世話もするとなってしまう。そして、そこそこ幸せのまま多分棚田が続いていかないのではないかと懸念を持っています。

私としては、マウンテンバイクという切り口で、たまたま私が個人的な付き合いで知り合った人が、「熊本まで行っているのだけど地震で行けないんだ。」とか、遊ぶのに2時間、3時間かかっ

ているので、「じゃあ、うちに来ればいいじゃないですか。」と言って紹介したら、「この坂がすごい。」とか変な興味を持っていただいたので、「坂で遊びましょうよ。」ということから、入ってくれる人が増えたと思うのです。入ってくれる人を増やしていくことをそれぞれがやっていけば、何かおもしろい活動になっていかないかと思っています。

**高桑氏** 続きまして、新潟県三条市の山田さん、よろしくをお願いします。

**山田氏** 私は新潟県にある三条市から来ました、三条市・営業戦略室の山田と申します。三条市は全国的には金属加工業の街として知られていますが、福島県と接して市の東部は、豊かな自然きたいもがわに恵まれています。三条市には北五百川集落に棚田がありまして、そちらは佐野誠五さんという60代後半の方が管理しています。三条市としましては、そちらを地域固有の財産として市内外の方に広くPRしています。

本日U30サミットに参加の若い世代の皆さんへ、佐野さんからメッセージを預かっています。この場をお借りし、私が代読させていただきます。

私は三条市に住む佐野誠五と言います。67歳です。私の棚田は北五百川の棚田と言いまして、日本の棚田百選に選ばれた棚田です。その棚田は約400年続いていると言われています。しかしその棚田も私の代で終わりです。私には娘夫婦・孫もおりますので後継ぎはいます。でも、子供たちには、「俺が死んだら棚田は絶対やるな。」と言っています。それはなぜかという、簡単です。棚田を作っていたのでは生活ができないからです。私の棚田は75aです。そこで採れるお米は50俵です。自家用米に13俵残し、販売できるのは37俵です。その収入は90万円です。しかし農機具に850万円掛かっています。つまり90万円の収入を上げるために850万円を投資しているわけです。その他に苗代、肥料代、農薬代、農機具の修理代、諸々を入れると手元には30万円程度です。農機具も10年から15年で更新です。そんなことを考えると子供たちに棚田を守れ、なんて言えません。しかし、私の子供も棚田が無くなってもいいとは考えていません。ではどうすればよいか。

これは国の問題でもあります。棚田を米の生産現場としか見るのではなく様々な省庁の視点

から見てはどうでしょうか。棚田の特殊性からみる生物の多様性、棚田が荒れることによって環境に与える影響等々です。また、棚田には強い保水能力、水害や土砂崩れを防ぐ防災の面からも必要です。そして棚田は日本の米作りの始まりだと思います。つまり、米作りの原点です。今でこそ土地改良の灌漑によってどこでもお米は作れますが、昔は田んぼに水を入れるだけでも大変でした。昔は、山の湧水を利用した棚田がでないと作れなかったわけです。

ですから棚田は日本の米作りの原点です。その歴史が無くなるようとしています。これから棚田を守っていくのは農家の皆さんだけでは無理です。ぜひ皆さんの力を貸してください。このままではあと数年、長くてもあと10数年で確実に棚田が無くなることを心配して発言をさせていただきました。ありがとうございます。」

以上が佐野さんのメッセージです。

佐野さんは、自分の土地である棚田を三条市の観光資源として積極的に活用してほしいと、いつも快くお話ししてくださいます。今回、「私の代で終わりにしたい。」と聞き、三条市としても、これからどうやって棚田を守っていこうか考えるきっかけになりました。本日、皆さんのお話を聞いて、地域おこし協力隊の方々をはじめ、様々な角度から、ヒントをいただくことができました。

**高桑氏** 今日は行政の人あり、学生あり、地域おこし協力隊あり、農家さんあり、色々な視点の中から、どの辺から棚田に入っていくのかがよく分かると思います。

さて、次は「双六」についてお願いします。

**玉崎氏** 全然U30ではないのですが、NPO法人棚田ネットワークで活動させてもらっています玉崎と申します。Facebookの書き込みで「みんな堅いな。」と思ったので、「もっと前向きに楽しい、気分が上がるものを書き込んでいこう。」と思って、いくつか日常から離れた部分で書き込みをさせてもらいました。

よく等身大の将棋とかをやっている場所があります。「双六」というのは、棚田を見ていると双六のマス目に見えてきて、そこで同じノリで双六もやれるのではないかと思います。棚田の1枚ずつを進んでいく、そのマス目に入ってくると色々課題が書いてあって、例えばその田んぼの米を全部刈り取るとか、そのような無茶な

指示とかを経験しながら、棚田全体を楽しむというのがおもしろいと考えました。基本的にイベントが、田植えとか稲刈りなどの時期ではないときに棚田を活用するのがおもしろいと思い、考えました。双六も田植え前の水を張っただけの状態のときとかに泥まみれになりながら遊ぶのがおもしろいのではと思いました。

今、日常の部分で大変という話が出ていて、僕も実際棚田ではオーナー制度でやっているぐらいで、実際のことは分からないのですが、他にも大変な仕事はたくさんあると思うのです。知り合いにプログラマーとかがいたり、休みは不定期だし全然寝れてない人もいたり、でも仕事をやっている。何が違うのかと言ったら、やはりやっていた仕事なり、ものに対しての成果なり、反応なりが見えるからやっていると、そこに満足感を得ることが出来るからやっているとと思うのです。棚田で米を作っているというのを、JAに卸しているだけだったら満足感は全く無いし、多分そのような結果が見えない作業が、結局人間のモチベーションを下げていくと思っています。だから自分は何をやっているのかが、誰に対してという部分も含めて成果が見えたり、モチベーションが上がったりする作業でなくてはならないと思っています。それは人とお金だったり、もしくは交流だったりとかですが、イベントはイベントでそこがきっかけになればいいのかという思いもあります。

**高桑氏** 私も都会で育って都会に生きている人間ですが、実際にイベント交流が無いと、我々は絶対に日常や学びには入っていけないです。いきなり日常に入れられないし、いきなりこのような学びの場に入ることもできないです。だから我々にとっては大変という情報は分かっています。けれどもイベント交流から入るしかないという都市住民の気持ちもあると思います。玉崎さんも多分同じ立場だと思うのですが、色々な人が棚田に入っていくきっかけ、実際に入れば、私もインターネットの世界に生きている人間ですし、玉崎さんはインテリアデザイナーだし、実際にそのような人たちが色々なところで協力できる。そのようなきっかけにもなるということです。

次に協力隊の視点から佐渡の岩崎さんお話をお願いします。

**岩崎氏** U30サミットのFacebookページを作ったり、準備運営を高桑さんと共に進めてきた佐渡

# U30 棚田サミット

市地域おこし協力隊の岩崎貴大と申します。僕は今、協力隊自体は3年目で、この7月が最後の月となります。僕は生まれがこの佐和田地区で、佐和田の中でも窪田という市街地に近いところに生まれました。この辺もよく遊んでいた場所だし、どうして棚田の話をしているのか不思議だと思います。幼馴染みの友人が旅館をやっています、協力隊期間が終わった8月からは旅館の仕事の中で棚田とつながれたらいいと今考えています。佐渡の棚田に関わっている地域おこし協力隊は、みんな佐渡棚田協議会のサポートという形で活動をしてきました。

僕や他の隊員も休日を利用してお世話になっている人の田んぼを借りて少しお米を作るだけで、お米作りの大変さは、本当の意味では分かってないと痛感しています。

そのような中で、佐渡棚田協議会の事業で地域おこし協力隊が何かできないかと、先週「棚田で遊ぼうどろんこバレー」というイベントを開催しました。今年で3回目になりました。イベント交流で、まず棚田に関わっていない若い人たちに棚田に来てもらって「景色がきれいだな。」とか、それだけを思ってもらうのではなく、「お米はどういう場所で作られているのか、棚田っておもしろい、もう1回行こうかな。」と棚田を全身で感じてもらいたいと思って「棚田で遊ぼうどろんこバレー」を企画しました。最初は続くのかと不安があったのですが、3回目になって、常連の人たちも増えたりして、意外と何回も続いてくると、学びにシフトしてきている感じもします。どろんこバレーが終わった後に色々つながりも増えて、そのあとに「何々の棚田へ行ってみてもいいですか。」となってきて、そこで各自が棚田を案内したりしています。さらにそこにいる人に結び付けられるように、イベントを玄関口にし、日常まで、「どろんこバレー」を一つのきっかけにしてつなげていけているのではないかと思います。協力隊はイベントなどが玄関口になっていくかもしれないですが、日常までいったらまた一周し始めるのではないかと思います。農家の人たちは日常の部分が強いと思うのですが、協力隊は、全てを行き来できる存在だと思うので、自分の中に日常を大切にしていかなければいけない部分、学びの部分が大事だという、それぞれ自分が大事にすることは必要かもしれないです。全体的に見ながら、地域のことを考え

て、日常の部分の人を伝えようとか、学びの部分はこの人を引っ張っていこうとか、中心的な存在になって3年間で段階を踏んで学んでいたら協力隊はいいのではないかと思います。だからこのサイクルは今後も活用できるのではないかと思います。

**高桑氏** 続きまして、棚田ネットワークの阿久澤さん、お願いします。

**阿久澤氏** 棚田ネットワークの阿久澤と申します。年齢的には明らかにU30ではないのですが、棚田好きで色々なところの棚田を見に行ったり、新潟の十日町に結構通っています。今棚田の採算性の話が出たのですが、聞いて思ったのですが、色々な棚田に行った中で、先月に長野の天城の棚田に初めて行って衝撃を受けたのです。駐車場が有料だったのです。ゲートは無いです。きちんと言葉が書いてあって、「この棚田を維持するためには、こんなに大変で時間がかかっています。」という内容です。「500円でも1,000円でも入れてください。」と書いてあって、自分はその時は写真を撮りに行ったのですが、当然お金を入れました。500円は考えてみたら安いと思いました。他のところの棚田も見晴台を市が作ってくれていて、立派な駐車場もあります、皆無料なのです。水と空気と棚田の写真は無料だという雰囲気当たり前のようがあるのですが、写真を撮っている人は、中には仕事としている人もいますから、やはりその景色を生活の糧にしているのであれば、何かしらの形でお金を払ってくださいというのは当たり前の話ではないかと思います。

ちなみにここにいらっしゃる棚田の方で、駐車場でお金をもらっている棚田はありますか。

**熊懷氏** うちはイベント期間中だけ協力金という形でもらっています。

**阿久澤氏** お金をもらうのは本当に考えてもいいと思います。

例えば、星峠の棚田にはいつ行っても10人ぐらいカメラマンがいます。毎日カメラマンが10人来て、年間で365日、1人1回500円でももらったらものすごい数の駐車場収入が入ると思います。それは正当な対価として考えるべきことではないかと、この間天城の棚田に行って感じました。

**久保田氏** 岐阜県恵那市の坂折<sup>さかおり</sup>棚田から来ました協力隊の久保田と申します。質問なのですが、そ

の駐車場の管理はどうなっていますか。無人で箱に入れるのですか。

**阿久澤氏** 無人の箱で、そこはゲートも無いので、基本的には良心に頼る。ただ、そこに言葉が書いてあって、それを読むと決して払わずに通り返ることが良心としてできない、まさに善意で入れてくださいという形です。なので当然皆さん周りを見てわずかでもお金を入れています。

**久保田氏** 柵田の入り口に駐車場がある感じですか。それを設けることによって気になるのは、路上駐車をする人が出るのではないかというのがありますがいかがでしょうか。

**阿久澤氏** それが無くても皆道路脇に止めるのではないかと思います。実際のところ、駐車場があっても無くても写真を撮りたい人はどこでも車を止めて、写真を撮ると思うのです。

**久保田氏** 柵田の道路は1本でしたか。

**阿久澤氏** 1本だったかどうかまでは覚えていません。そこがいわゆる入口で、そこに車を止めて、その中には歩いてカメラを持って皆行って写真を撮るといような形です。

**高桑氏** どのように書いているのか気になります。

**阿久澤氏** 結構ジーンと来ることを書いてあります。覚えていなくてすみません。後で調べてみます。

**高桑氏** どちらにしてもお金をどこに落とすかで、柵田って単体でお金を得ることはできません。日常だけでは柵田は経済効率が悪いわけですし、イベントをやっても学びの世界だけでも、色々問題が出てきます。やはり複合的に色々なところでお金を落とすしていく一つの柵田のビジネスモデルみたいなものをこれから作っていかなくてはならないのだと今話を聞いて感じました。

**岩村氏** 富山県の氷見市にある柵田で協力隊としてこの4月から活動をしています岩村と申します。僕はまだ1年目というのもあるのですが、あまりイベント交流に現在は手を付けていなくて、一農家として耕作放棄地を再生しつつ、地元の農家さんたちが作った米を少しでも高く売れるような、僕らの柵田でも基本的にJAに卸している状況なので、少しでも高く売れる仕組みや販路を今拡大しようとしているところです。地元の爺ちゃん・婆ちゃんたちの収入を少しでも上げたい思いはなくはないのですが、柵田が将来的に継続していくためには、新しく農業をしたいという

人がきちんと収入を得られるような基盤づくりが何よりも必要なのではないかと考えています。柵田で作られた米を少しでも高くというのと、あとは空き家であるとか、農機具とかも、余った僕らにぜひくださいという呼びかけを地道にしているような状況です。

ただ、一方で柵田の米を買ってくれるファンづくりをする意味でも、イベント交流などは必要になってくると思っているので、それはまた今年の秋以降にイベントを少しずつしていきたいと思っています。まず一番大事にしたいと思っているのは、地元の爺ちゃんたちが作った米の販売、経済的なところを今は大事にしたいと思って活動しています。

**高桑氏** 日常を大切にしたいといっても、実際日常が無い柵田もあります。例えば、松崎町の石部柵田というのは農家さんがもういないです。あそこは保存会が農家さんから全ての土地を借りて保存会で耕作しているので、ある意味、石部柵田は実際柵田公園みたいなものです。そうすると実際日常が無くて、学び・イベント交流だけでなんとか柵田を継続していかなくてはならない状況であったりします。日常を大切に、実際に実働的にお米が作れるのは、それを売ることができるということなのです。

地域ごとに、このモデルの中でどこに比重を置いているかは、地域ごとの環境とか柵田の現状とか、そういったところで変わってくるのですが、皆さんに聞きたいのは、この3つとも大切だ、これはバランスをとってやっていかなくてはならないと思います。それが多分今の柵田の現状なのかということです。

「MICE」について教えてください。

**山田氏** うまく説明できる自信はないのですが、英語の頭文字を取っていて、MはMeeting、IはIncentive tour、CはConference、EはExhibitionですが、国際的な会議や企業のミーティングや学会など、今回の柵田サミットもそうなのですが、大量に色々な人を広域的に呼んで、地域には大量にお金が落ちるので日本中の色々な地域がそのようなMICEを開催しようと誘致をしているところが多いです。その国際会議ほど大々的なものでなくても、小規模なミーティングをあえて柵田で行って、そこから環境問題や食についてのテーマなどを考えるのがおもしろいかと思いました。そこでMICEを開催

# U30 棚田サミット



することで、その後リピーターの獲得にもつながると思うので、そのような取り組みがあるといいかと思って、役所の中で出た案を今日は皆さんにご紹介しました。

**高桑氏** 続きまして、「みんなの心のふるさと」について教えてください。

**友松氏** 広島県安芸太田町の井仁の棚田から来ました友松と申します。何で「みんなの心のふるさと」なのか考えたかという、僕は1年協力隊をやっ、て、ちょうど6月で2年目になったのですが、僕もやはり最初の6月の田植え体験会のイベントから協力隊の活動が始まって、そこから学びとか日常を学んでいこうとしていました。皆さんが思われるように観光客をただ呼んでも、歓迎されるかといったら、そうでもありませんでした。自分はイベントを、外向きのイベントではなくて地域の人にとって良いと思えるようなイベントをやりたいと思って、元々開催されていた「棚田サロン」という茶話会をもっと盛り上げようと思いました。井仁の棚田に来てくれている学生や棚田オーナーさんとか、森の幼稚園というような活動母体と一緒に地域の人と小さなイベント、行事、お楽しみ会などを開くのがいいのかと思って、それを自分が1年間やって一巡した結果、そこに行き着いて、全部学びとか日常に結び付くかと思ってやっています。

地域の人にとっても、ただ地域の人が教えるだけではなく、地域外の人から野草に詳しい人がいたら井仁の棚田に来て、井仁の棚田にある野草を教えてくれるのです。地域の人はずだの雑草と思っていた野草にすごく関心を持ってくれ

て、「絶対食べない。」と言ったのに、天ぷらにした雑草を美味しそうに食べてくれました。そういう外の人だけの学びでなくて、中の人にとっての学びにもなるような、そこに暮している地域の人が「ここで死ねて良かった。」と思えるようにしたいと自治会長も言っています。外の人・観光客は色々なレベルがあると思っていて、一番浅いレベルは見に来る人、次のレベルがその体験会とかで少し体験した人で、一番上にくる人は、学生とか森の幼稚園みたいな、自分で自主的に活動に来てくれて、かつ地域の人に自分の名前を売り込みたい、地域の人のも知りたいたいと言ってくれるような人をもっと増やしたいと思っています。広く・浅くではなくて、狭く・深くやっていきたいということで、そのような既存の棚田サロンを少し深めていっています。

そういう意味で、皆も佐渡の人だけでなく、外の人も自分のふるさとなのだと思います。

**高桑氏** 最後のスピーカーとしてものすごくまよりました。棚田という日常はあるのですが、今まで我々の棚田保全はおもいきり大きな三角形の中でやっていたのが、今のお話を聞くと、日常を大切にしながら学びもあってイベントもあり、無理のない持続可能な小さな三角形は、棚田地域それぞれ現状にすごく合っているのかもしれない。でも、日常だけでは絶対に無理です。これだけだと棚田はもう保全できていけない。かと言って、あまり大きなことをやり過ぎるととても皆疲弊して、色々な問題が出てくる。そこでの三角形の大きさが我々若い人たちが棚田に入ったときに、どのように視点を持ってやっていけるかがすごく大切になると思いますので、この辺をU30の宣言に盛り込みたいと思います。

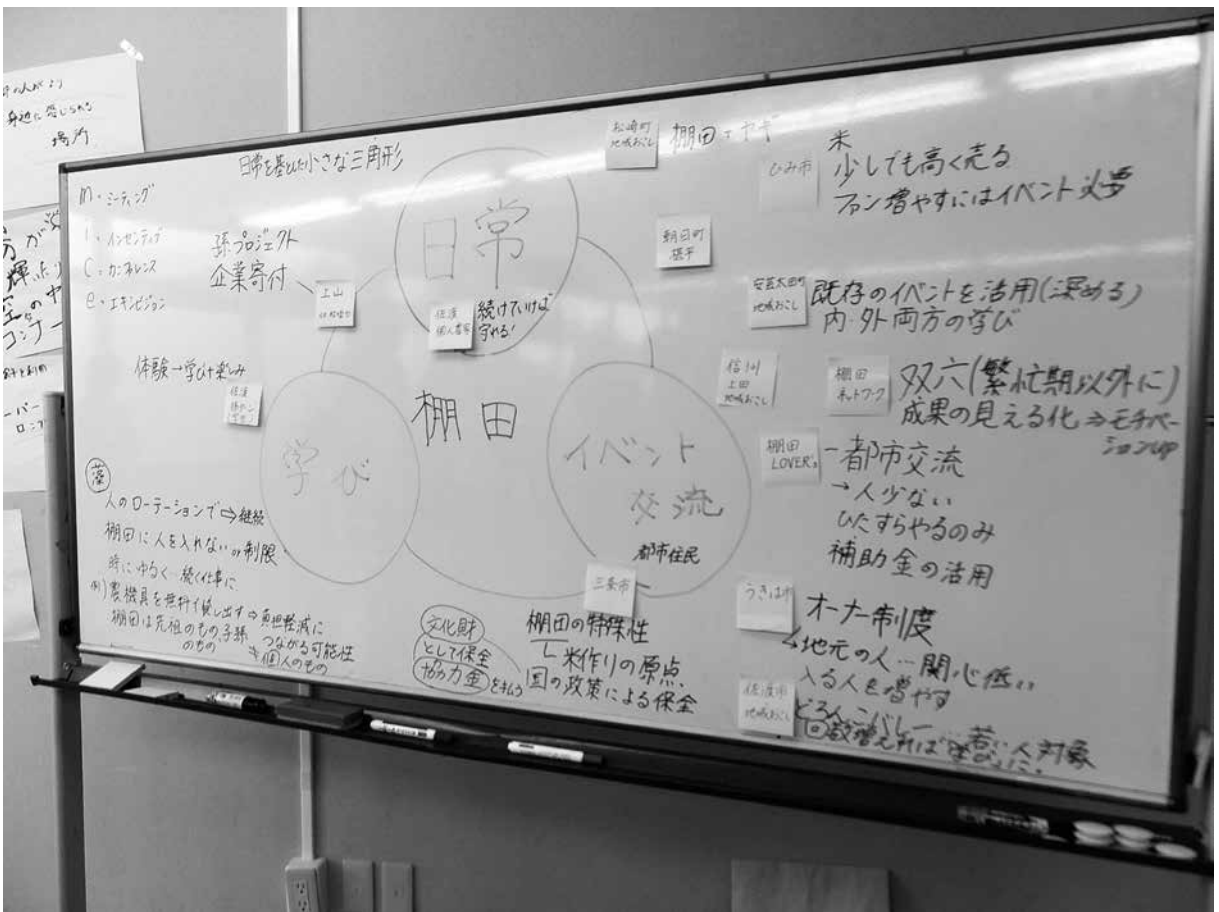
U30は今回初めての試みですし、最初から結果は出ると思っていませんので、ここに集まった方たちが新たにネットワークとか関係が結び付いていただいて、これから新しい流れが出来ていけばいいかと思っています。

今回でU30、第1回目です。皆さん1回目に出るのはすごいことなのです。ぜひ次回の棚田サミットでもこのような機会が持てればと思っていますのでよろしくお願いいたします。これをもって終了します。



## ■コメンテーターの藻谷浩介氏から、次のような提言・コメントがありました。

- ・ 棚田地域にどのようにお金を還元するかという問題は、世界遺産地域やエコツーリズムの実施地域を参考に、棚田の価値を理解し、同調し協力を払ってくれた人だけが入れるような仕組みづくりを行うと良いのではないかと。
- ・ 棚田は先祖から子孫まで引き継がれていくものであるという観点から考えると、必ずしもイベントばかりを一生懸命やったり、毎日根を詰めて世話したりするのがベストではない。ある程度の収入が得られ、他の仕事と組み合わせて生活することで、継続できて、後を継ぐ人も出てくるのではないかと。
- ・ 棚田を持っている生活というのは、プールやヨットを持っている生活と同じで、ワンランク上の豊かな暮らしと言えるのではないかと。いつか、棚田を持っていない都会の人間が、棚田を持つ人間をうらやむような時代が訪れることを期待したい。



## 第一分科会 棚田には米がある（報告）

座長 板垣 徹氏（㈱JAファーム佐渡代表取締役）



棚田米は、その苦労に見合うだけの価値があるのか、それはどんな価値なのか、その価値は、米を食べる側である消費者に果たしてつながっているのか、また、どう伝えるのがいいのか、というのが私たちに与えられた課題でした。

米穀店を経営しお米マイスターとして活躍の金子さん、料理研究家で人気ブロガーの西山さん、能登の里山で地域おこし協力隊員として活躍する山本さん、地元佐渡の海岸地帯で生産組織を立ち上げた坂本さんという多彩なパネリストの皆さんに語っていただき、コメンテーターとして佐渡トキの田んぼを守る会代表の齋藤さんには、ご自分の実践を踏まえて議論の整理をお願いしました。フロアからも、棚田米の美味しさについてやオーナー制度の現状など積極的に発言いただき、地元JAからは棚田米販売について報告いただきました。

それらの論議を通して確認したことは、次のようなことでした。

①棚田の風景や棚田米には、今日の日本社会にとって

失ってはならないかけがえない価値があること

②その価値を消費者に伝えるために積極的な情報発信が必要であること、特にネットで、動画も含めて、生き生きとした情報を継続的に発信し続けることが効果的であること、リーフレットはきちんと更新すること

③消費者、特に子どもに来てもらい、現場に立って風景を見てもらうことでファンをつくる取り組みが重要であること

④棚田支援の強力なツールであるオーナー制度を含めて、消費者との結びつきを強めること

⑤プロ農業者として、食味・品質の確保は大事。棚田米は文句なく美味しいのですが、その条件をきちんと管理すること。リピーターを獲得するには、「棚田」だけではなく、「うまい」も必要なのです。

このような、棚田米のリピーターが棚田の風景を支える仕組みを、各地で構築していくことを確認した分科会でした。

## 第二分科会 棚田には命がある（報告）

座長 豊田 光世氏

（新潟大学 研究推進機構 朱鷺・自然再生学研究センター 准教授）



「命」というテーマを掲げていた第二分科会では、子どもから大人まで、棚田を舞台に人々が成長し生きることについて、四名のパネリストとともに考えた。子供たちに「お米は美味しい」という原体験をもって欲しいという大野広幸氏は、栄養士や職員も巻き込みながら、棚田の価値を体感する機会を作っている。竹田和夫氏は、大学生の教育を通して、棚田地域の発展の手がかりを考える。多様な専攻の大学生とともに、棚田を生かす方法を様々な視点から提案し、現場に赴いて可能性を検討する。

棚田の保全是、国外でも大きなチャレンジだ。中村浩二氏は、能登地域で展開した里山マイスター養

成の経験を生かして、フィリピン・イフガオの棚田地域で人材育成に取り組む。地域の人々が自ら目標を立てることを支えていくことが重要だという。

棚田での耕作は、容易ではない。だからこそ、目的意識が必要であるし、何かを達成した時の喜びも大きい。本間太郎氏は「百姓は目標をもって挑戦し続ける存在だ」と語る。夢をもち、挑戦し続ける、そんな背中を見て欲しいと話す。食の安全性への徹底的なこだわりのもと、米作りに夢中になって取り組む姿は、人びとの共感を呼び起こすに違いない。棚田で描く夢を通して、人々がつながることができたら、きっと大きな可能性が生まれるだろう。

## 第三分科会 棚田には温ぬくもりがある（報告）

座長 森山明能氏（榑御祓川 シニアコーディネーター）



第3分科会では、棚田の米でも生物多様性でもない「第3の価値」に焦点を当てた。最終的にサミット共同宣言の一文として、「私たちは、過去から受け継いできた棚田地域の環境とコミュニティを次世代につなぐため、外部との交流を通じて、自分たちが誇りと楽しみを持てる地域資源の発掘・発信に努めます」という内容をまとめるに至った。今後棚田地域で意識すべき①目的、②方法論、③努力行動指針を示したわけだが、この一文に至るまでの議論を少し紹介したい。

まず、どんな地域にも資源はある。ましてや棚田には豊富にある。問題は資源を、活用できる資源＝地域資源に変えていけるかだ。地域資源として発掘するためには、外部との交流を積極的に図り、それ自体を楽しみとしながら継続していくことが重要であるとされた。

さらに、その外部交流のプロセスの中で、「文化的誇り」や「楽しさ」が棚田地域の子供達に伝えられていることも報告された。棚田地域の環境資本と

社会関係資本（コミュニティ）

を次の時代に繋げるきっかけも外部交流に起因することを示唆している。勿論その際、経済的な資本も必要であるが、まずはしっかり地域の「光」を育むこと。それがしっかりできれば「光を観に来る」という本来的な地域への「観光」も活発化していき、経済的資本も蓄積されるという議論であった。

最後に、今回の分科会の本質は齋藤氏が指摘してくれた気がしている。彼女は自分が若い頃、棚田は遊び場で家族と友達のいる楽しい場所だったと言う。だからこそ、その楽しさを自分の子供たちにも感じてもらい故郷・岩首を好きになってもらいたいということである。

この「楽しいから好きになる」という単純な一言にこそ、地域づくりの大事な部分が集約されていると感じた。「楽しいから好きになる」が時間（世代）と空間（集落内だけでなく外部の人も）を超えて行く時、本物の光がそこに生まれ、棚田の第3の価値が最大化すると思うからである。

## 棚田のまもりびとミーティング（報告）

座長 中島峰広氏（NPO 法人棚田ネットワーク代表）



恒例となった保存会の意見交換会は、本年度まもりびとミーティングの名で開催された。今回は、東日本（東北・関東・信越・東海）を中心にした保存会 28 団体に呼び掛け 17 団体の参加を得た。これを棚田オーナー制の実施状況や地域的バランスなどを考慮し A、B、C の 3 つのグループに分け議論を進めることにした。

まず、グループでの議論を進める前に、各組から NPO 法人である 1 団体を選び話題提供をしてもらうことにした。A 組の新潟県十日町市地域おこし実行委員会からは絶滅集落になるのは時間の問題といわれた池谷集落が国際 NPO の JEN との交流、地域おこし協力隊員や新しい I ターン者の定着などにより奇跡の集落といわれるほどに変貌を遂げたこと。B 組の岐阜県恵那市坂折棚田保存会からは棚田オーナー制を基盤とした取り組みを発展させ、取り組みの多様化と事業化を目指していること。C 組の奈良県明日香の未来を創る会からは、高知県梶原町に次

ぐ歴史を持つ棚田オーナー制

がマンネリ化して沈滞したため、活動の範囲を飛鳥川流域全体に広げ新たな活動を模索していることなどが報告された。

その後のグループでの議論では、A 組が組織におけるリーダーの育成、運営資金の獲得方法、棚田米販売については安定的な販売先の確保、ブランドの確立、小口にするなど販売方法の工夫の必要性などが論じられた。B 組では、取り組みの担い手としては若者よりも退職後のシニア世代をターゲットにするのが有効的であること、取り組みではボランティア活動から脱却し、事業化が必要なが論じられた。C 組では、保存活動を広域化し支える人を集め易くすること、担い手の労力として石川県輪島市白米での北陸地区国立大学 8 校、静岡県菊川市せんがまちでの静岡大学棚田同好会などの活動にみられるような学生の作業参加がきわめて有効的であることなどが議論された。

## 首長会議（報告）

座長 千賀 裕太郎氏（棚田学会会長）

首長会議は、農林水産省地域振興課の島田篤行課長補佐、中村弘志係長のご臨席を得て、1県・16市町村の首長らから「外貨獲得に向けた取り組み・ルールづくり」、「学校教育を通じた人材育成」の2テーマに関する報告を受け、質疑が活発に行われた。

「外貨獲得」に関する報告からは、棚田等の里山景観や棚田米を始めとした身近な安全・安心の農作物に好意を持ち、「お金を払ってでも棚田地域を支援したい」と「オーナー」制度や「棚田バンク」制度に積極的に参加する都市民の増加がうかがわれ、大地の芸術祭、案山子コンテスト、地元酒造会社と組んで「廃校」で酒造を行う例、韓国からの来訪者

と高校生が田植交流を楽しむ例など、参加者からの興味深い「外貨獲得」に向けた事例報告が相次いだ。

また、棚田地域で高齢化が進行する中「学校教育を通じた人材育成」の取り組みも進んでおり、小学校内で児童が米の栽培をしている例、小学校児童の農業高校生の指導による棚田での体験学習、JA主催による「こども農学校」での体験学習などが紹介された。とりわけ、保育園児など早い段階からの農業体験は、地域への愛着と農業への理解を深める上でとても大切、との意見が共感を集めた。



## U30 棚田サミット（報告）

座長 高 桑 智 雄氏（NPO 法人 棚田ネットワーク事務局長）

棚田サミット 22 回の歴史の中で、初めての若手部会として開催された「U30 棚田サミット」は、主催者である佐渡の棚田関係者の「棚田の未来を語る上で若者が集まるサミットにしたい」という思いが実現したものでした。

名称は「U30」ですが、20 歳～40 歳くらいまでの全国の若手農家、地域おこし協力隊の棚田班、自治体担当者、保全団体のメンバーなどが対象で、全員参加型の討論会で「棚田の夢を語り合いたい」というコンセプトで募集を開始し、事前に 30 名程度の申し込みがありました。若手の会議らしくあらかじめ Facebook 上でグループを作り、自己紹介と「棚田がこんな場所であってもいいと思う」をテーマに提案を書き込んでもらい、当日の討論の時間を有効に使うための工夫なども試みました。

当日は、さらに参加者や見学者が増え、会場は満

員。基調講演を終えたばかりの藻谷浩介さんもコメンテーターとして駆けつけ、賑やかな雰囲気の中スタートしました。Facebook 上で貰ったさまざまな意見をもとに座長が「日常の場」「学びの場」「イベント交流の場」という 3 つのカテゴリーを提案し、参加者にマッピングしてもらいながら、若者が棚田で活動する上で、地域の特性を踏まえた 3 つのバランスが大切であるとの結論を導き出し、共同宣言に提案することを合意しました。

すべてが初めての試みで課題もたくさん残りりましたが、棚田の未来を盛り上げて行く上では画期的な出来事となったのではないのでしょうか。形や名称が変わっても、棚田に関わる若者が集まって繋がれる場が、次のサミットにも引き継がれることを切に願います。



次期開催地  
あいさつ

長崎県波佐見町長

一 瀬 政 太 氏



只今ご紹介いただきました次期開催地、長崎県波佐見町長の一瀬でございます。まずは、第22回全国棚田(千枚田)サミットが多くの成果を得て、盛会のうちに終了されますことを心からお祝い申し上げますとともに、関係皆様方のご尽力に対しまして、心からお礼を申し上げます。

波佐見町からは、実行委員や鬼木棚田協議会の皆さんとともに、総勢37名が参加させていただきましたが、佐渡市の皆様方には心温まるおもてなしをいただき、また、全国から参加された皆様方との交流など、貴重な経験をさせていただきましたことに重ねてお礼を申し上げます。

さて、わが波佐見町は、長崎県のほぼ中央部で、佐賀県との県境に位置しており、佐賀県嬉野市や有田町に接している町でございます。海洋県、長崎県の中で、唯一、海に面していない町でございます。人口は15,000人、面積は56km<sup>2</sup>、うち62%が山林で、町全体が森林に囲まれた地形をなしています。

400年の歴史と伝統を誇る全国屈指の「やきものの町」として、また、「近代的農業の町」として、繁栄と進歩を遂げて参りました波佐見町は、今年で町制施行60周年の節目を迎えたところであります。

窯業、農業を取り巻く環境は、依然として厳しい状況でございますが、波佐見町では、平成26年に「観光立町元年」を宣言し、年間交流人口100万人を目標とする「来なっせ100万人」(わが町の方言で「おいでください」という意味です。)を掲げ、観光交流人口の拡大に努めておりまして、現在93万6千人を数え、いよいよ100万人達成も現実味を帯びて参りました。

その要因としては、若い女性をターゲットとした波佐見焼の人気上昇や宿泊施設、温泉施設の開設、体験型観光事業の推進、波佐見町のPR活動な

どを展開しており、波佐見町は、今「元気な町」として全国的に知名度が高まっているところでございます。

波佐見町では、来年度の開催に向けて、実行委員会や運営委員会を組織し、準備を進めているところでございますが、皆様方に喜んでいただくために、全国棚田サミットの構築に万全を期す決意で取り組んで参りますとともに、皆様方のご参加を心からお待ち申し上げておりますので、よろしく願いいたします。

結びになりますが、今後とも、このような大会を通じて、棚田を愛する心が芽生え、関係皆様方の連帯意識が高まり、引いては、地域の元気づくりや活性化に繋がりますよう期待申し上げますとともに、来年9月28日、29日の両日、波佐見町で再会できますことを心からお祈り申し上げます、次期開催地からのメッセージとさせていただきます。

本日は、本当にありがとうございました。



閉 | 会 | 式

閉会のあいさつ

新潟県佐渡市 副市長

伊 藤 光

皆様、今回は離島で初の開催となるサミットになりましたが、全国各地から遠路はるばる佐渡まで500名もの方々にお越しいただき大変ありがとうございました。

今回のサミットの藻谷浩介さんの基調講演では、里山や棚田が日本の価値観を変えるチカラをもっていることを再認識することが出来ました。

また、分科会では、棚田の米のブランド化や資源を活かす方法、物質に頼らない心の豊かさなど、ライフスタイルの価値観や生き方を考えたり、棚田のぬくもりを活かした交流促進をテーマにし、参加者全員で議論を深める事が出来たのではないかと思います。

更に、棚田サミット初めての取組みとして、より多くの若者から参加いただき、ともに棚田の夢を描き、実現するためのU30棚田サミットを実施することが出来ました。

このように講師の藻谷さんをはじめ、各分科会の座



長、コメンテーター、パネリスト、そして議論に参加いただいた多くの参加者、そして何よりこのサミットを支えてくれた多くのスタッフのおかげを持ち、非常に内容の濃く有意義なサミットになりました。大変ありがとうございました。

先ほど、世界農業遺産とともに日本で初めて認定された佐渡と能登の若者が発信した共同宣言については、皆様が議論したことが凝縮されており、皆様がそれぞれの地域に帰ってからの活動に対する指針となるだけでなく、これから日本全体で共有し、新しい価値観を広め、自然資本の持続性を高めていくことのきっかけとなることを期待したいと思います。

最後になりますが、このサミット期間中では佐渡の全てをお見せすることは出来なかったと思いますので、また、改めて佐渡にお越しいただくことを島民一同、心よりお待ちしております。

大変ありがとうございました。

閉会宣言

第22回全国棚田（千枚田）サミット  
佐渡市実行委員会  
副会長（佐渡棚田協議会会長）

大 石 惣一郎

只今、ご紹介いただいた第22回全国棚田（千枚田）サミット佐渡市実行委員会副会長を務めさせていただきます。大石と申します。

皆様、今回は離島で初めてとなる佐渡での棚田サミットに遠路はるばるたくさんの方々からご参加いただき大変ありがとうございました。

今回のサミットではこれから未来を担っていく若者に棚田に深く関わって欲しいという思いから1つの分科会として「U30棚田サミット」を開催させていただきました。開催にあたり多大なるご協力をいただいた関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。



この「U30棚田サミット」で出された若者の思いが棚田を取り巻く環境に明るい光を射す取り組みになることを期待して、来年のサミット開催地である長崎県佐佐見町へこの思いを繋ぎたいと思います。

最後になりますが、皆様、離島で交通事情が不便な佐渡へたくさんの方がご来島いただき本当にありがとうございました。

以上を持ちまして、第22回全国棚田（千枚田）サミットを閉会します。

ありがとうございました。

# 全国棚田（千枚田）連絡協議会 理事会

平成 28 年 7 月 13 日(水) 午後 5 時から、浦島において『全国棚田（千枚田）連絡協議会理事会』が開催されました。

出席者は、19 名（内代理出席 9 名）及び委任 5 名の計 24 名です。

最初に、熊本県山都町長工藤秀一氏より震災支援お礼のあいさつがあり、全国棚田（千枚田）連絡協議会会長 岸本英雄（佐賀県玄海町長）、第 22 回全国棚田（千枚田）サミット佐渡市実行委員会会長 三浦基裕（新潟県佐渡市長）あいさつの後、議事に入りました。

議案は次のとおりです。

- 議案第 1 号 平成 27 年度事業報告及び歳入歳出決算の承認について
- 議案第 2 号 平成 28 年度事業計画（案）及び歳入歳出予算（案）について
- 議案第 3 号 第 22 回全国棚田（千枚田）サミット共同宣言（案）について
- 議案第 4 号 次期サミットの開催地について
- 議案第 5 号 役員改選（案）について
- 議案第 6 号 中山間地域に対する各種法制度等の要望骨子（案）について

議事終了後、会員の入退会について、中山間地域に対する各種法制度等の要望について、棚田学会による官公庁事業への公募についての報告が行われ、閉会しました。



# 全国棚田（千枚田）連絡協議会 総会

平成 28 年 7 月 14 日(木) 午前 11 時から、アミューズメント佐渡大ホールにおいて『全国棚田（千枚田）連絡協議会総会』が開催されました。

出席者は、39 名（内代理出席 12 名）及び委任 52 名の計 91 名です。

最初に、熊本県山都町長工藤秀一氏より震災支援お礼のあいさつがあり、全国棚田（千枚田）連絡協議会会長 岸本英雄（佐賀県玄海町長）、第 22 回全国棚田（千枚田）サミット佐渡市実行委員会会長 三浦基裕（新潟県佐渡市長）あいさつの後、議事に入りました。

議案は次のとおりです。

議案第 1 号 平成 27 年度事業報告及び歳入歳出決算の承認について

議案第 2 号 平成 28 年度事業計画（案）及び歳入歳出予算（案）について

議案第 3 号 第 22 回全国棚田（千枚田）サミット共同宣言（案）について

議案第 4 号 次期サミットの開催地について

議案第 5 号 役員改選（案）について

議事終了後、会員の入退会について、中山間地域に対する各種法制度等の要望について、棚田学会による官公庁事業への公募についての報告が行われ、閉会しました。





# 資 | 料

## ★都府県別参加者数（※一般参加、来賓等、講師・座長・コメンテーター・パネリスト含む）

都府県名		人数	
東 北	宮 城 県	1	36
	山 形 県	35	
関 東	茨 城 県	4	88
	埼 玉 県	7	
	千 葉 県	36	
	東 京 都	37	
	神 奈 川 県	4	
中 部	新 潟 県	260	389
	富 山 県	1	
	石 川 県	40	
	長 野 県	52	
	岐 阜 県	10	
	静 岡 県	15	
	愛 知 県	11	
	京 都 府	1	
近 畿	兵 庫 県	3	30
	奈 良 県	12	
	和 歌 山 県	14	

都府県名		人数	
中 国	岡 山 県	3	4
	山 口 県	1	
四 国	徳 島 県	14	19
	香 川 県	2	
	愛 媛 県	2	
	高 知 県	1	
九 州	福 岡 県	25	134
	佐 賀 県	36	
	長 崎 県	65	
	大 分 県	1	
	熊 本 県	1	
	宮 崎 県	2	
計		700	

※新潟県内参加者内訳 佐渡市内193人 市外67人

## ★行事別参加者数（スタッフ等は除く）

区分		人数		
7月14日(木)	分科会	第1分科会	240	637
		第2分科会	158	
		第3分科会	142	
		棚田まもりびとミーティング	28	
		首長会議	31	
		U30棚田サミット	38	
全体交流会		500		
7月15日(金)	棚田現地視察	岩首棚田コース	80	455
		北片辺棚田コース	83	
		小倉千枚田コース	103	
		バスで巡る佐渡の里山里海コース	189	
7月15日(金) 7月16日(土)	交流プログラム	相川中学校ガイドと佐渡金山近代化遺産	12	86
		尖閣湾見学と民話語り	26	
		行谷小学校トキガイドとトキ野生復帰	29	
		高千中学校文弥人形と天然杉ハイキング	3	
		名物！漁師町姫津のイカイカ祭り見学	16	

## ★区分別参加者数

区 分	人数
一般参加者	666
来賓等	11
講師等	23
小学生 オープニング：佐渡市立金井小学校	135
高校生 オープニング：新潟県立羽茂高等学校 事例発表：新潟県立佐渡総合高等学校	40
スタッフ（実行委員会所属団体）	337
地元スタッフ	155

## ★宿泊者数

月日	施設数	宿泊者数
7月13日(水)	8	116
7月14日(木)	17	348
7月15日(金)	5	39

第22回全国棚田(千枚田)サミットへ  
ご参加いただき大変ありがとうございました。

## 佐渡棚田協議会 サポーター・会員募集中!!



Sado Tanada Conference

### ★佐渡棚田サポーターになる!

佐渡棚田協議会では、佐渡の棚田の保全を一緒に考え、活動していく佐渡棚田サポーターを募集しています。佐渡の棚田保全にご興味のある方、一緒に保全活動をしていただける方など大歓迎です!!

#### 【会員特典】

棚田米2kgをプレゼント、会報誌やイベント案内のお届けのほか、佐渡棚田協議会が主催するイベントへ優先的にご参加いただけます。

#### 【年会費】

個人会員 3,000円

家族会員 5,000円/法人会員 5,000円

### ★佐渡棚田協議会会員になる!

佐渡は、中山間地域の棚田等の景観や伝統文化、農法が認められ、平成23年に「世界農業遺産(GIAHS:ジアス)」へ登録されました。このかけがえのない財産を次世代へ継承するため、平成24年に佐渡棚田協議会が設立され、佐渡の棚田地域が気持ちを一つにしながら生産活動を行い、棚田保全に努める取り組みが始まりました。

佐渡の棚田保全活動や発信活動、地域間の連携交流活動など、協議会会員として相互に協力し活動いただける個人・団体会員様を随時募集しております。

#### 【年会費】

団体会員 3,000円/個人会員 1,000円

賛助会員 1口 1,000円

サポーター・協議会会員に関する、お申込み・お問合わせは

佐渡棚田協議会事務局へ(佐渡市農林水産課内)

TEL:0259-63-5117 WEBサイト <http://sadotanada.com>

※年会費、会員特典等は変更になる場合があります。詳しくは事務局へお問合わせください。

次回は、みんなで長崎県波佐見町へ行きましょう!!

平成29年9月28日(木)・29日(金)



第23回は

長崎県  
波佐見町へ

来なっせ!  
待っとうけん





新潟県 佐渡市

---

**第 22 回 全国棚田（千枚田）サミット佐渡市実行委員会事務局**

〒 952-1292 新潟県佐渡市千種 232 番地（佐渡市農林水産課内）  
電話 0259-63-5117 FAX 0259-63-5127 e-mail:info@sadotanada.com

---